

福岡南バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

第 5 集

筑紫野市所在永岡甕棺遺跡

(本文編)

1 9 7 7

福岡県教育委員会

福岡南バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

第 5 集

筑紫野市所在永岡甕棺遺跡

(本文編)

序

この報告書は、福岡県教育委員会が九州地方建設局の委託を受けて、昭和47年度に実施した一般国道3号線福岡南バイパス建設路線内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は、筑紫野市大字永岡所在の永岡甕棺遺跡についてのものであり、昨年度に発行した図版編に続き、ここにその本文編を発行いたします。

なお、調査に対してご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位のご援助に対して、心からの感謝を申し上げます。

昭和52年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

例 言

1. 本書は、一般国道3号線福岡南バイパス建設事業に関連して、昭和47年度に実施した永岡甕棺遺跡の発掘調査の本文編である。
2. 調査は、九州地方建設局福岡国道事務所の委託を受けて、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1—1, 2	浜 田 信 也	
第2	浜 田 信 也	
第3—1, 2, 3	浜 田 信 也	新 原 正 典
第4	永 井 昌 文	
第5	浜 田 信 也	
第6	浜 田 信 也	
4. 掲載図の作成・製図は、浜田信也、橋口達也、新原正典、松村登美子、土井隆臣が行ない、掲載写真の撮影は、浜田、新原、橋口、馬田弘稔が行なった。
5. 本書の図版番号は図版編との関連から「61」から付した。
6. 本書の編集は、浜田信也、新原正典が担当した。

本文目次

第1 序 説	1
1. は じ め に.....	1
2. 調 査 の 経 過.....	2
第2 遺 跡 の 位 置.....	5
第3 遺 構 と 遺 物.....	8
1. 甕 棺 墓.....	8
2. 土 塋 墓.....	55
3. 溝 と 豎 穴.....	55
第4 出土人骨について.....	64
第5 葬 法 について.....	66
第6 結 び.....	85

图 版 目 次

图版61	1. 1 号 甗 棺 下 甗
	2. 9 号 甗 棺 上 甗
图版62	1. 10 号 甗 棺 下 甗
	2. 11 号 甗 棺 上 甗
图版63	1. 12 号 甗 棺 下 甗
	2. 15 号 甗 棺 上 甗
图版64	1. 24 号 甗 棺 上 甗
	2. 24 号 甗 棺 下 甗
图版65	1. 26 号 甗 棺 上·下甗
	2. 30 号 甗 棺 上 甗
图版66	1. 27 号 甗 棺 上 甗
	2. 27 号 甗 棺 下 甗
图版67	1. 33 号 甗 棺 上 甗
	2. 36 号 甗 棺 上 甗
图版68	1. 35 号 甗 棺 上 甗
	2. 35 号 甗 棺 下 甗
图版69	1. 42 号 甗 棺 上 甗
	2. 42 号 甗 棺 下 甗
图版70	1. 39 号 甗 棺 下 甗
	2. 44 号 甗 棺 上 甗
图版71	1. 48 号 甗 棺 上 甗
	2. 48 号 甗 棺 下 甗
图版72	1. 53 号 甗 棺 上 甗
	2. 53 号 甗 棺 下 甗
	3. 19 号 甗 棺 甗
	4. 31 号 甗 棺 下 甗
	5. 37 号 甗 棺 下 甗
	6. 51 号 甗 棺 下 甗
图版73	竖 穴 出 土 土 器
图版74	12 号 甗 棺 人 骨

挿 図 目 次

第1図	永岡廻棺遺跡位置図	6
第2図	永岡廻棺遺跡付近地形図	7
第3図	永岡廻棺遺跡遺構配置図	付図
第4図	1号廻棺墓実測図	21
第5図	4号・5号廻棺墓実測図	22
第6図	6号・7号・8号廻棺墓実測図	23
第7図	9号廻棺墓実測図	24
第8図	10号廻棺墓実測図	25
第9図	12号・13号廻棺墓実測図	折り込み
第10図	11号廻棺墓実測図	26
第11図	14号廻棺墓実測図	27
第12図	15号廻棺墓実測図	28
第13図	16号・17号・21号廻棺墓実測図	29
第14図	18号・19号廻棺墓実測図	30
第15図	20号・22号・23号・29号廻棺墓実測図	31
第16図	24号廻棺墓実測図	32
第17図	25号廻棺墓実測図	33
第18図	26号廻棺墓実測図	34
第19図	27号廻棺墓実測図	35
第20図	28号廻棺墓実測図	折り込み
第21図	30号廻棺墓実測図	36
第22図	32号廻棺墓実測図	37
第23図	33号廻棺墓実測図	折り込み
第24図	31号・34号・37号・40号廻棺墓実測図	38
第25図	35号廻棺墓実測図	39
第26図	36号廻棺墓実測図	40
第27図	38号廻棺墓実測図	41
第28図	39号廻棺墓実測図	42
第29図	42号廻棺墓実測図	43
第30図	41号廻棺墓実測図	折り込み

第31図	44号甕棺墓実測図	44
第32図	45号甕棺墓実測図	45
第33図	48号甕棺墓実測図	折り込み
第34図	43号・46号・47号・50号甕棺墓実測図	46
第35図	51号・52号・53号甕棺墓実測図	47
第36図	9号・10号甕棺実測図	48
第37図	11号・19号甕棺実測図	49
第38図	30号・33号甕棺実測図	50
第39図	39号・44号甕棺実測図	51
第40図	24号・26号・27号甕棺実測図	折り込み
第41図	35号・42号・48号甕棺実測図	折り込み
第42図	6号・8号・17号甕棺実測図	52
第43図	23号・43号・52号甕棺実測図	53
第44図	29号・47号・50号・51号甕棺実測図	54
第45図	1号・2号・3号・4号土墳墓実測図	56
第46図	1号・2号・3号竪穴実測図	57
第47図	4号竪穴実測図	58
第48図	溝・竪穴出土土器実測図(1)	59
第49図	溝・竪穴出土土器実測図(2)	60
第50図	竪穴出土土器実測図(3)	61
第51図	竪穴出土土器実測図(4)	62
第52図	4号人骨出土状態実測図	66
第53図	9号人骨出土状態実測図	67
第54図	10号人骨出土状態実測図	68
第55図	11号人骨出土状態実測図	69
第56図	12号人骨出土状態実測図	70
第57図	13号人骨出土状態実測図	71
第58図	15号人骨出土状態実測図	72
第59図	24号人骨出土状態実測図	73
第60図	26号人骨出土状態実測図	74
第61図	27号人骨出土状態実測図	75
第62図	30号人骨出土状態実測図	76
第63図	33号人骨出土状態実測図	77

第64図	35号人骨出土状態実測図	78
第65図	36号人骨出土状態実測図	79
第66図	38号人骨出土状態実測図	80
第67墓	39号人骨出土状態実測図	81
第68図	41号人骨出土状態実測図	82
第69図	44号人骨出土状態実測図	83
第70図	48号人骨出土状態実測図	84

目 次

表 1	永岡人骨死亡年令	64
表 2	永岡出土人骨一覧表	65

第 1 序 説

1. は じ め に

永岡甕棺遺跡は、九州種苗（株）の農場内に所在し、国道3号線バイパスの建設に伴って、側道が併設されることとなった。よって農場の一部を建設省が買収することとなり、九州種苗（株）は植木等を移植する作業に取りかかった。この作業中において甕棺が発見された。このため九州種苗（株）は、筑紫野市教育委員会に通報し、遺跡の保護措置についての依頼があり、県教育委員会は、筑紫野市教育委員会の連絡により、担当職員を現地に派遣し、遺跡の遺存状態を確認すると共に、建設省と遺跡の保護について協議した。その結果、遺跡番号10'の永岡甕棺遺跡として従来よりの受託事業の一部として取り扱い、昭和47年4月6日から同年6月8日までの間に発掘調査した。

調査団の構成は次のとおりである。

総 括

教 育 長	森 田 實
教 育 次 長	西 村 太 郎
文化課課長	古 川 善 久
課 長 補 佐	菅 隆
課長技師補佐	藤 井 功

庶 務

庶 務 係 長	姫 野 博
主 事	師 岡 満

発掘調査

九州大学医学部教授	永 井 昌 文
九州大学医学部講師	方 城 暉 幸
九州大学医学部助手	橋 口 達 也（現文化課技師）
文化課技師	浜 田 信 也
文化課技師	新 原 正 典

なお、発掘調査にあたっては、元土地所有者である九州種苗（株）に器材置場等の提供をうけ種々のお世話いただき、ここに感謝する次第である。

2. 調 査 の 経 過

- 4月6日 発掘器材を現地に搬入し、調査区を設定する。表土（耕作土）の除去作業を開始する。
- 4月7日 霧雨の中で発掘作業を行う。甕棺墓が確認さる。
- 4月11日 新しく掘られた大きな掘り込みがあり、その中より馬の骨等が発見される。1号甕棺墓の発掘作業を開始する。墓墳内の埋土を除去する。
- 4月12日 1号甕棺墓の写真撮影を行う。1号甕棺墓の北側において6基の甕棺墓を確認するが、このうち2基が上部を削平されていた。
- 4月13日 2号・3号・4号甕棺墓の発掘を始める。
- 4月14日 調査区内に農場の排棄物が山積みされており、この下にも甕棺墓の遺存が考えられるので、ブルドーザを投入し、この除去作業を行う。5号・6号・7号の各甕棺墓の発掘作業を始める。
- 4月17日 調査区東側の排棄物下の表土除去作業および遺構検出作業を行う。
- 4月18日 前日に引き続き遺構検出作業を行う。
- 4月20日 雨のため発掘作業を中止し、出土遺物の洗浄作業を行う。
- 4月22日 10号・11号・12号・13号・14号各甕棺墓の発掘を始める。墓墳内の埋土の排出作業である。12号棺墓墳内に主軸の方向を変えて埋葬されている別の甕棺が遺存することが解かり、これを13号甕棺墓とした。この棺の墓墳が12号棺埋土を掘ってつくられたものであり、12号棺より新しく埋葬されたことが確認された。
- また、東側に隣接して遺存する14号棺の下甕底部が12号棺墓墳内に突き出ており、破損していないことから14号棺も12号棺より新しく埋葬されたものであることを確認する。
- 4月23日 8号・15号・16号・17号・20号・21号の各甕棺墓と4号堅穴の発掘を始める。この日のうちに8号・15号・16号・17号各棺の清掃を行い写真撮影を行う。
- 4月24日 前日に引き続き、1号棺と2号棺との方の表土除去作業を行い、この間において24号・25号・26号・27号の各甕棺墓を確認し、これらの発掘作業を行う。
- 4月25日 24～27号の各甕棺墓の発掘作業を行い、清掃後写真撮影を行う。調査区東側に確認された溝の発掘作業を始める。
- 4月26日 雨で発掘作業を中止する。
- 4月27日 調査区東側に遺存する溝の発掘作業を行う。溝の南端は二つの堅穴に連続していることを確認する。これらの堅穴や溝内より、ミニチュア土器や脚付埴および壺形土器が発見された。8号・9号棺の北側を若干拡張するが、ここにおいて29号・30号

の両甕棺墓を確認する。

- 4月28日 完存していた甕棺や堅穴内に遺存していた壺形土器が何者かによって破損されており、調査を完了していなかっただけに残念であり、諸作業に困難を要した。

22号・23号・29号の各甕棺墓の発掘作業終了後、調査区全域の清掃を行い写真撮影を行う。

- 4月29日 前日に引き続き写真撮影を行う。この後溝や堅穴内に遺存する遺物の取り上げ作業を行う。

- 4月30日 雨のため発掘作業を中止し、出土遺物の洗浄作業を行う。

- 5月1日 調査は、道路を挟んで北側の地区に一部開始することとし、表土の除去作業より始める。10号・11号の各棺の実測を行う。

- 5月2日 前日に引き続き北側地区の表土除去作業を行う。表土中には、耕作により破壊をうけた甕棺片が混入していた。

8号・12号・13号・14号・27号の各甕棺墓の実測を行う。

- 5月3日 前日に引き続き実測作業を行う。8号棺を取り上げ、9号棺墓墳の埋土を除去したところ、8号棺の下に小児用棺（31号）が発見され、この棺の発掘作業を行う。10号棺下甕の横穴内挿入状態を調べる。

- 5月4日 4号・11号各棺の下甕の埋納状態を記録（写真）にとる。甕棺墓の実測および取り上げ作業を行う。

- 5月6日 前日の雨により墓墳壁が崩れ甕棺が破損し、棺内に遺存していた人骨が相当な被害を受けた。29号棺を取り上げ、30号棺の発掘作業に入る。

- 5月7日 甕棺墓および12号棺内に遺存する人骨の遺存状態を実測する。

- 5月9日 26号棺の人骨出土状態を実測する。北区の発掘作業を行う。

- 5月10日 各甕棺墓と人骨出土状態の実測作業を行う。本日より人骨を取り上げるために、九州大学医学部より応援を得る。

- 5月11日 10号～14号棺内の人骨出土状態の写真撮影を行い、その後取り上げる。33号棺の発掘作業を行う。31号・33号各棺の写真撮影を行い、あわせて北側区の遺構検出作業を行う。

- 5月12日 各甕棺墓の実測を行い、28号・33号棺の写真撮影。北側区の遺構検出作業を行う。

- 5月14日 9号棺・34号棺の発掘作業を行い、11号棺・24号棺・25号棺・27号棺の実測を行う。

- 5月15日 35号棺の発掘作業を行う。9号棺・18号棺・24号棺・30号棺・34号棺の写真撮影を行う。

- 5月17日 17号棺・35号棺の発掘作業を行う。9号棺・30号棺の実測を行う。

- 5月18日 9号棺・18号棺・30号棺および4号堅穴の実測を行う。9号棺・11号棺・24号棺・

- 25号棺・26号棺の人骨出土状態の写真撮影を行う。
- 5月19日 雨のため発掘作業を中止し、出土遺物の洗浄を行う。
- 5月20日 各甕棺墓の実測と取り上げ作業を行う。午後は作業を休む。
- 5月21日 9号棺・11号棺・24号棺・27号棺・30号棺の人骨出土状態を実測する。北側区の実測作業を始め、堅穴群から調査を行うこととした。
- 5月22日 15号棺の発掘作業と16号棺・18号棺・28号棺・33号棺・35号棺の実測。18号棺の下に36号棺を発見する。教育次長、文化課長、課長技術補佐が現地調査に来る。
- 5月23日 15号棺の発掘作業を続ける。9号棺・11号棺・24号棺・25号・棺27号棺の人骨出土状態の実測を行う。各甕棺墓の実測用水糸の標高測定を行い、あわせて実測杭の平板測量を行う。
- 5月24日 15号棺の出土状態を写真撮影する。21号棺・34号棺の実測、28号棺・33号棺・35号棺の人骨出土状態を実測、写真撮影を行う。
- 5月25日 15号棺・36号棺の実測、北側区の実測の各遺構の調査を始め、39号棺・43号棺・45号棺・50号棺・51号棺・52号棺・53号棺の発掘作業を行う。
- 5月27日 16号棺・23号棺・37号棺の実測を行う。41号棺の発掘作業に入る。
- 5月28日 1号棺・51号棺の実測。32号棺・38号棺・44号棺・48号棺の発掘作業に入る。
- 5月29日 北側区の実測の各遺構の写真撮影するために清掃作業を行う。
- 5月30日 15号棺・36号棺の人骨出土状態の実測。北側区の実測の写真撮影を行う。
- 5月31日 前日に引き続き北側区の実測の写真撮影を行う。32号棺・38号棺・42号棺の実測を行う。15号棺・36号棺の人骨を取り上げる。午後より甕棺使用の土器の搬出作業に取りかかる。
- 6月1日 39号棺・41号棺・42号棺・44号棺・45号棺・48号棺の実測を行う。9号堅穴の実測の写真撮影を行う。
- 6月2日 32号棺・38号棺・41号棺・42号棺・44号棺・45号棺・48号棺の人骨出土状態の実測の写真撮影を行う。
- 6月5日 50号棺・53号棺および土壙墓の実測を行う。出土遺物の搬出を行う。
- 6月6日 土壙墓および堅穴の実測を行う。各遺構の実測杭の平板測量と標高測定作業を行う。
- 6月7日 北側区の実測の堅穴群の実測と実測杭の平板測量を行う。午後は雨により作業中止する。
- 6月8日 北側区の実測の平板測量を終了し、発掘器材、出土品を搬出し、全ての作業を終了した。

第2 遺跡の位置

永岡壘棺遺跡は、福岡県筑紫野市大字永岡に所在する。筑紫野市は福岡市の近郊都市で、福岡市のベッドタウンとして人口の増加が見られるところであって、これに係る宅地造成の急増している地区でもある。この永岡壘棺遺跡周辺も新しく私鉄の駅がつけられ、大小の宅地造成が行なわれ往時の自然環境は失なわれつつある。

この遺跡付近は、福岡平野と筑紫平野の接点であり、東に背振山塊、西に三郡山塊の非常に接近する平野部のせばまるところである。このため県下の平野部において降雨量の多い地域でもある。

三郡山塊の一つである宝満山を源とする宝満川が筑紫平野を南下するが、この宝満川の西側に沿って、背振山塊より派生する低丘陵が広く展開しており、このうちヤツ手状に展開する丘陵の一角に永岡壘棺遺跡が位置する。

この丘陵の東には、宝満川をつくる沖積地が広がり、このヤツ手状に展開する丘陵に入り込んだ小谷は、往時水田地として使用されたであろう。また、この丘陵は県下でも少ないローム土により形成されている。

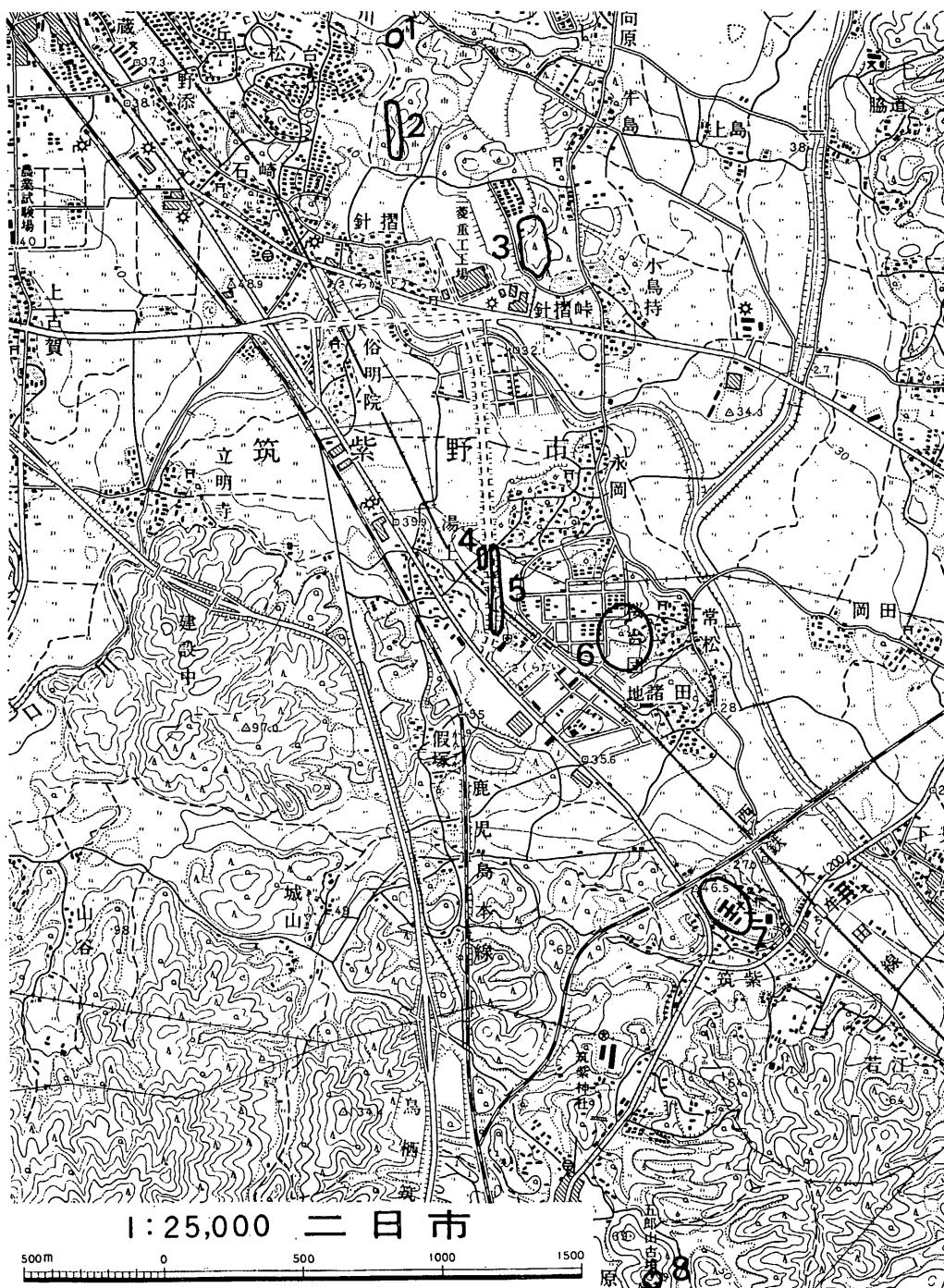
永岡壘棺遺跡は、ヤツ手状に展開する丘陵の基部の北側で、やや西向きのゆるやかな斜面に位置し、遺跡の東側には一小谷の頭が接近している。遺跡の東側は、国道バイパス建設地で、ここは昭和45年度に永岡遺跡として発掘調査が実施され、弥生時代の溝の一部が発見されている。^(註1)さらに、当遺跡の南東には常松遺跡が所在する。この遺跡は、昭和45年に別府大学によって発掘調査がなされ、弥生時代の住居跡、壘棺墓、溝が発見されている。^(註2)この溝は大溝で丘陵を横断するものであり、南と北に相接して所在する丘陵にもやはり丘陵を横断する溝があることが一部確認されている。

これら三つの遺跡は至近距離に所在し、ほとんど相接している状態であり、本来一つの遺跡として取り扱われるべきであり、村落の形態—住居地区と墓地—のあり方を知るに欠くことのできない重要な遺跡群がこの丘陵に残されている。

なお、この遺跡の所在する付近から小都市の北部における弥生時代の遺跡は数多くあるが、出土する遺品には、往時の中心地である福岡平野の影響を受けながらも、地域色の強い内容を示し、また、遠賀川流域の文化も流入し、これにも強く影響を受けていることが認められる地域でもあり、当時の人の行動すなわち、社会的、経済的なつながりを知るうえで見逃すことのできない地域である。

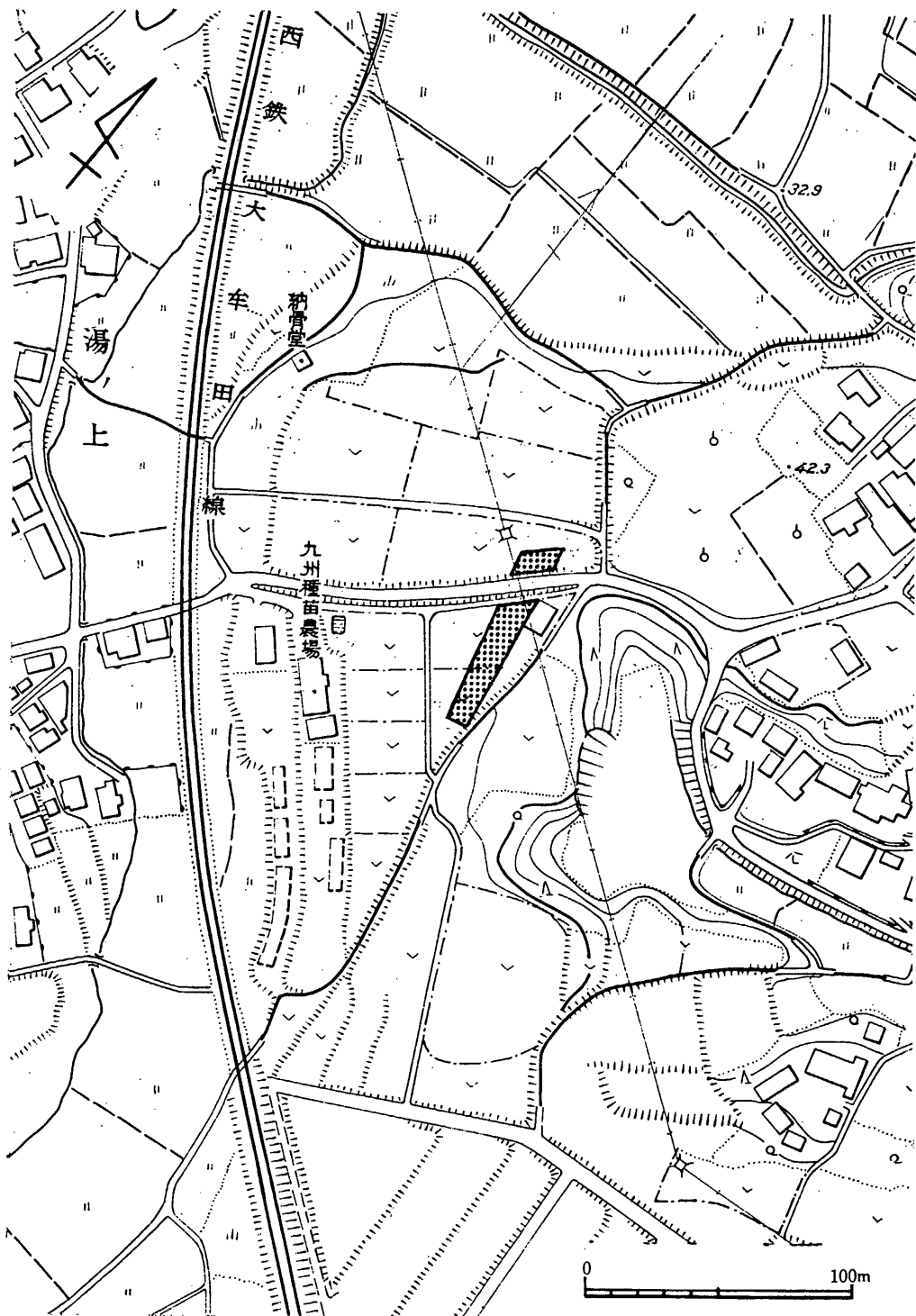
註1. 「永岡遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集、1970 福岡県教育委員会

註2. 「福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告書」別府大学文学部考古学研究報告書1、1970、別府大学文学部



第1図 永岡墓遺跡位置図 (1/25,000)

1. 池田遺跡 2. 野黒坂遺跡 3. 峠山遺跡 4. 永岡墓遺跡 5. 永岡遺跡 6. 常松遺跡
7. 筑紫小学校遺跡 8. 五郎山装飾古墳



第 2 図 永岡邸遺跡付近地形図 (1/6,000)

第3 遺構と遺物

当遺跡は、甕棺墓、土墳墓とこれらの両側に施けられた堅穴と溝からなっている。甕棺墓53基、土墳墓4基、土墳10数基と土墳を連繋する溝である。

甕棺墓は成人用、小人用とがあり、成人用のそれは、ほぼ南北方向に二列に意図的に埋施されており、この成人用甕棺墓に重複して小人用甕棺が、成人用の1に対して1から4基の数で重複している。また、二列に並行して意図的に埋施されていないものが、成人用に数基あり、成人用甕棺墓と重複しない小人用のそれも数基ある。

土墳墓は、調査区の北側において、甕棺墓群の間隙をぬってつくられており、これら土墳墓と成人用甕棺墓は、主軸の方向をほぼ同じくしている。

これらの甕棺墓、土墳墓群の両側には、堅穴および溝があり、これらによって墓域を定めている。東側では、堅穴とこれを連結するように溝をつくり、西側では、堅穴を連続してつくり、それぞれ墓域を示す施設とし、これらの遺構内に壺形土器等の土器を埋納している。

なお、南北の墓域を示す遺構は、南側では発見されなかった。

1. 甕 棺 墓

1号甕棺墓（第4図、図版15—1）

当遺跡を発掘調査するに至った最初に発見された甕棺墓である。このために、下甕の下胴部と上甕の下胴部、底部が削平により消失している。この甕棺墓は、ほぼ同径同大の甕形土器を合せたものであり、当遺跡の場合、頭位が下甕でありながら、上甕より低く置かれている。埋納後に上甕の蓋をしている。それぞれ、胴中央部に一条の断面三角形の凸帯を有する。

2号甕棺墓（図版15—2）

非常に浅い位置に埋設されたために、削平により大半が消失している。壺形土器の胴部の一部が遺存していた。おそらく、甕形土器と合せた小人用の甕棺墓と考えられる。33号棺墓墳の西側線上に所在し、これより新しい棺である。

3号甕棺墓（図版15—2）

2号棺の東側に接して発見された小人用甕棺墓である。墓墳は楕円形プランを呈し、南側の幅が若干狭くなっている。遺存している甕形土器の一部は、下甕のものと考えられ、墓墳外の東側に壺形土器の頸部から上部の一部が遺存しており、上甕に壺形土器を使用した合せ口式のものと考えられる。33号棺の墓墳内上面に埋葬されている。

4号甕棺墓（第5図4、図版16）

33号棺墓墳の北東限に接して埋施されている。小人用の合せ口式甕棺墓で遺存度はきわめて

良好であった。隈丸方形の墓壇に横穴を穿ち、これに下甕をソウ入している。下甕には、小人の頭骸骨がよく遺存していた。

甕形土器の口縁部の接口部には、上面のみに粘土による目貼りが見られ、下面の墳底側はない。33号棺の墓壇内に下甕が達しており、この状況からして、33号棺より新しく埋設されたものである。

5号甕棺墓（第5図5，図版16—1）

4号棺と同様に遺存状態のよい合せ口式の小人用甕棺墓である。上，下甕とも同形同大の甕形土器を使用している。それぞれ，口縁部下に断面三角形の凸帯を1条有する。

棺は，ほぼ方形の浅い墓壇内に納められ，下甕は墓壇より穿たれた横穴に納まっている。棺埋設部の墓壇の底面は一段と深くなっている。

接口部には，白色粘土を上部にのみ目貼りとして利用し，上甕の胴最大部付近の墳底側に棺を安定させるために粘土を敷きこんでいる。

この甕棺墓の下甕は，28号棺の墓壇内に達し，墓壇が35号棺の墓壇を切っていることから，28号，35号棺より新しく埋葬されたものである。

6号甕棺墓（第6図6，図版17—1）

28号棺の墓壇内に埋施された小人用甕棺墓である。方形の墓壇の中央に合せ口式の甕棺を埋納している。棺埋納部の墳底は一段と深くなっているものと考えられたが，確認できなかった。下甕がやや下がっている。

棺は小形の甕形土器を上，下ともに利用している。

28号棺より新しく埋施されたものである。

上甕は下甕に比べてやや小形であるが，同様な形をする。いずれも胴上半に最大径を有し，同部は内傾する。これに平坦面のある口縁部をつくっている。底部は平底である。器面の調整はいずれも縦位のハケ整形である（第42図6）。

7号甕棺墓（第6図7，図版17—1）

6号棺と同じく28号棺墓壇内に埋施されたものである。小人用の合せ口式甕棺墓である。同形同大の甕形土器を利用している。接口部には，粘土目貼りを施している。墓壇の平面形は不正形を呈しているが，墓壇に横穴を穿ち，下甕をソウ入する形態を取るものであり，20号墓壇の埋土中に埋施したために，この横穴が崩壊し，発掘作業時に確認できなかったものと考えられ，下甕の底部が墓壇壁に非常に接近しており，この部分における墓壇壁が若干内傾していることから，横穴を穿ったことが充分考えられる。

8号甕棺墓（第6図8，図版17—2）

9号棺墓壇内に埋施されている小人用の合せ口式甕棺墓である。楕円形の墓壇に横穴を穿ち，下甕の下胴部をソウ入している。削平によりそれぞれ甕形土器の半分を欠失する。接口部

における粘土目貼りはない。

甕棺は、上甕の方が高くなっている。

上甕は口径部に対して、高さ、底部径のやや小さい甕形土器である。平坦な口縁部は、内面に稜線を有せず、器面の整形は縦位のハケ整形である。

下甕は胴上半部が内傾し、これに平坦面を有する口縁部をつくっている。底部は平底であるが、指圧による沈線が一周している。器面の整形はハケによるものと観察される(第42図8)。

9号甕棺墓(第7図, 図版18)

成人用合せ口式甕棺墓である。長方形の大きな墓墳を掘り、これに墓墳とは主軸のやや異なる方向に横穴を穿ち、下甕を納めている。墳底は、甕埋納部分が一段と深くなっている。

上甕口縁部の一部は、下甕内に入り込んでおり、呑口式の形をとる。

上甕は、下甕に比べやや小さい甕形土器を使用している。頸部はやや内傾し、やや外傾する平坦な口縁部をもつ、胴中央部に断面三角形の1条の貼付け凸帯を有する。

下甕は頸部下が胴部の最大径となる甕形土器である。T字形に近似し、内側大きく突出し、やや外傾する口縁部をもつ。胴中央部に断面三角形の2条の貼付け凸帯を有する(第36図9)。

甕棺は、ほぼ水平に置かれ、頭位を下甕にして蓋をし、埋葬している。かつ下甕に集中して人骨が遺存していた。

10号甕棺墓(第8図, 図版19)

成人用の合せ口式甕棺墓である。大形の墓墳を掘り、これに横穴を穿ち下甕を納める方法をとっている。

甕棺は重圧により、その上部側が変形しており、上甕口縁の一部が下甕内に入っているが、本来接口式と考えられる。接口部には粘土目貼りはない。

上甕は下甕に比べやや小形の甕形土器を用いている。胴部最大径は上部にあり、中央部に断面三角形の貼付け凸帯を2条有する。

下甕は当遺跡で最大形の甕形土器である。口縁部下と胴中央部に、断面三角形の貼付け凸帯をそれぞれ2条有する(第36図10)。

甕棺はほぼ水平に置き、遺体埋葬後に、上甕による蓋をしている。

棺内に人骨が遺存していた。

11号甕棺墓(第9図, 図版20)

成人用の合せ口式甕棺墓である。やはり長方形の大きな墓墳を掘り、この一辺に横穴を穿ち下甕を納めている。墳底は棺埋設部が一段と深くなっている。

甕棺はほぼ水平に置き、頭位を下甕にし、遺体を埋葬後、上甕による蓋をしている。人骨が遺存していた。

上甕、下甕とも胴中央部に断面三角形の貼付け凸帯をそれぞれ2条もつ甕形土器である(第

37図11)。

この11号棺の墓壙内に、南に隣接して埋施された12号棺の下甕底部が突き出ており、11号棺は12号棺より古いものと考えられる。

12号甕棺墓（第10図、図版21・22—1）

11号棺に南接して所在し、11号棺より新しい。成人用の接口式甕棺墓である。長方形の大きな墓壙に横穴を穿ち、下甕をソウ入している。下甕は11号棺の墓壙にまで達していた。

墓壙は、西側に一段を有し、棺埋設部は壙底がやや深くなっている。また、下甕の中央部にあたる壙底には径約30cmの浅い円形ピットがある。甕棺はほぼ水平に置き、下甕を頭位としている。接口部には粘土目貼りをしている。

上甕、下甕ともに同形同大の甕形土器を使用している。いずれも、胴中央部に断面三角形の貼付け凸帯を2条もっている。

13号甕棺墓（第10図、図版22）

成人用の接口式甕棺墓である。12号棺と同じ墓壙内にあり、12号棺とは主軸を異にする。13号棺は、12号棺を埋施し、土で覆った後、かなり早い時期に新たに墓壙を深く掘り下げ埋施している。やはり横穴を穿ち、下甕をソウ入している。

甕棺は、上甕のほうが高くなっている。下甕を頭位とし、遺体を納めて後に上甕を蓋として覆せ、接口部に粘土目貼りを施している。棺内に人骨が遺存していた。

上甕は、胴部最大径が上部にあり、口縁部は外傾する平坦部をもち、大半が内側に突出している。胴中央より底部よりに2条の断面三角凸帯をもつ。下甕もほぼ同形の甕である。

14号甕棺墓（第11図、図版23）

成人用の接口式甕棺墓である。12、13号棺の東側に隣接して埋施されていた。やはり墓壙の一边に横穴を穿ち下甕をソウ入している。ほぼ同形同大の甕をほぼ水平に置いているが、下甕を頭位とし、遺体を納めた後に上甕を蓋とし、接口部に粘土目貼りをを行っている。

この14号棺の下甕底部が12号墓壙内に突出しており、12号棺より新しいが、13号棺との前後関係は不明である。

棺内には、人骨が遺存していたが、あまり遺存状態は好ましくない。

15号甕棺墓（第12図、図版24）

成人用の接口式甕棺墓である。当遺跡の成人用甕棺墓が二列に配置されているという状況から少しはずれる位置にあるが、埋施された主軸の方向はほぼ同じである。

墓壙は攪乱および16号棺との重複で、南側の一部が不明瞭であるが、棺はよく残っている。やはり、墓壙に横穴を穿ち、下甕をソウ入している。下甕を頭位にし、下甕を下げ気味にし、遺体を納めて上甕による蓋を行っている。接口部は棺上面部のみ粘土による目貼りを施している。

人骨が検出されたが、頭部のほかはあまり遺存度は良くない。

上甕は「T」字状に近い口縁部をもち、胴部に断面三角形の凸帯を1条もつ。器面は剥落が著しいため、調整痕はよく遺存していない。赤褐色を呈し、砂粒子を多く含む胎土である。

下甕も上甕と同様の甕形土器である。

16号甕棺墓（第13図16，図版25—1）

15号棺に一部が重複して埋施されている小人用の接口式甕棺墓である。台形状を呈する墓壇に横穴を穿ち下甕をソウ入している。上甕が下がっているが、これは基本的には、甕棺はほぼ水平に置かれたものであって、後に上甕のみが下がったものと考えられる。接口部には上面のみ白色の粘土により目貼りを施している。

15号棺の墓壇を一部切り込んで墓壇をつくっており、15号棺より新しく埋葬されたものである。

17号甕棺墓（第13図17，図版25—2）

18号棺と重複して、その上面に埋葬された小人用の接口式甕棺墓である。浅い位置にあったために、棺の上面が削平されているが、鉢形土器と甕形土器を組合せたものである。

上甕は鉢形土器である。口縁部下に一条の三角形凸帯をめぐらしている。底部は浅い上げ底である。器面の整形は無でによるところが多い。

下甕は甕形土器である。胴上半に最大径を有し、内傾する頸部に平坦口縁をつくっている。底部は平坦であるが、指押圧による沈線が一周している。器面の剥落が著しいが、縦位のハケ整形である（第42図17）。

18号甕棺墓（第14図18，図版26—1）

36号棺墓壇埋土中に埋施された小人用の接口式甕棺墓である。墓壇は楕円形プランを呈する。この棺の上部に17号棺が埋葬されたために墓壇上面の損壊が著しく、横穴をもつものかどうか不明である。下甕をやや高くして置いており、下甕に頭骸の小片が発見された。

19号甕棺墓（第14図19，図版40—1）

38号棺の西側に接して埋葬された単式の甕棺墓である。38号棺の墓壇を切って墓壇を掘っている。甕は口縁部を下げて置いており、下胴部の側面に内側から穿たれた孔が一つある。

使用された甕形土器（第37図19）は、頸部が大きく内傾し、やや内傾する平坦部のある口縁部をもつ。胴部の最大径は上半にあり、この位置に断面三角形の凸帯を1条有する。赤褐色を呈し、胎土中には砂粒子が多く焼成はあまりよくない。このため器は非常にもろくなっており、器面の整形痕は不明である。

20号甕棺墓（第15図20）

21号棺の上部に重複して埋葬された小人用の接口式甕棺墓である。削平により大半を欠失しており甕形土器を組み合わせていることが解る程度に遺存していた。

21号甕棺墓（第13図21，図版26—2）

38号棺の墓壙内にあって、かつ37号棺の上部に重複して埋葬された小人用の接口式甕棺墓である。墓壙は楕円形状を呈し、壙底は下甕側が深くなっている。上からの押圧により甕棺は破損している。上甕，下甕ともに小形の甕形土器を使用し、ほぼ水平に置いている。下甕がやや大きく、口縁部下に断面が山形の貼付け凸帯を1条もっている。

22号甕棺墓（第15図22，図版27—1）

32号棺の東側に離れて埋葬された小人用の甕棺墓である。削平により甕棺の大半が消失しており、使用された壺形土器の一部が遺存しているのみである。棺は口縁部打欠きの壺形土器を上甕とするものである。

23号甕棺墓（第15図23，図版27—2）

22号棺の東側に埋葬された小人用の甕棺墓である。削平により損壊が著しく、墓壙も不明な部分がある。壺形土器と甕棺土器を使用した接口式の甕棺墓である。

上甕の壺形土器は、朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部をつくり、頭部の下方に1条の山形凸帯を貼付けている。肩の張る胴部であり、器面の整形はへら研ぎであり、焼成も非常によい。

下甕の甕形土器は、胴最大径が上半部にあり、口縁部は平坦で、口唇部は下がっている。胴部の器面整形は、縦位のハケによる整形を行い、口縁部は横位に撫でている。黄褐色を呈し、胎土中に多くの砂粒子を含む（第43図23）。

24号甕棺墓（第16図，図版28）

接口式の成人用甕棺墓である。長方形の墓壙の一辺に横穴を穿ち、下甕をソウ入している。甕棺はほぼ水平に置かれ、下甕を頭位とし、遺体を納めた後に蓋をしている。棺内には、遺存度のよい人骨が発見された。

上甕は、胴の上半部に最大径があり、断面が「T」字状に類似する肉厚の口縁部をもつ。外側の口唇部に凹みがある。胴中央部に断面三角形の2条の貼付け凸帯がある。底部の外側は中央が凹んでいる。口縁部は横位のナデ、これより下方の内側には縦位のハケ目痕が若干残っている。外側の器面整形痕は不詳である。赤褐色を呈し、砂粒しを多く含む胎土である。下甕は上甕と同大のものであるが、口縁部は平坦であり、断面が「T」字状を呈する。口唇部の両端とも若干の凹みがある。口縁部下が胴部最大径となる。胴中央部に傾きのある、断面三角形の凸帯を2条もつ。この甕形土器の凸帯は、器面に1条の沈線を施し、この部分に下段の凸帯を貼り付け、さらに上段の凸帯を貼り付けていることがよくわかった。器面の整形はナデを主体とするが、胴部の底部に近い部分には、へら削り痕が残っている。底部は上げ底である。暗褐色を呈し、焼成は良好である（第40図24）。

25号甕棺墓（第17図，図版29）

24号棺の東側に隣接して埋葬された成人用の接口式の甕棺墓である。他の成人用棺に比べ、棺は比較的小さく墓壙も小さい。このため浅い位置に埋葬されたためか損壊が著しい。

やはり墓壙に横穴を穿ち下甕をソウ入している。下甕を頭位とし、下甕を低くし傾斜をもたせて甕棺を置いている。

甕棺内には、遺存度のよくない人骨が発見された。

26号甕棺墓（第18図，図版30）

成人用の接口式甕棺墓である。当遺跡で唯一の蓋形土器と甕形土器を組合せた甕棺である。やはり墓壙を掘り、この一辺に横穴を穿ち、下甕の3分の1程度をソウ入している。下甕を頭位とし、ほぼ水平に置いて蓋をしている。接口部には粘土で目貼りを施している。棺内には人骨が遺存していた。

上は蓋形土器である。笠状に開く体部に外傾する平坦口縁をつくっている。天井部は平坦であるが、指圧による凹みが一週している。また器内面の天井部には指による整形痕が観察できる。下甕は、当遺跡出土の甕形土器のうち最大のものである。胴上部は内傾し、これに平坦面をもつ口縁をつけている。口縁部下に1条、胴部に2条の三角凸帯をめぐらせている（第40図26）。

27号甕棺墓（第19図，図版31）

成人用の接口式甕棺墓である。甕棺に比べ小形で、浅い墓壙をもち、この一辺に横穴を穿ち、下甕を挿入している。壙底は棺下が一段と深くなっており、棺の安定を図っている。同形同大の甕形土器を組合せており、下甕を頭位とし、ほぼ水平に置いている。接口部の下端は、埋納の際の不手際によるものか、隙間が生じている。接口部には粘土による目貼りがある。棺内には人骨が遺存していた。

上甕は、口縁部下に胴部の最大径のあるもので、やや外側に開き気味の胴部を有し、その上端に肉厚の口縁部を持つ、口唇部は内外に突出し、上面は外傾する平坦面となっている。胴中央部に2条の断面三角形の貼付け凸帯を有し、底部外側はやや凹んでいる。

器面の整形は不明瞭ではあるが、ナデによるところが多い。褐色を呈し、砂粒子を多く含むものである。

下甕は、上甕と同一のつくりによるものであり、色や胎土も全く同じである（第40図27）。

28号甕棺墓（第20図，図版31）

6，7号棺の下に埋葬されていた成人用の接口式甕棺墓である。33号に次いで大きな墓壙をもつ甕棺墓である。墓壙の一辺に横穴を穿ち下甕を挿入している。壙底は壙壁から傾斜をもっており、棺接口部が最も深くなっている。甕棺は下甕を頭位とし、上甕を高く置き、傾斜をもたせている。接口部には粘土目貼りを施している。棺内には遺存度のあまり良くない人骨が発見された。

なお、当甕棺墓の墓壙の南壁には、5号棺、35号棺の下甕が突出しており、28号棺は5、6、7、35号棺よりも古いものであることが解かる。

29号甕棺墓（第15図29，図版33—1）

30号棺の墓壙を切って作られた墓壙に納められた甕棺墓である。小人用の接口式である。遺存状態は好ましくないが、甕形土器の組合せのものである。墓壙は長楕円形の浅いものである。甕棺は北側の甕形土器を下甕とするものであると考えられ、下甕を低く置き、傾斜をもたせて置いている。接口部に粘土目貼りあり。

上甕は内傾する口縁部をもつ。底部は非常に浅い上底であり、指圧による浅い沈線が一周する。器面の整形は不明である（第44図29）。

30号甕棺墓（第21図，図版34）

成人用の接口式甕棺墓である。墓壙を掘り、この一辺に横穴を深く穿っている。下甕はこの横穴に大半を納めており、甕棺は下甕を頭位とし、ほぼ水平に置かれている。上甕は下甕より小形のものを使用している。棺内には人骨がわりあいよく遺存していた。

上甕は口縁部下に胴部最大径がある甕形土器である。口縁部は厚く、器の内外に突出し、外側口唇部は凹みがある。胴中部に1条の断面三角形の貼付凸帯がある。

下甕は胴中央部に最大径を有し、ここに断面三角形の凸帯が2条ある。内傾する胴上端に外反する平坦口縁部をもつ（第38図30）。

31号甕棺墓（第24図31，図版33—2）

8号棺の下にあり、9号棺の墓壙を切って埋施された甕棺墓である。墓壙の一辺に横穴を穿って下甕を挿入したものと考えられるが、遺存状態は好ましくなく不詳である。墓壙底は二段になっている。甕棺は下甕を頭位とし傾斜をもたせて置いている。

32号甕棺墓（第22図，図版35）

成人用の甕棺墓である。方形を呈する墓壙を掘り、この一辺に横穴を穿ち下甕を挿入している。墓壙は25号と同じように浅く、棺下は甕棺に合せて深くなっている。甕棺は下甕を頭位とし、これを斜めに置き、甕形土器の胴上半部を打欠いたものを上甕に使用している。下甕口縁径に合せて上甕を打ち欠いており、合せ部は接口式のようにみえる。甕棺は土圧により破損しており、多量の土が棺内に入っており、人骨の遺存状態も好ましくなかった。

下甕は、口縁部が内側に大きく突出し平坦部が広く、外傾するものである。口縁下に胴最大径があり、胴中央部に2条の断面三角形の貼付け凸帯を有する。

33号甕棺墓（第23図，図版36）

当遺跡で最大の墓壙内に埋葬された甕棺墓である。長方形を呈する墓壙を掘り、横穴を穿ち、下甕の下胴部を挿入している。墓壙底は下甕の胴最大部下が最も深く、このため下甕を低く傾斜をもたせて甕棺を置いている。頭位は下甕である。接口式の甕棺墓で、接口部には粘土

による目貼りがある。

棺内にはわりあいよい状態で人骨が遺存していた。

34号甕棺墓（第24図34，図版37—1）

38号甕棺墓の墓壙を切って，埋施された小人用の接口式甕棺墓である。ほぼ円形を呈する墓壙に横穴を穿ち下甕を挿入している。土圧により甕棺の上部は破損していた。ほぼ水平に置かれた甕棺は，同形同大の甕形土器を組合せたものである。接口には白色粘土による目貼りがある。

35号甕棺墓（第25図，図版38）

成人用の接口式甕棺墓である。甕棺に比べ小さく浅い墓壙である。墓壙の一部は5号棺の墓壙により切られている。やはり他の甕棺墓と同じように，墓壙の一辺に横穴を穿ち，下甕を挿入している。甕棺は下甕を頭位とし，ほぼ水平に置いている。接口部は白色粘土を混入したローム土で目貼りしている。

上甕は胴上端が内傾し，これにやや外傾する平坦部をもつ口縁を付し，胴中央のやや下方に一条の断面三角形の凸帯をめぐらしている。器外面の整形はヘラ研磨と思われる。浅い上げ底である。

下甕は口縁部下に最大径を有する胴である。胴部のほぼ中央部に1条の断面山形の凸帯をめぐらす。底部は平底である。器面の整形は，口縁部と凸帯部は横位のハケによる撫でであるほかは，ヘラによる研磨と考えられる（第41図35）。

36号甕棺墓（第26図，図版39）

成人用の接口式甕棺墓である。やや小形の墓壙を掘り，墓壙主軸と交叉する方向に横穴を穿ち下甕を納めている。墓壙底は甕棺下が深くなっており，棺の安定化を図っている。接口部には粘土目貼りは見られない。棺内には，人骨が良好な状態で遺存していた。

37号甕棺墓（第24図37，図版37—2）

38号甕棺墓の墓壙内にあり，21号棺の下に埋施されたものである。小人用の呑口式甕棺墓である。上甕口縁部が下甕内に納まっている。墓壙は楕円形を呈するものと考えられるが，38号墓壙埋土中にあるため，墓壙底は定かでない。甕棺は北側の甕形土器を下甕とし，上甕側を高く，傾斜を持たせて置いている。

38号甕棺墓（第27図，図版40）

成人用の接口式甕棺墓である。この甕棺墓には5基の小人用甕棺墓がその上部に重複していた。このため墓壙の一部が乱されている。長方形を呈する墓壙を掘り，これに横穴を穿ち下甕の下胴部を挿入している。甕棺は下甕底部を高くし傾斜をもたせて置いている。同形同大の甕形土器を組合せたものであり，接口部の側面に粘土目貼りが一部確認できた。

棺内に人骨が発見されたが，遺存状態はあまり良くなかった。

39号甕棺墓（第28図，図版41）

成人用の接口式甕棺墓である。長方形の墓壙を掘り，下甕を横穴に挿入している。墓壙底は段を有し，棺下を一段深くし，棺の安定を図っている。甕棺は同形同大の甕形土器を組合せたものであり，下甕を頭位とし，下甕底部を高くし，傾斜をもたせて置いている。接口部は粘土目貼りを施している。

使用した甕形土器は上下とも同形のものである。口縁下に胴部最大径があり，口縁部は内側に厚く突きだし，外傾する平坦部をもつ。胴のほぼ中央部に断面三角形の貼付け凸帯を1条持ち，底部径は小さい（第39図39）。

40号甕棺墓（第24図40，図版42—1）

小人用の甕棺墓である。甕棺は削平により一部を残すのみであるが，甕形土器と壺形土器の口縁部を打ち欠いたものを組合せたもので，呑口式である。下甕の甕形土器は外反する平坦な口縁部をもち，口縁下に1条の断面三角形の貼付け凸帯をもつ。上甕の壺形土器は肩の張る胴部であり，肩部に断面山形の貼付け凸帯をもつ。

41号甕棺墓（第30図，図版43）

成人用の接口式甕棺墓である。長方形を呈する墓壙は大きく，一辺に横穴を穿っている。墓壙底は二段を有し，上甕下胴部下が最も深い。同形同大の甕形土器を組合せたものであり，下甕を頭位としほぼ水平に置いている。接口部には粘土目貼りをしている。

上，下甕とも同形のものを使用している。口縁部下に最大径のある胴部にやや外傾する平坦な口縁部をもつ。口唇部は内側に厚く突出し，外側に短い。胴中央部に断面三角形の貼付け凸帯を1条もつ。

棺内には，人骨が発見されたが，遺存度は好ましくない。

42号甕棺墓（第29図，図版44）

成人用の接口式甕棺墓である。長方形の墓壙を掘り一辺に横穴を穿って，下甕の大半を挿入している。甕形土器を組合せたもので，甕棺は下甕を頭位とし，ほぼ水平に置いている。接口部には粘土目貼りを施している。上甕は下甕に比べて小さいものを使用している。

棺内には人骨が遺存していたが，保存状態は好ましくない。

上甕はほぼ直立する頸部に口縁を付けている。口縁部は内側に大きく突き出している。頸部に最大径を有する胴部は細くみえる。胴のほぼ中央の位置に1条の三角凸帯をめぐらしている。底部は厚く平底である。

下甕は上甕に比して大きい，近似する形である。やはりほぼ直立する頸部に，内側に突き出る口縁部をつくっている。胴中央部に1条の三角凸帯をめぐらしている。底部は平底であるが，指圧によるものと考えられる凹みが一周している（第41図42）。

43号甕棺墓（第34図43，図版42—2）

44号甕棺墓の墓壙を切って同棺墓壙内に埋施されたものである。小人用の接口式であり、下甕を低くし、傾斜をもたせて置いている。甕棺は削平を受け上半部を欠失している。墓壙底の中央に凹みがある。

上甕は胴上半部に最大径を有し、胴上部は内傾する。これにやや内傾する平坦な口縁部をもつ。器面の整形は、内面は撫でによるが、外面は縦位のハケ整形である。

下甕は上甕とはほぼ同様の形と整形手法であるが、底部は浅い上げ底となっている（第43図43）。

44号甕棺墓（31図、図版45）

成人用の接口式甕棺墓である。墓壙は道路により一部削られているが長方形を呈するものである。甕棺は他の成人用に比べ、比較的小さい甕形土器を組合せたものである。下甕を頭位とし、上甕を高くし、傾斜をもって置いている。接口部に赤褐色粘土による目貼りがある。

棺内には、人骨が遺存していたが、保存状態は好ましくない。

上甕は、胴上半部に最大径を有し、その下方に1条の三角凸帯を貼付けている。胴上部は内傾し、これに平坦口縁を付けている。口縁部には凹みがあり平坦部には指による圧痕が5～6cm間隔で遺っている。底部は中央が若干凹んでいるが平底に非常に近い形をしている。暗褐色を呈し、胎土中に砂粒子をわずかに含む（第39図44）。

45号甕棺墓（第32図、図版46）

44号棺の北側にあり、下甕が43号棺の下に位置する。小人用の接口式甕棺墓である。長方形の墓壙を掘り、これに横穴を穿って下甕を挿入している。横穴と対する墓壙の法面は一段を有する。甕棺は下甕を頭位とし、下甕を高く傾斜をもって置いている。接口部には粘土による目貼りがある。

下甕の底部が44号墓壙内に突き出ており、44号棺より新しいものである。

棺内には、頭骸骨が遺存していたが、保存状態はあまりよくない。

46号甕棺墓（第34図46、図版47—1）

小人用の接口式甕棺墓である。48号棺の墓壙内に埋葬されている。不正形の墓壙内に一方に扁よって甕棺は置かれている。下甕を高くし傾斜をもたせて置いている。

甕棺は同形同大の甕形土器を組み合せたもので、接口部に粘土目貼りを施している。

47号甕棺墓（第34図47、図版47—2）

小人用の甕棺墓である。48号棺の墓壙を切っている。浅い位置にあるため大半が削平により欠失する。甕棺は甕形土器を組み合せたものであり傾斜をもたせて置いている。どちらが頭位であるかよく解からない。接口部に粘土目貼りを施す。

上甕は内傾する平坦面を有する口縁部をもち、胴上半部に最大径を有し、胴上部は内傾する。口縁部下に1条の三角形凸帯をめぐらしている。底部はほぼ中央部に凹みがあり、さらに

指圧による沈線が一周している。器面の整形は粗いハケ目が縦位に施されている（第44図47）。

48号甕棺墓（第33図，図版48）

成人用の接口式甕棺墓である。長方形を呈する墓壙の一边のほぼ中央に横穴を穿ち下甕を挿入している。同形同大の甕形土器を組合せており，下甕を頭位とし，上甕を高くし傾斜をもたせて置いている。接口部には粘土目貼りを施している。墓壙の壙底は一段を有し，棺下はさらに深くなっている。

棺内には人骨が遺存していたが，遺存状況はあまり好ましくない。

上・下甕とも同形状の甕形土器である。胴は上端が開き気味のあるもので，これに平坦口縁をつくっている。口縁部は内側に大きく突き出るもので，上甕の外側口唇部には凹みが一周している。いずれも胴中央よりやや下方に1条の三角凸帯を貼りつけている。底部は下甕の中央部がやや上底に近い状態のものであるが，上甕は，指圧による凹みが一周している（第41図48）。

49号甕棺墓

耕作によりほとんどが削平されており，小人用甕棺墓であることが確認される程度の遺存状態であった。

50号甕棺墓（第34図50，図版49—1）

西側に位置する墓域を示す竪穴群の上に重複して発見された。耕作により甕棺の上部が欠損している。下甕はわりあい残っており，棺はほぼ水平に置いており，接口式のものである。

下甕は胴上部に最大径を有し，胴上部は内傾する。これに内傾する平坦面のある口縁部をつくっている。底部は浅い上げ底である。器面の整形は縦位のハケ整形であるが，この整形後に口縁部下に三角凸帯をめぐらしている（第44図50）。

51号甕棺墓（第35図51，図版49—2）

小人用の接口式甕棺墓である。耕作により削平されているが，不正形の墓壙に横穴を穿って下甕を挿入している。

甕棺は下甕を低くし傾斜をもって置いている。同形同大の甕形土器を使用し，接口部に白色粘土による目貼りがある。

上甕は中型の甕形土器である。胴上半部に最大径を有し，内傾する胴上端に平坦面のある口縁部をつくっている。口縁部下に1条の低い三角凸帯をめぐらせているが，これが貼付けかつくり出しが不詳である。底部はその内面を一部欠損するが，厚味があり，浅い上げ底である。器面の整形は不明である（第44図51）。

52号甕棺墓（第35図52，図版50—1）

小人用の接口式甕棺墓である。耕作により上半部を削平されている。甕棺は長楕円形を呈する墓壙に，ほぼ水平に置かれている。同形同大の甕形土器を使用しており，東側の甕が下甕と

考えられる。接口部に白色粘土による目貼りがある。

上甕は平坦な口縁部をもち、口縁下に胴部最大径があり、口縁部下に1条の沈線をめぐらしている。底部は欠損するが、径の小さいものと考えられる。器面の整形は、器面の剥落が著しいため不明である。

下甕は内傾する平坦面のある口縁部下に1条の断面三角形の凸帯を有し、胴部は上半部に最大径を有する。底部は浅い上げ底である。器面の整形は縦位のハケ整形である（第43図52）。

53号甕棺墓（第35図53，図版50—2）

小人用の接口式甕棺墓である。ほぼ方形を呈する墓壙に横穴を穿ち下甕を挿入している。

甕棺は同形同大の甕形土器を使用し、下甕を頭位とし、ほぼ水平に置いている。甕形土器は、外反する平坦な口縁部をもち、胴上半部に最大径を有し、口縁部下に断面三角形の貼付け凸帯を2条めぐらせている。底部は浅い上げ底となっている。

甕棺墓の切り合い関係（古→新を表わす）

甕棺墓の切り合い関係は下記のとおりである。

K 8 → K31 → K 9

K11 → K12 → K13 → K14

K15 → K16

K 19 → K38 → K37 → K21 → K20
 ↘ K34

K29 → K30

K36 → K18 → K17

 ↗ K 2
K33 → K 3
 ↘ K 4

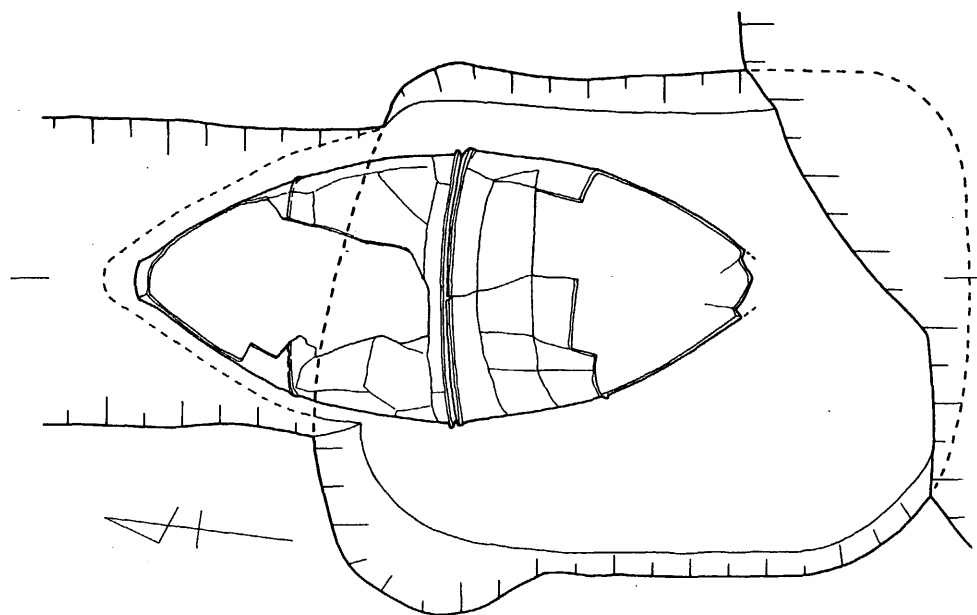
K35 → K 5

 ↗ K 6
K28 → K 6
 ↘ K 7

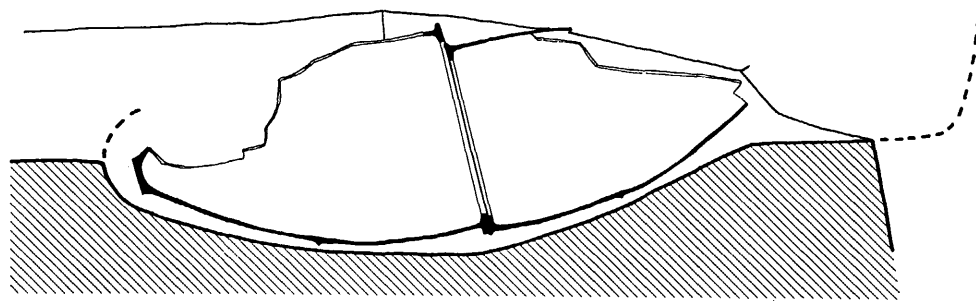
K41 → K40

K44 → K45 → K43

K48 → K46
 ↘ K47

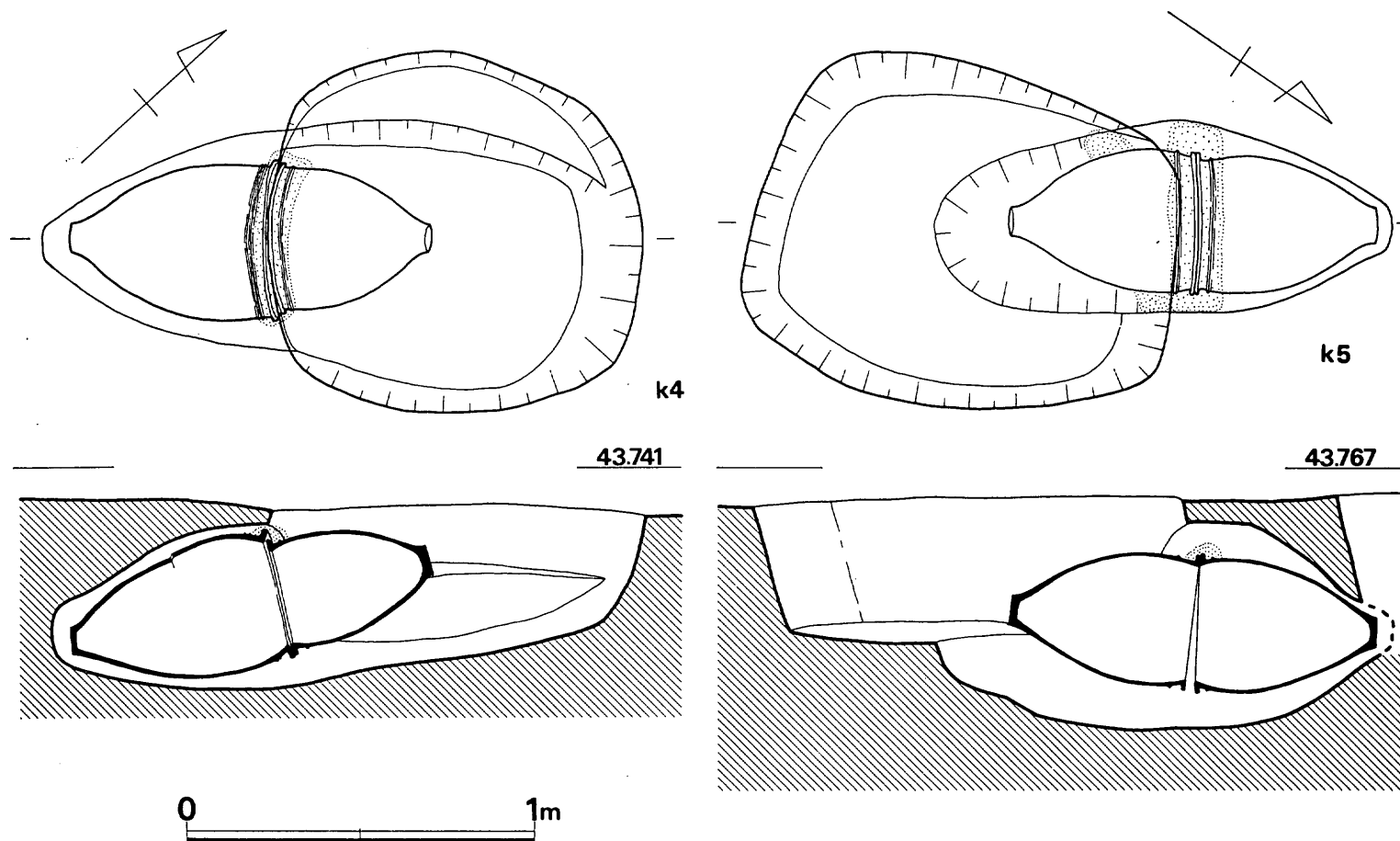


43.646

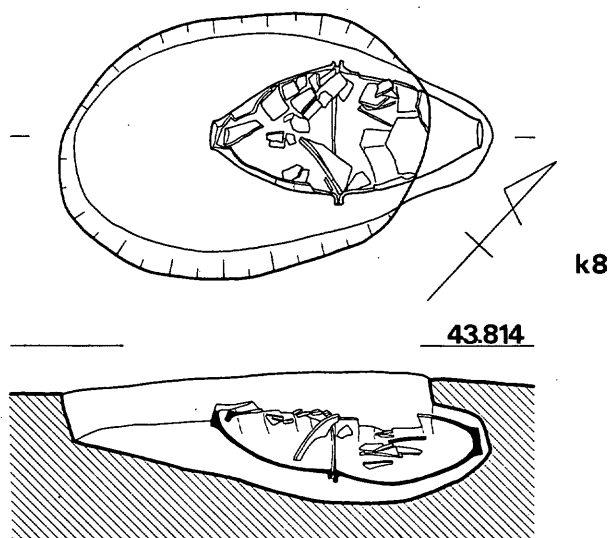
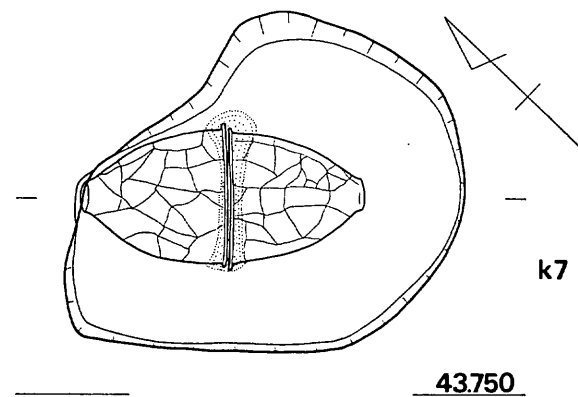
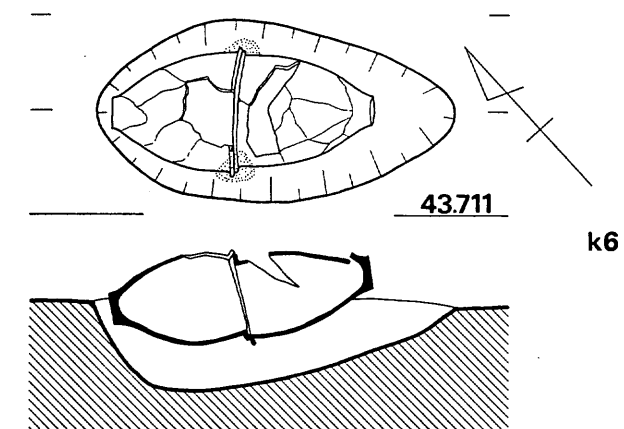


0 1m

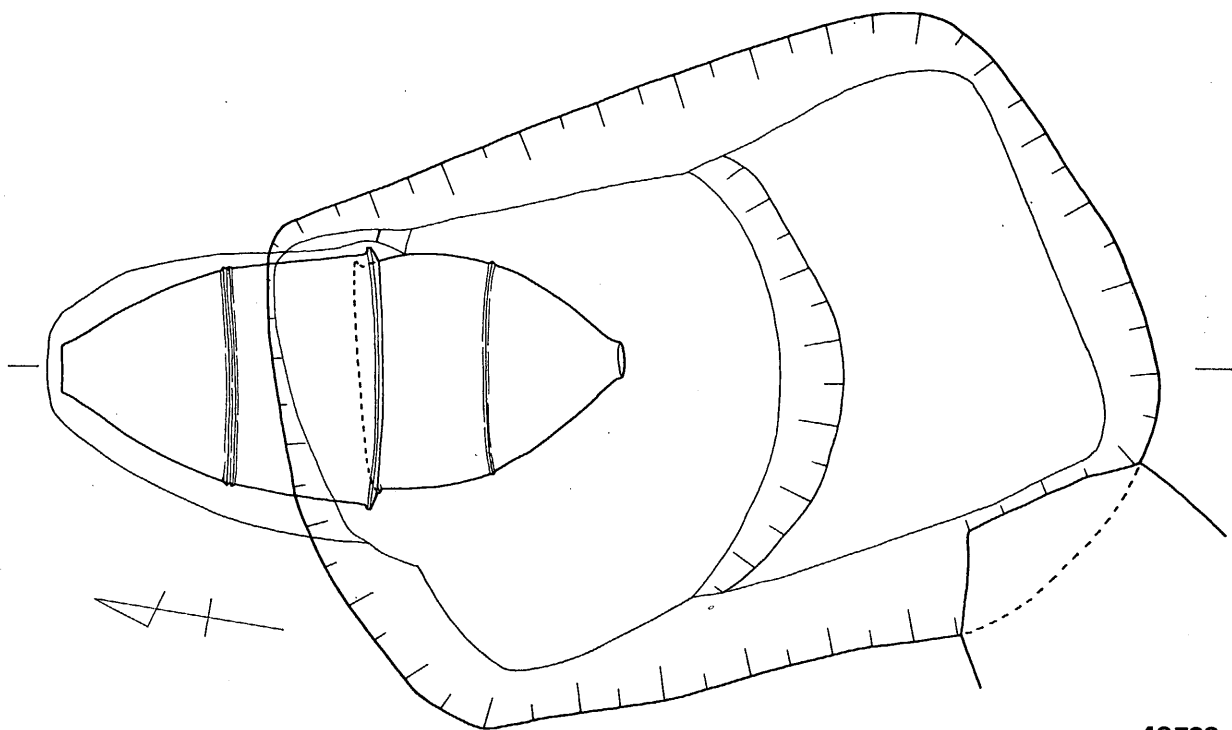
第4圖 1号甕棺墓実測図 (1/20)



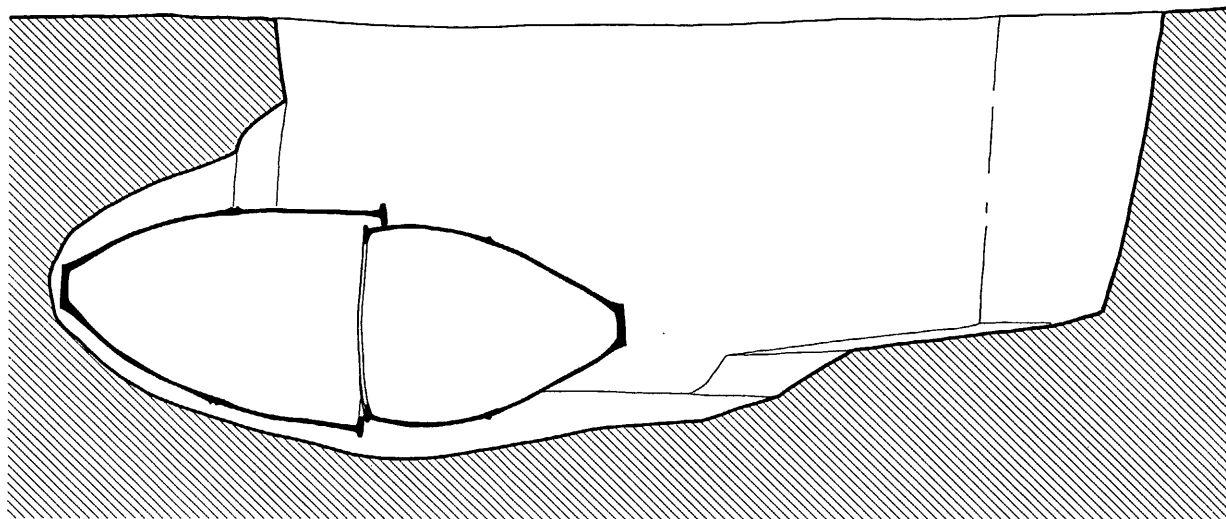
第5图 4号·5号甕棺墓实测图(1/20)



第6图 6号·7号·8号甕棺墓实测图(1/20)

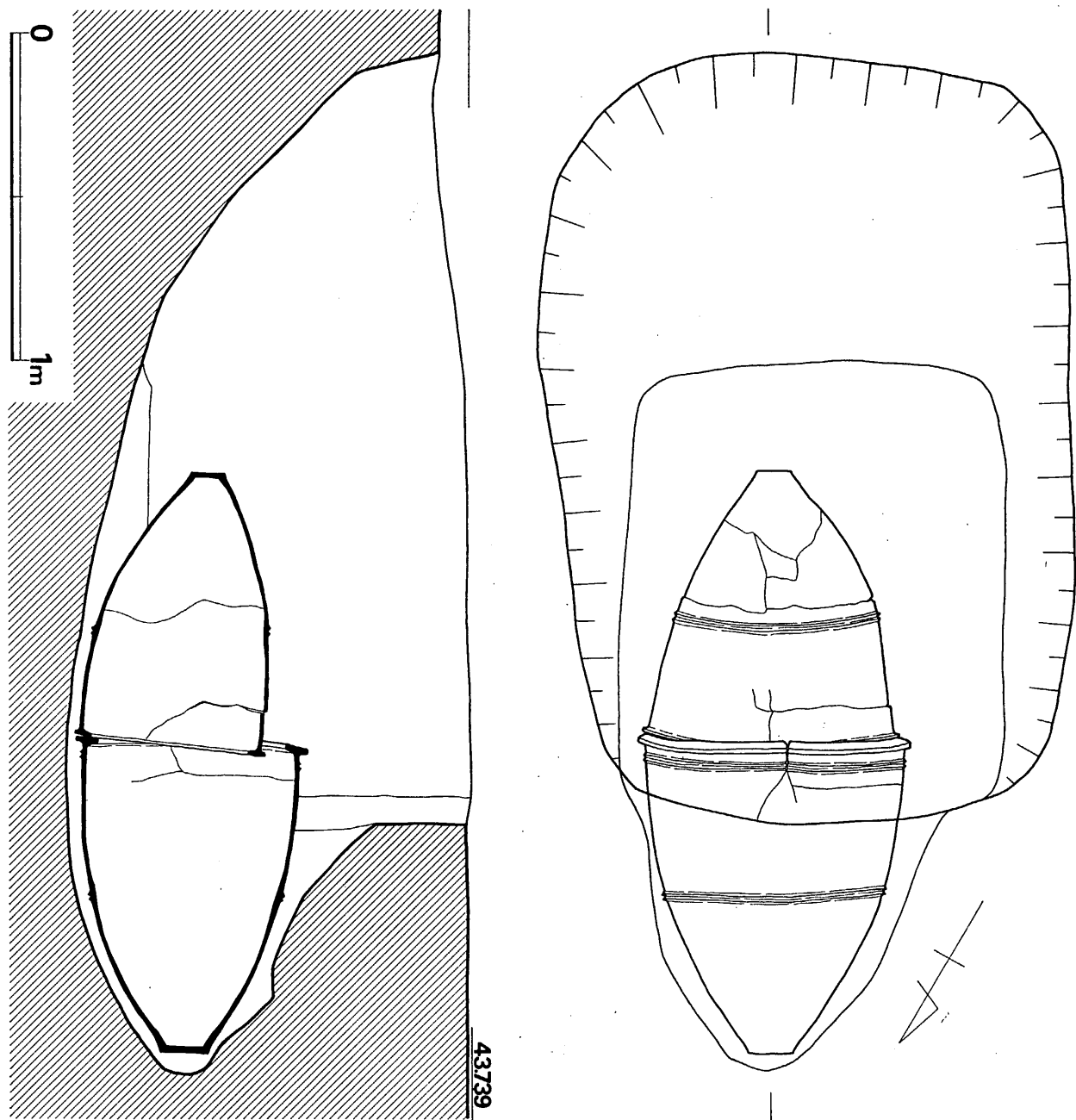


43.799



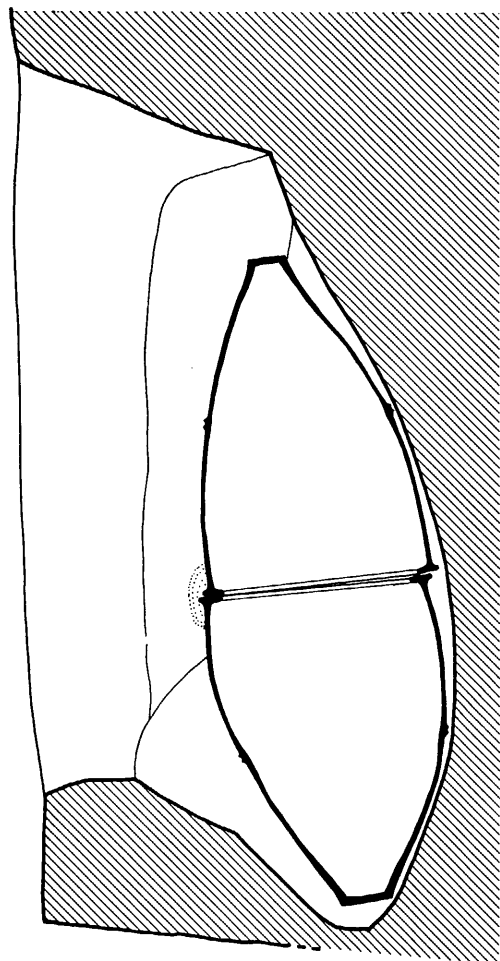
0 1m

第7图 9号甕棺墓实测图(1/20)

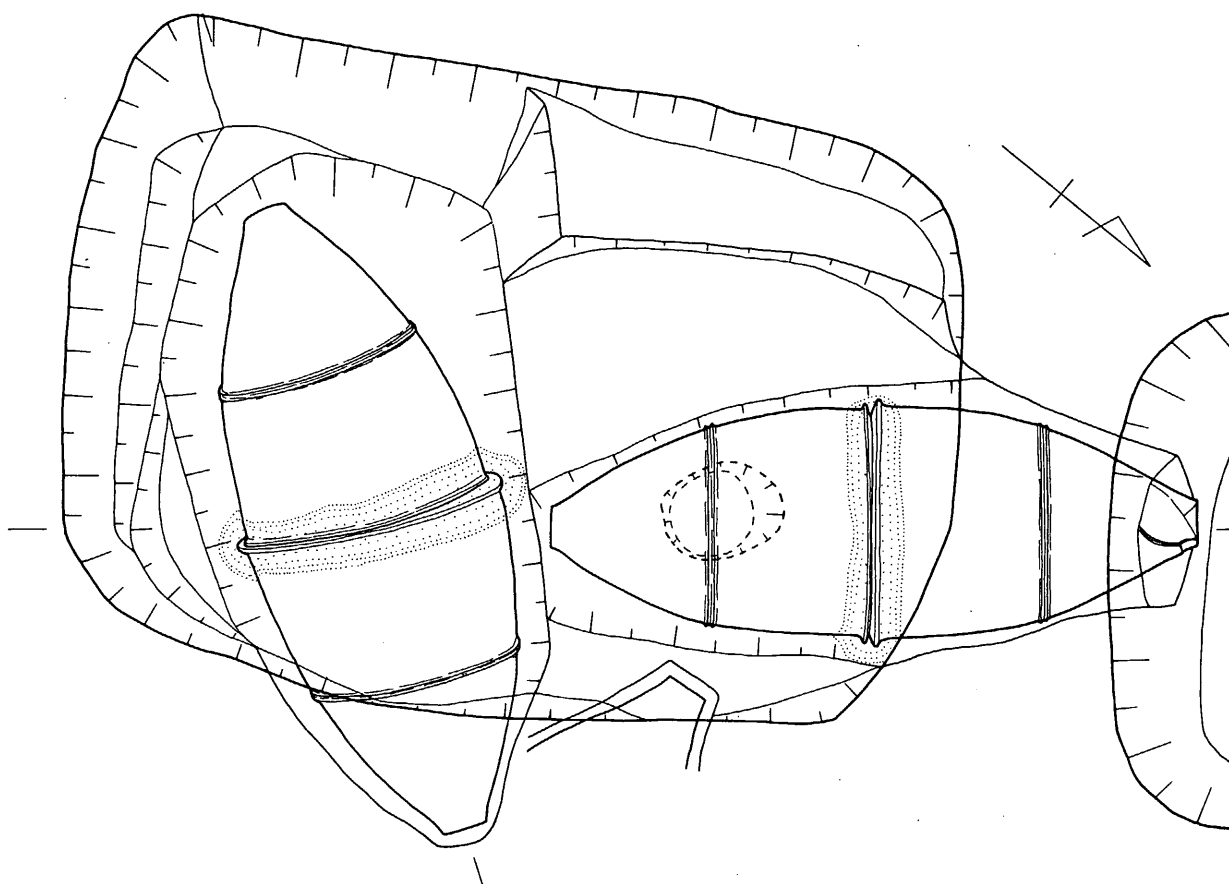


第 8 图 10 号甕棺墓实测图 (1/50)

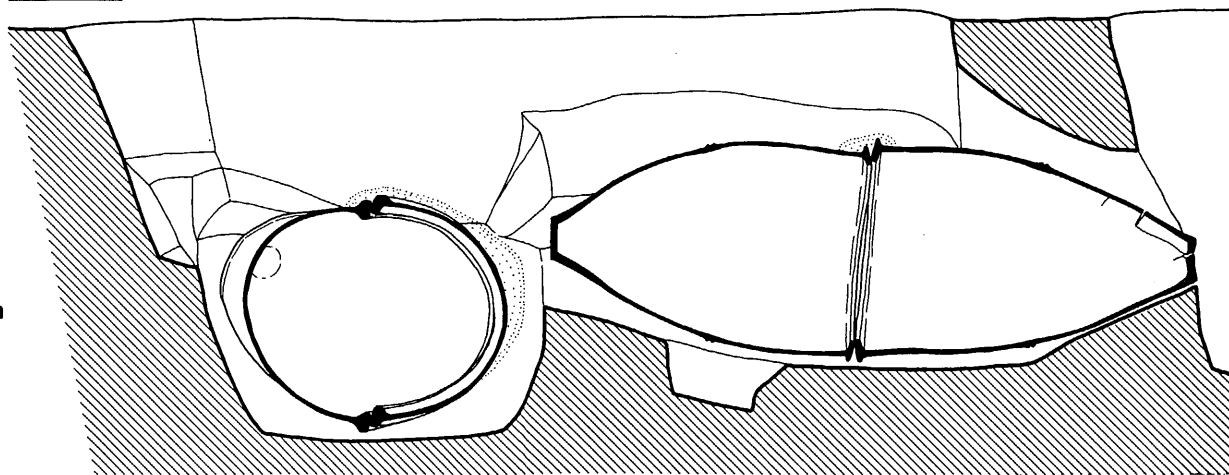
43778



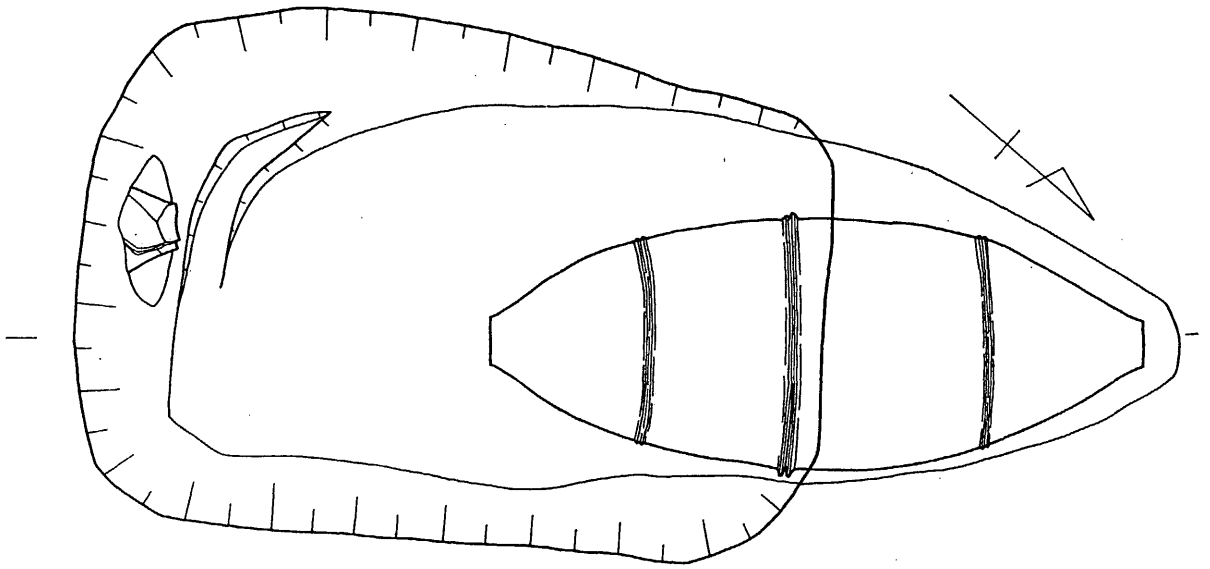
0 1m



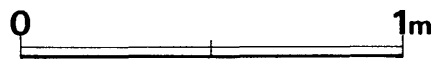
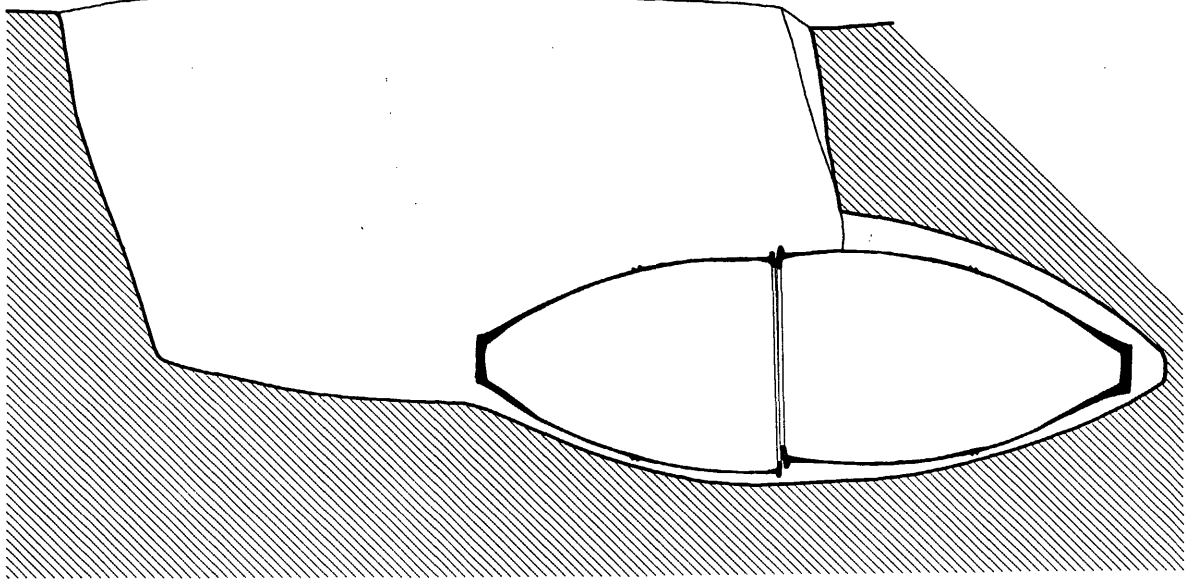
43740



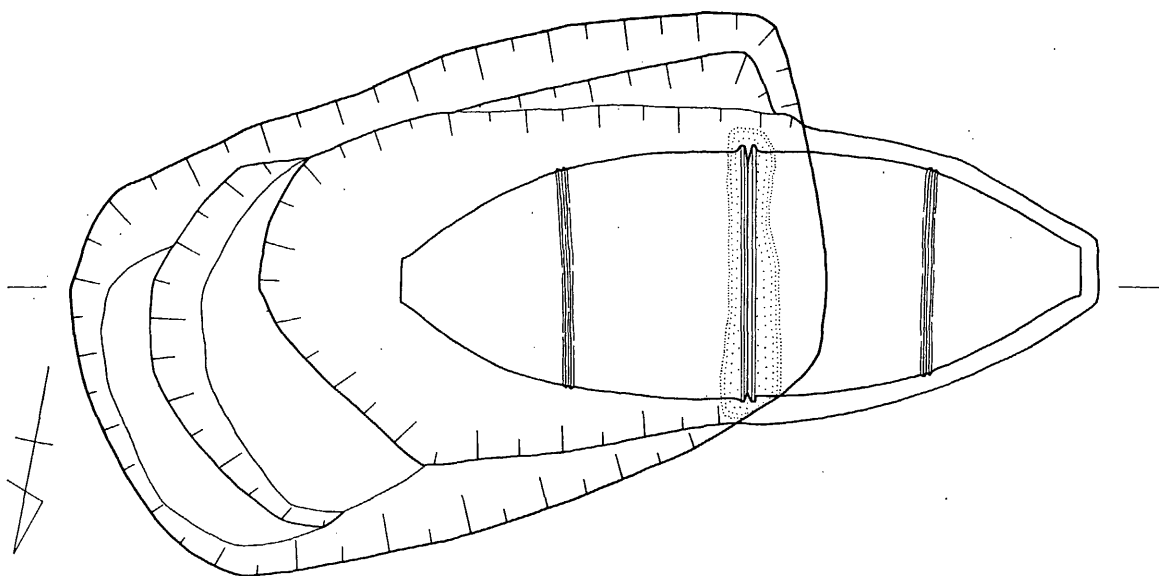
第9図 12号(右)・13号(左) 甕棺墓実測図(1/20)



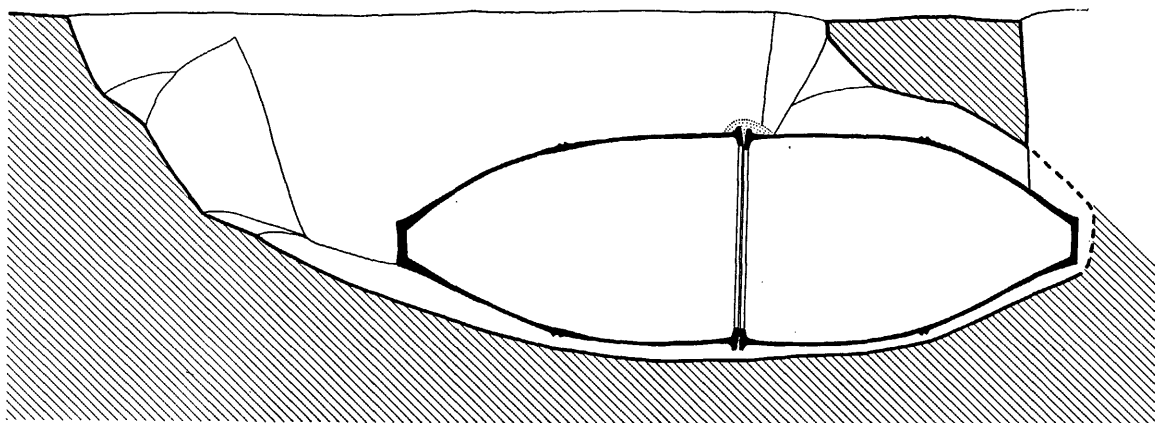
43.757



第10图 11号甕棺墓实测图(1/20)

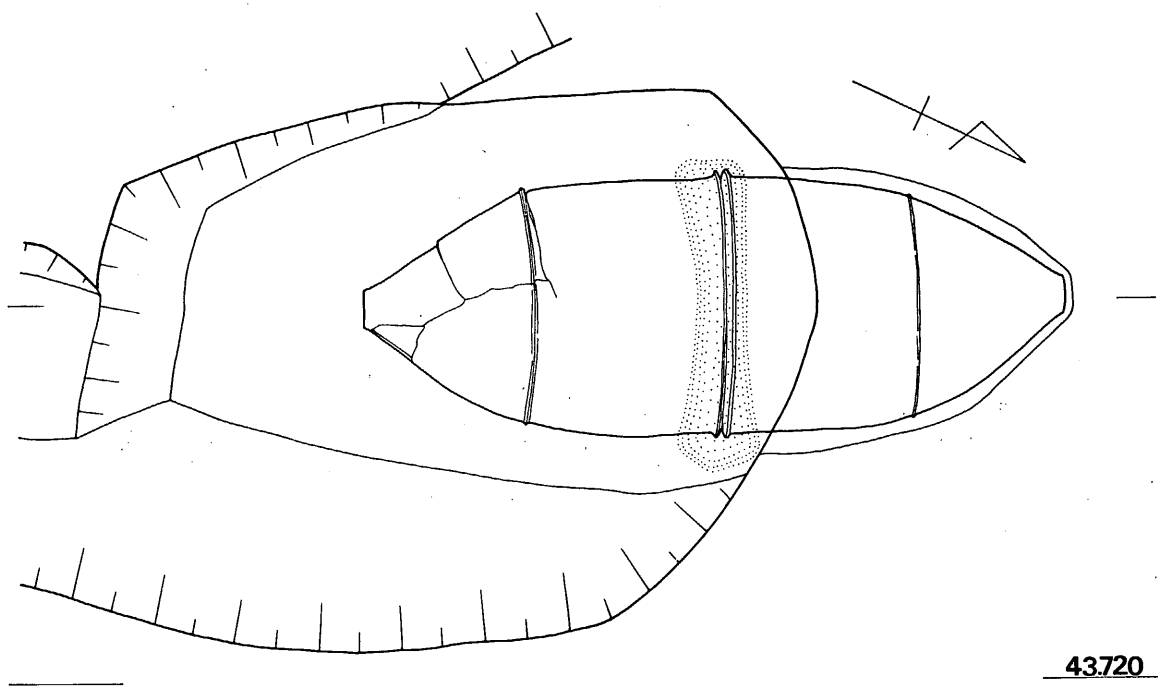


43.777

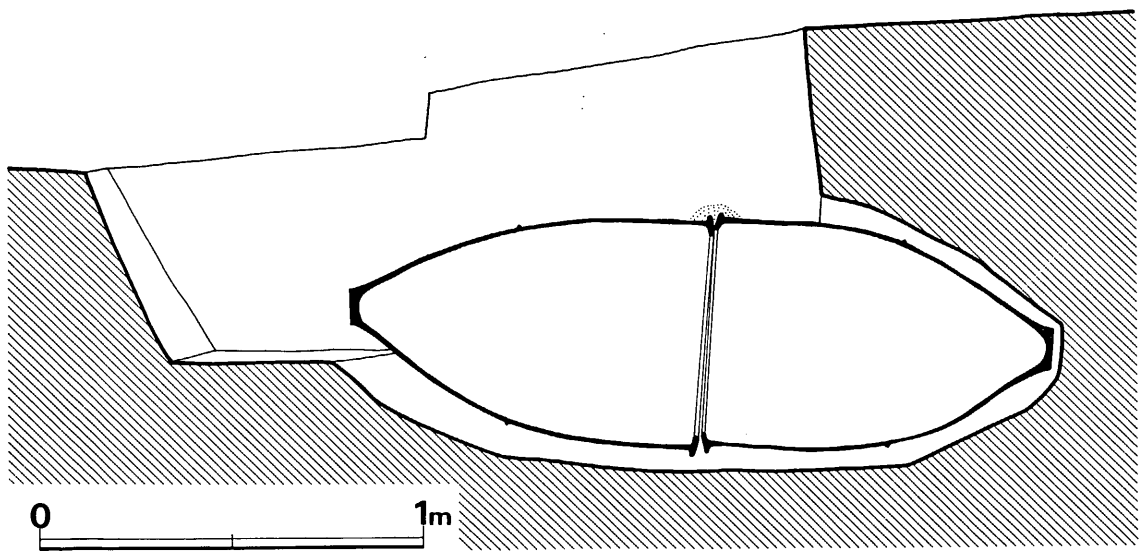


0 1m

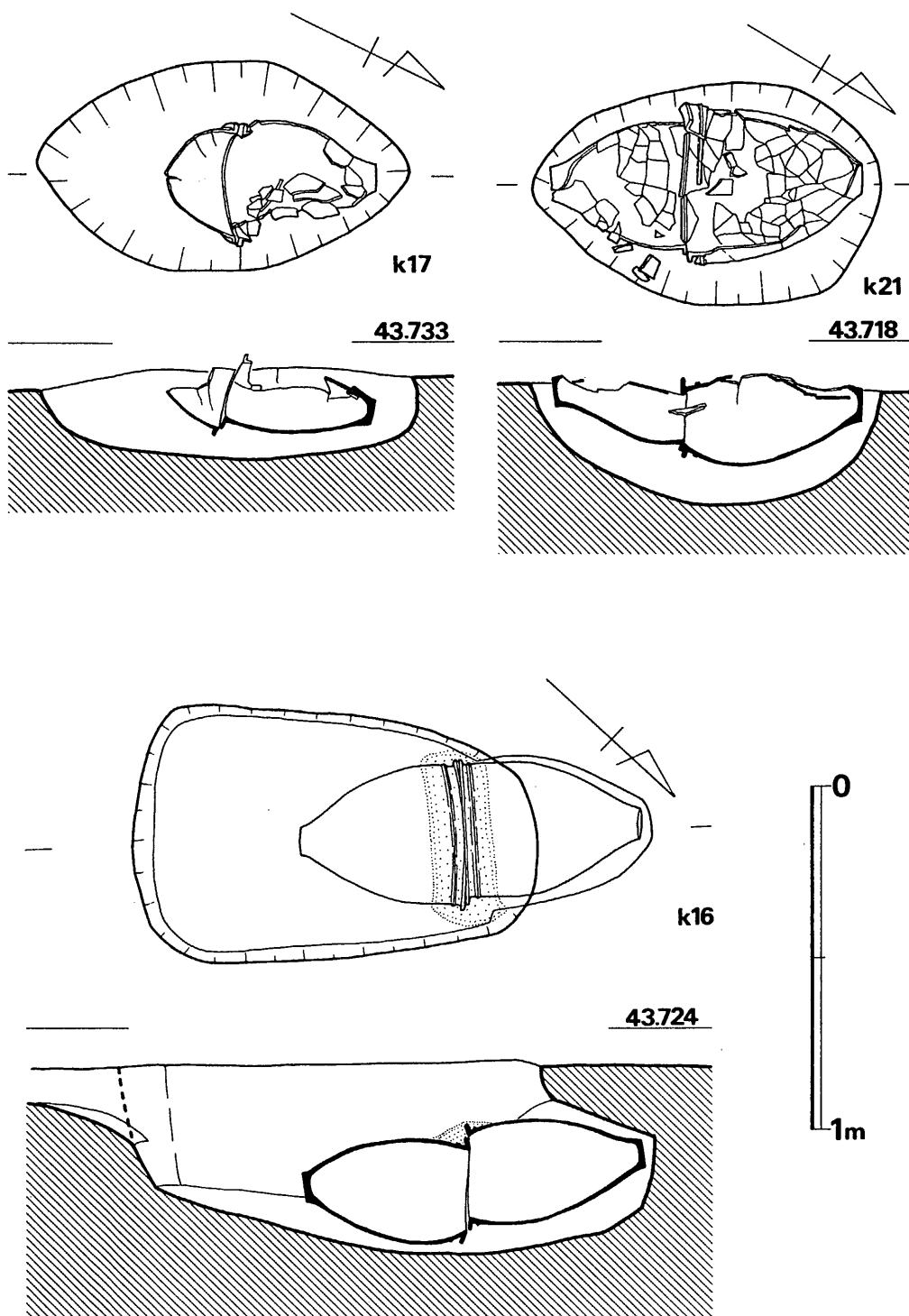
第 11 图 14 号 甌 棺 墓 实 测 图



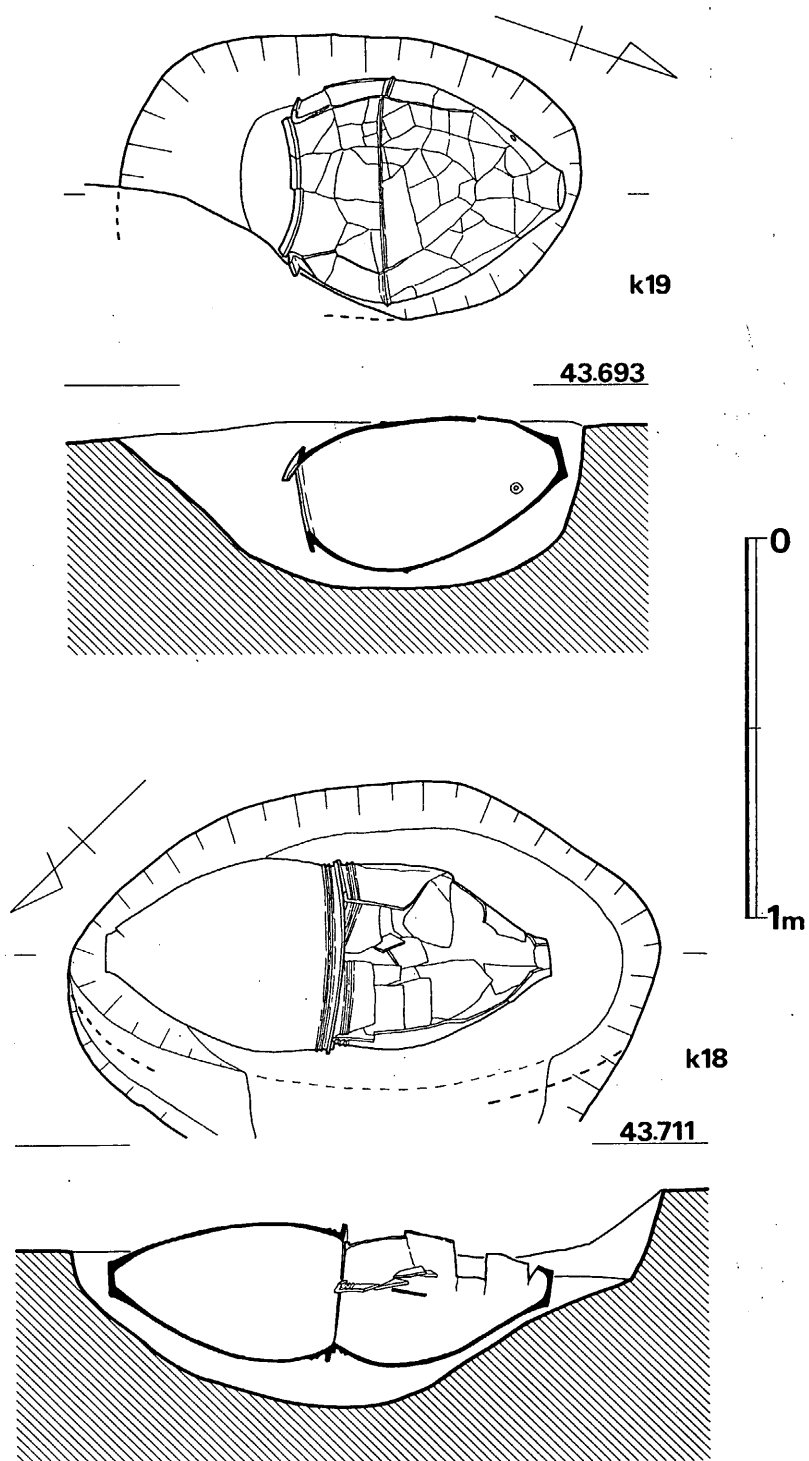
43720



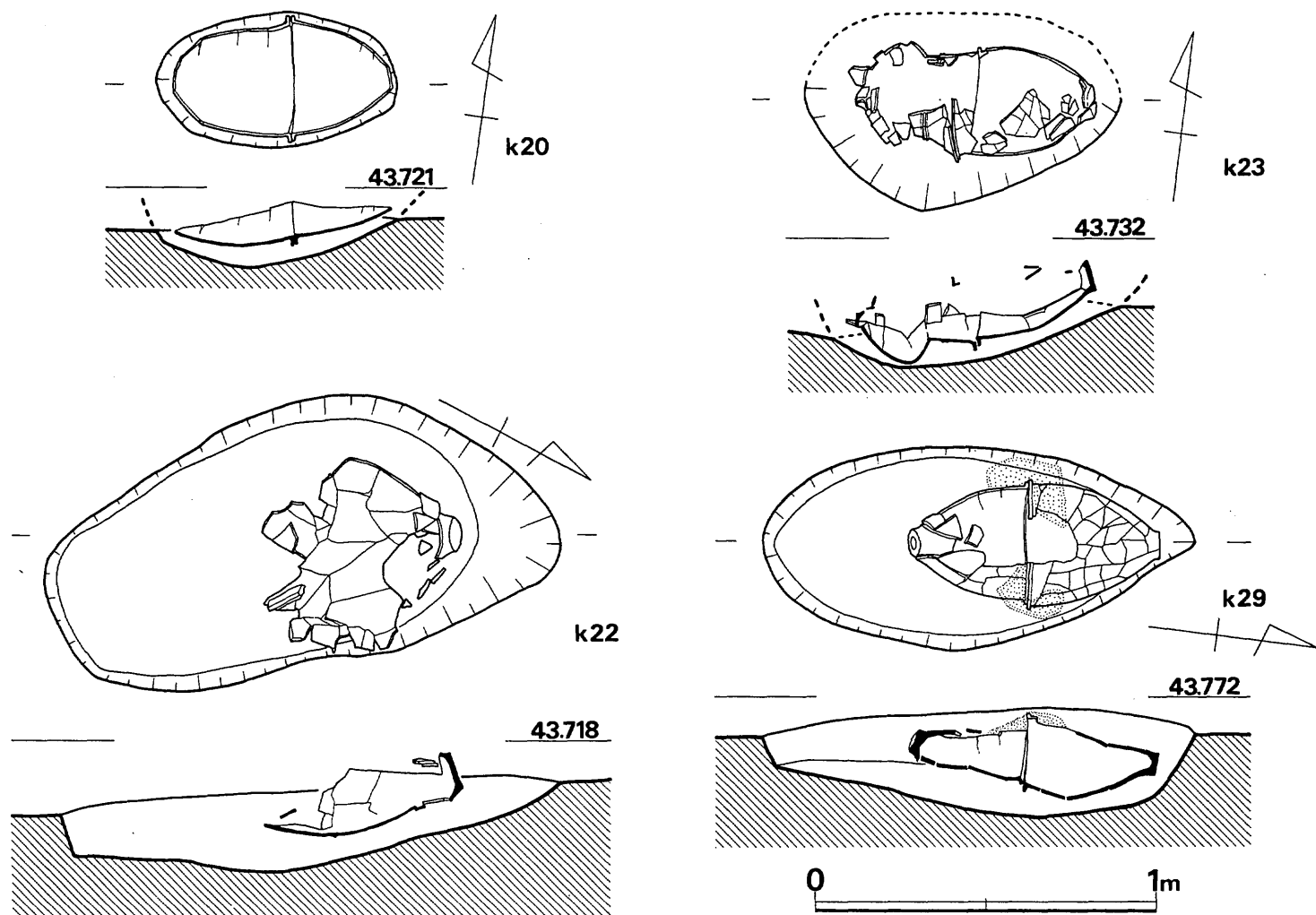
第 12 图 15 号甕棺墓実測図 (1/20)



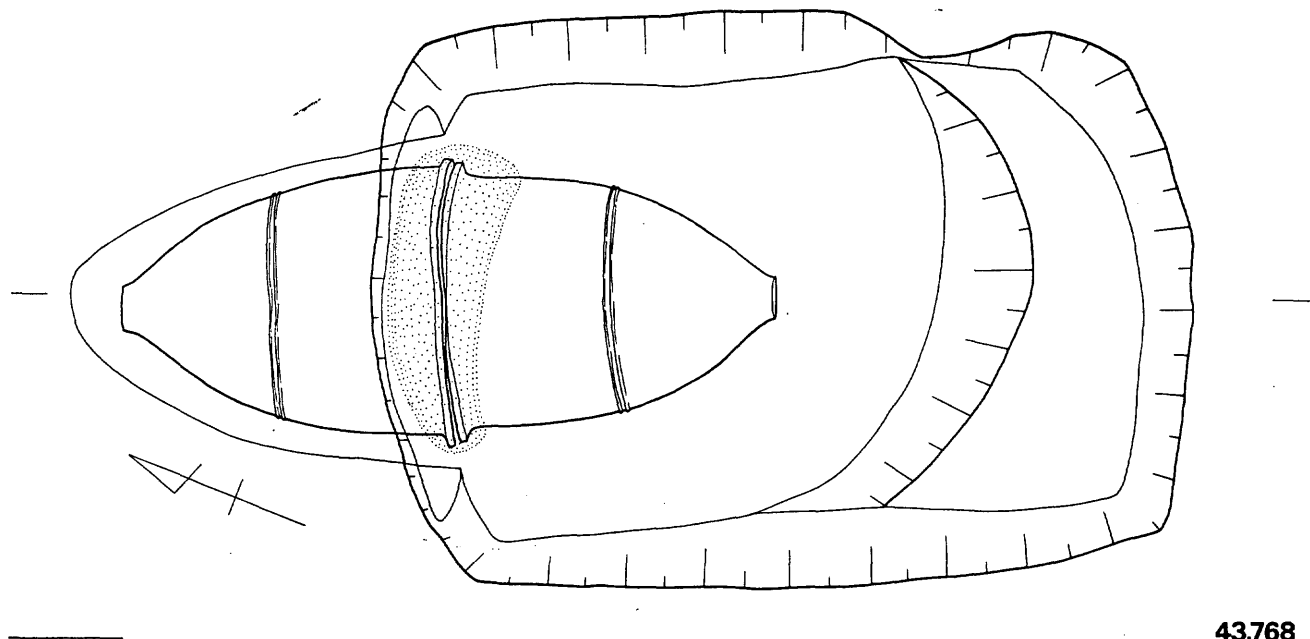
第 13 图 16号·17号·21号 甌棺墓 实测图 (1/20)



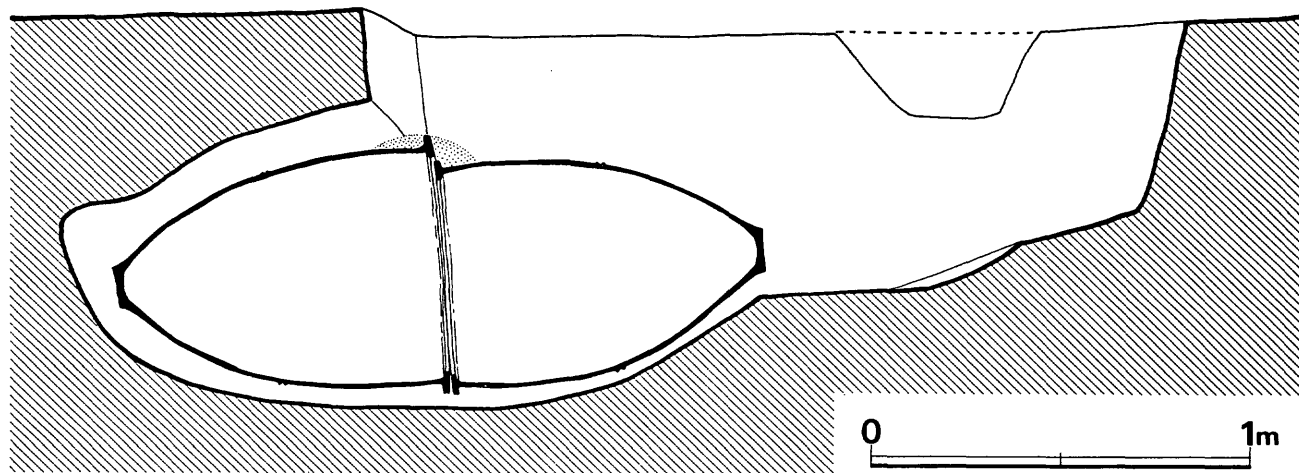
第 14 图 18号・19号 甕棺 墓 実測図 (1/20)



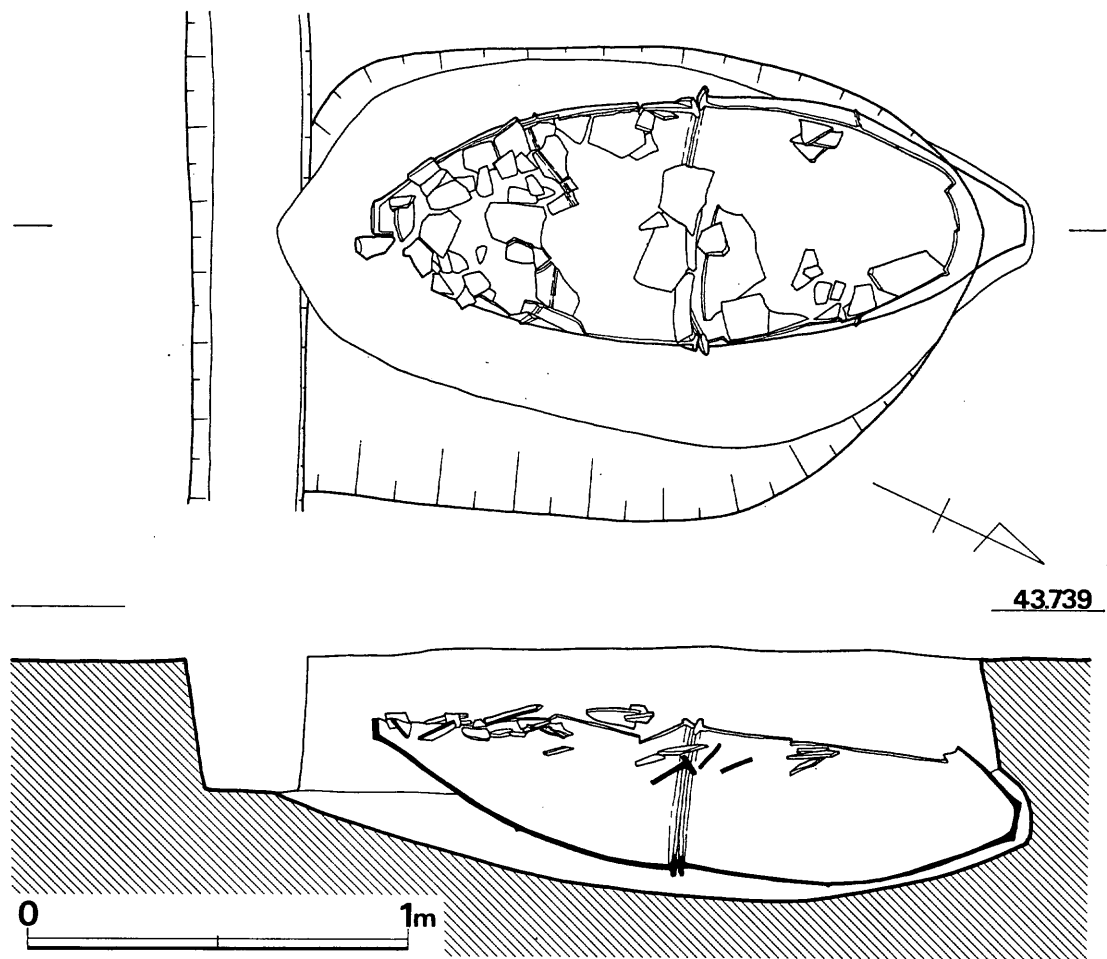
第 15 图 20号・22号・23号・29号 甕棺墓 実測図 (1/20)



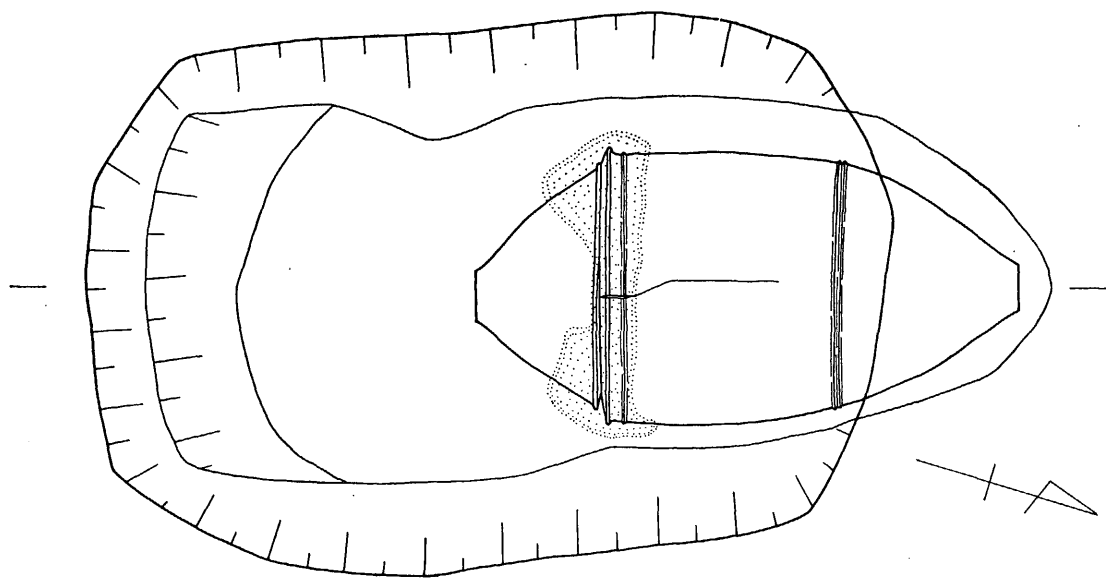
43.768



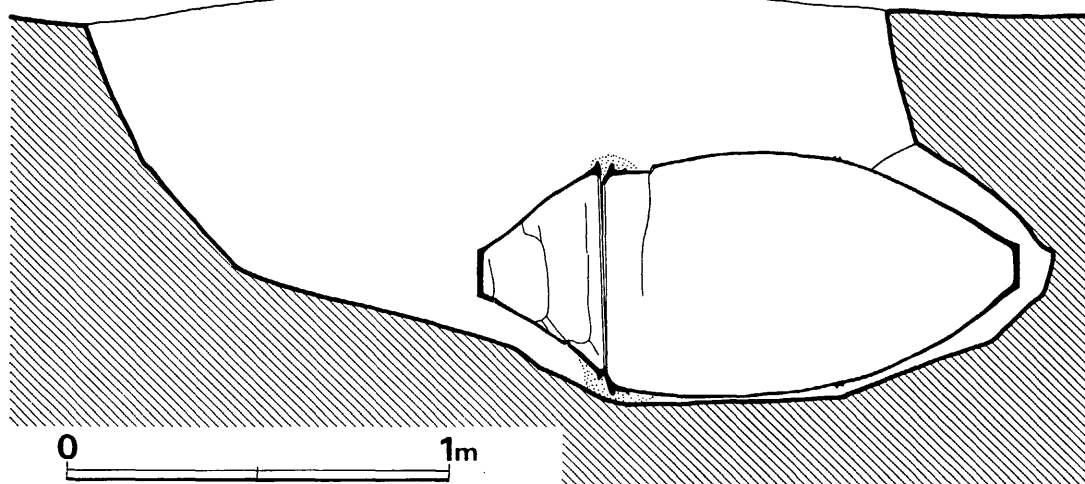
第 16 图 24 号甕棺墓实测图 (1/20)



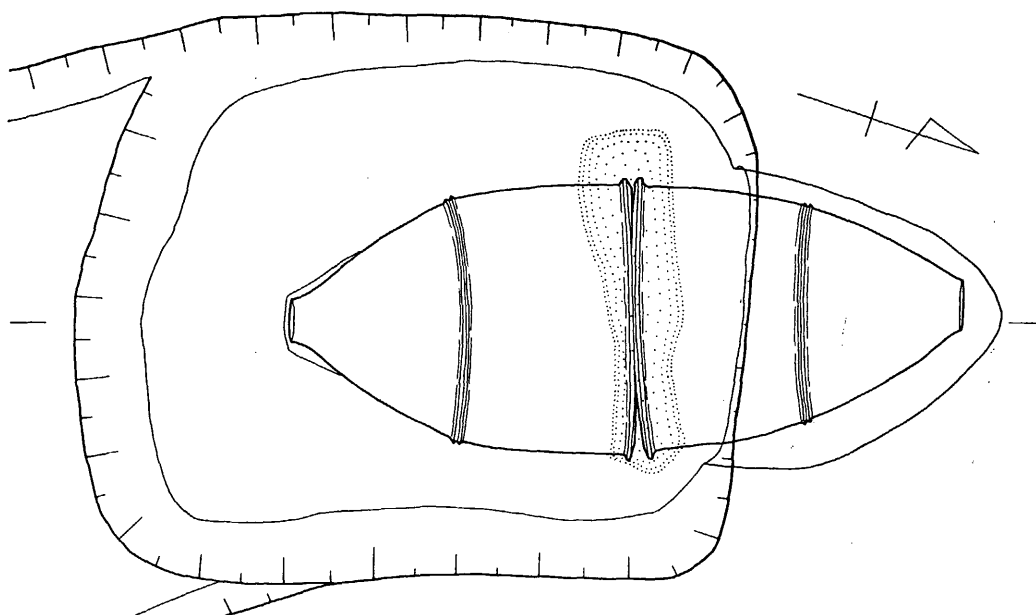
第 17 图 25 号甕棺墓实测图 (1/20)



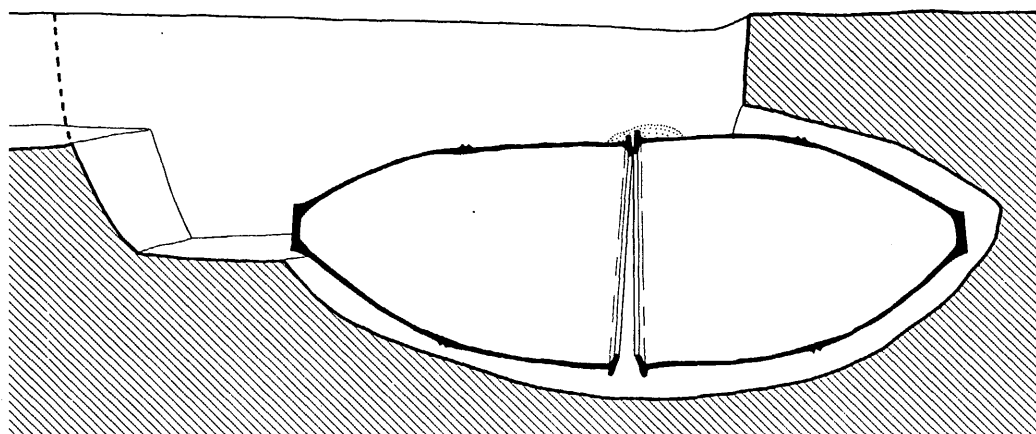
43.696



第 18 図 26 号 甕棺墓実測図 (1/20)

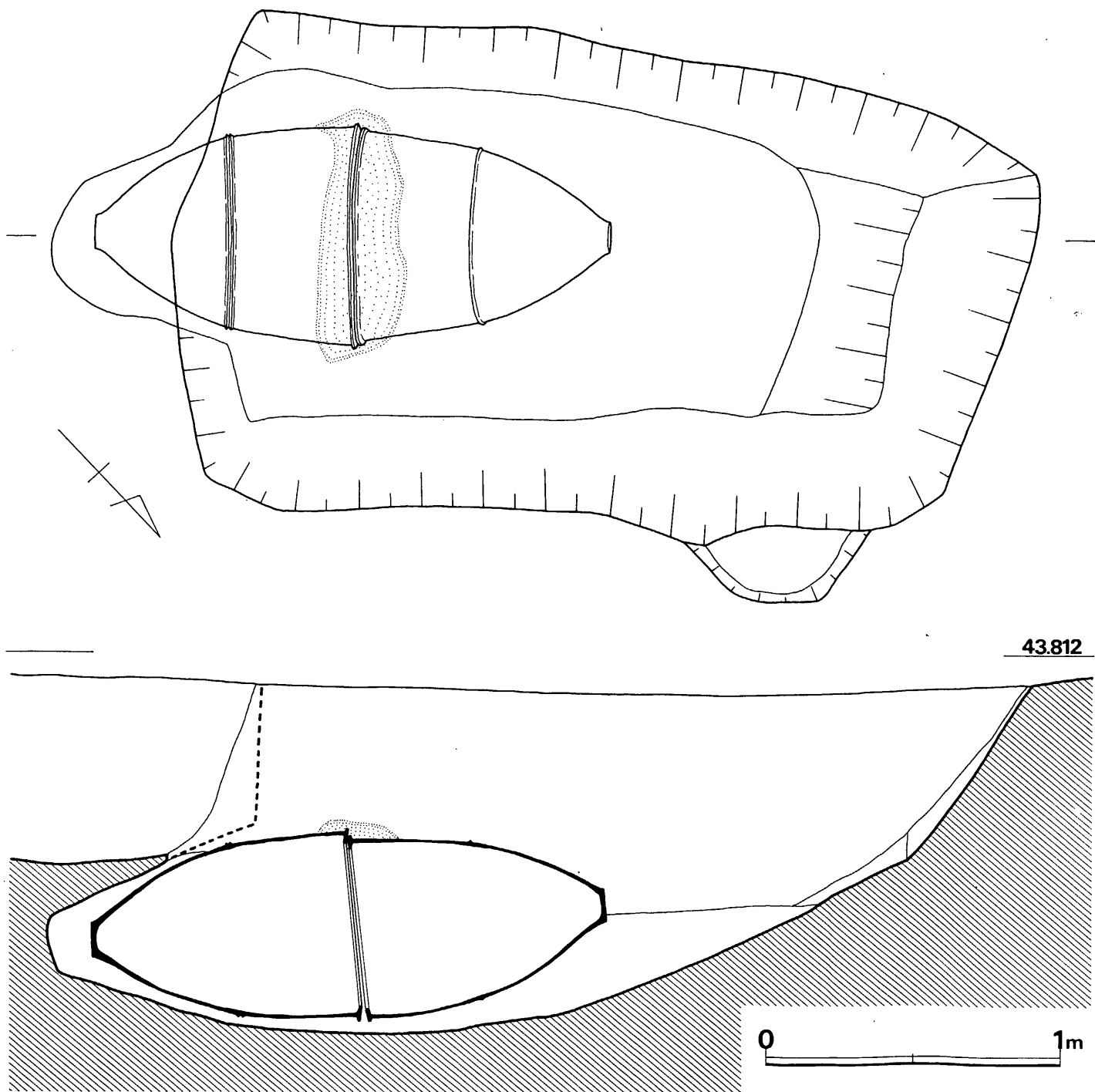


43.758

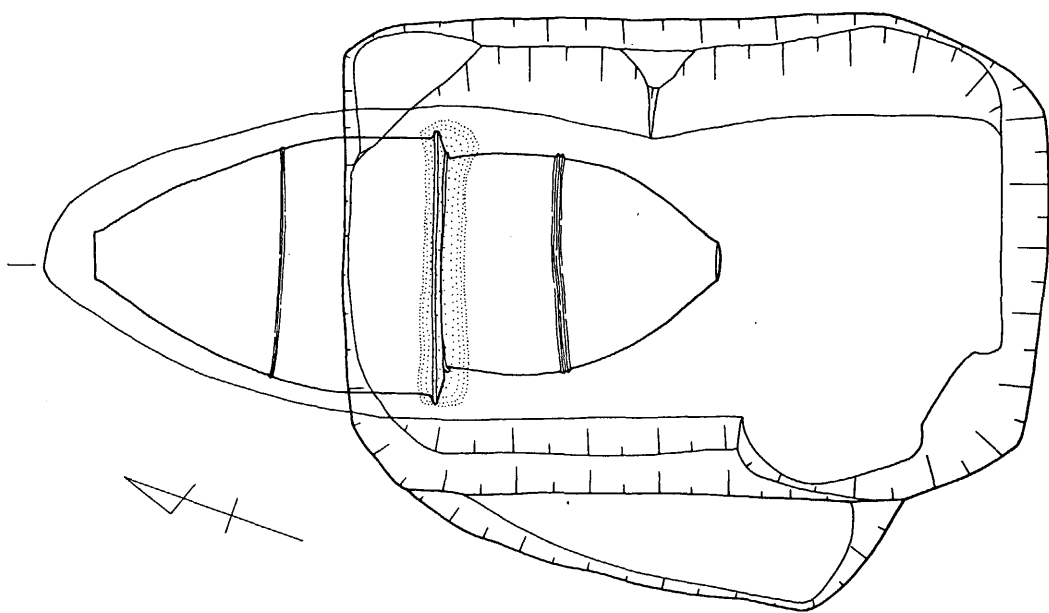


0 1m

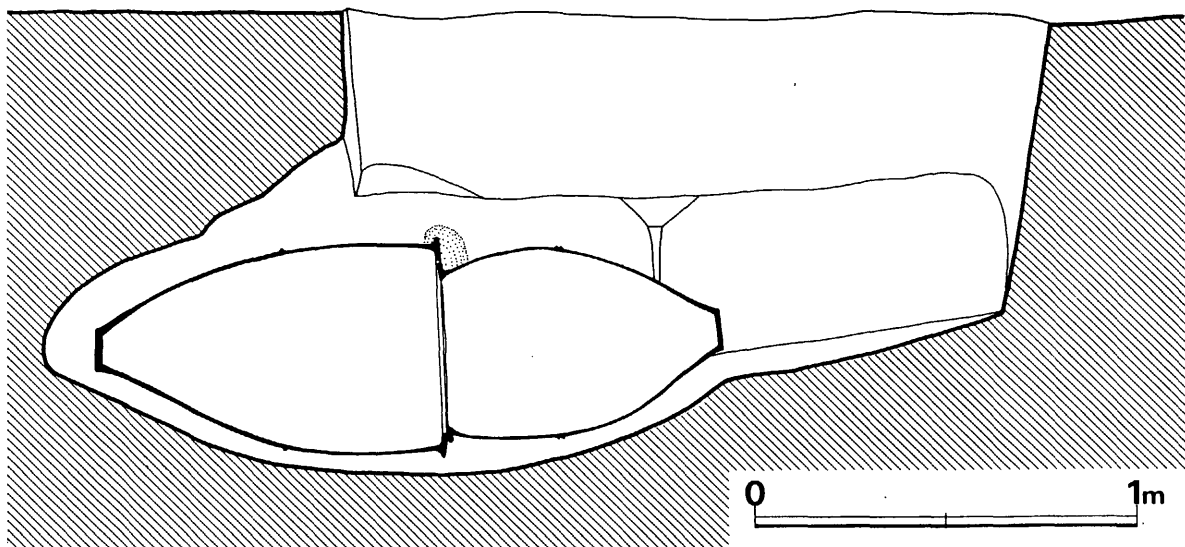
第 19 図 27号 甕棺墓 実測図 (1/20)



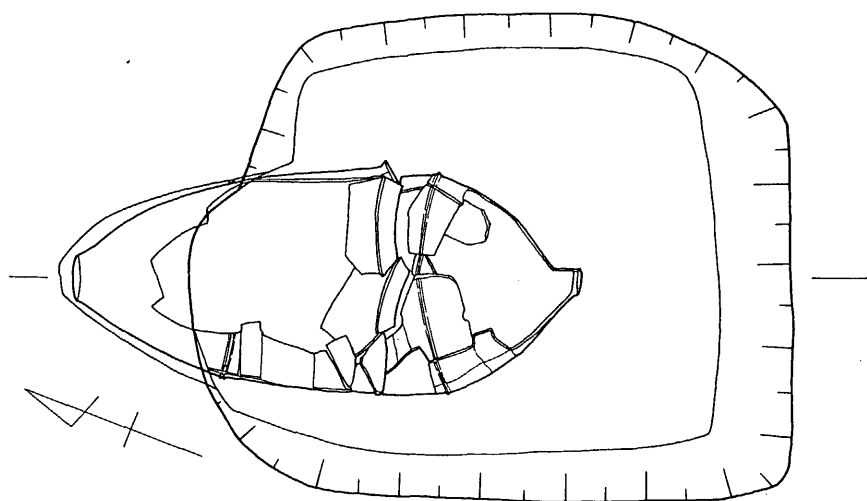
第 20 図 28 号 甕棺墓実測図 (1/20)



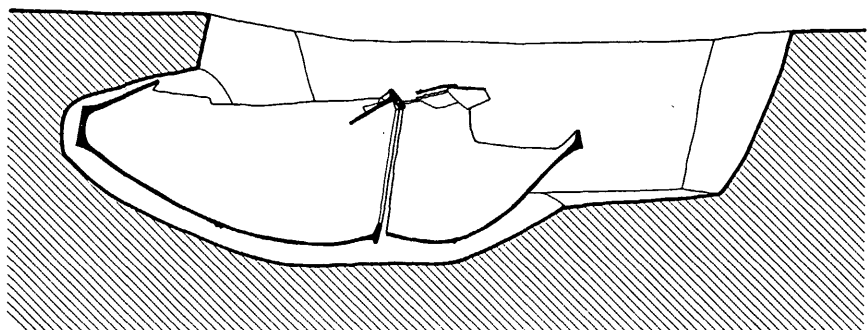
43.745



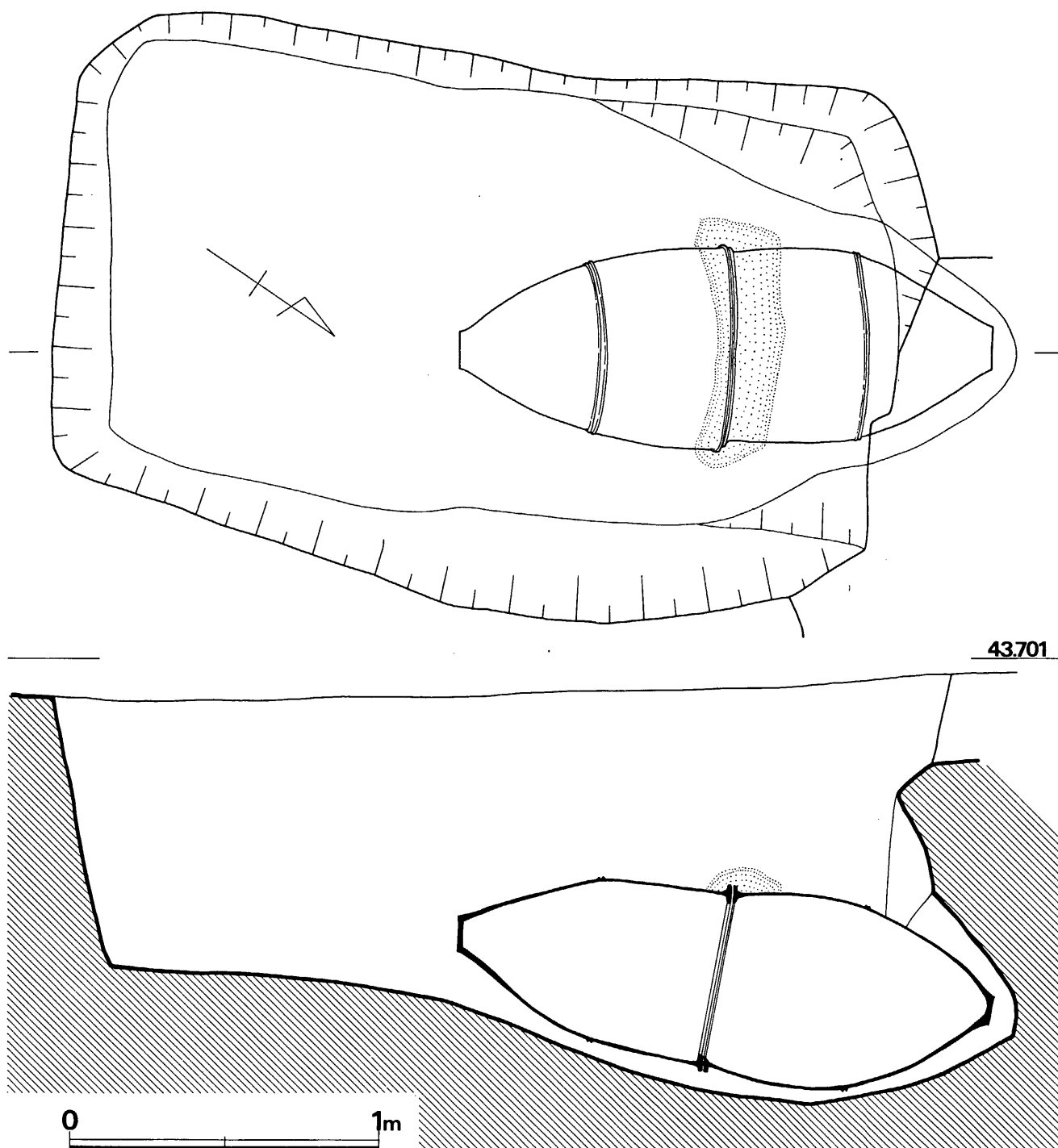
第 21 図 30 号 甕棺墓 実測図 (1/20)



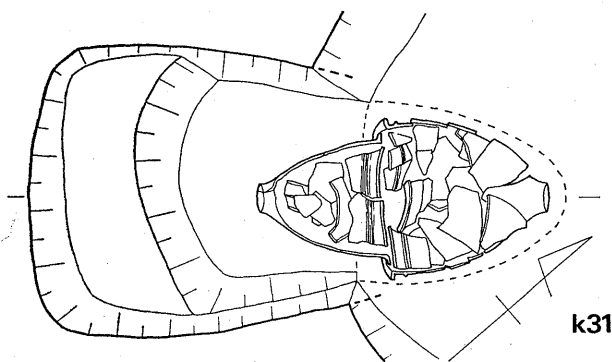
43.705



第 22 図 32 号甕棺墓実測図 (1/50)

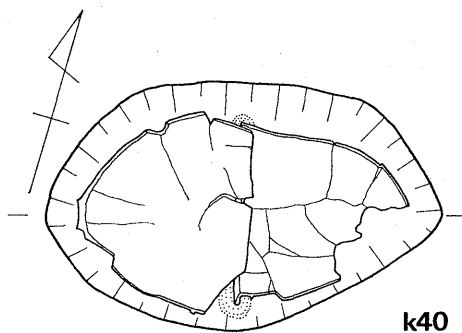


第 23 図 33 号甕棺墓実測図 (1/40)



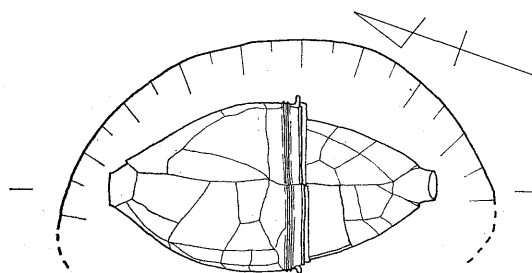
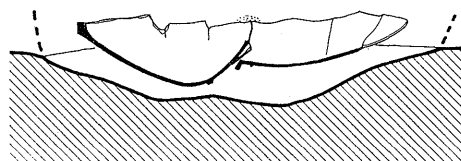
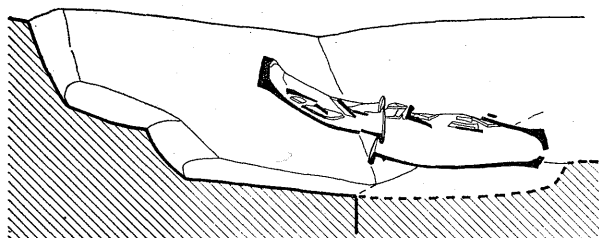
k31

43.813



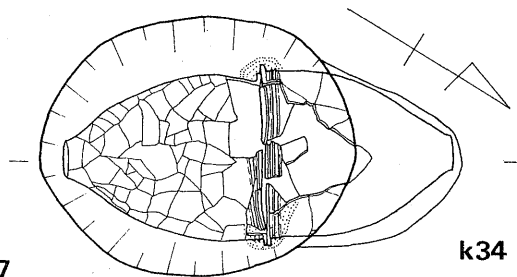
k40

43467



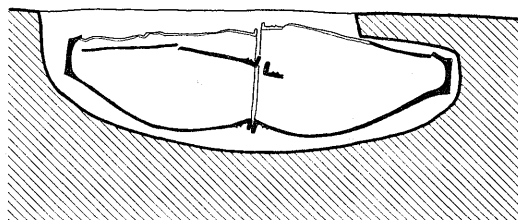
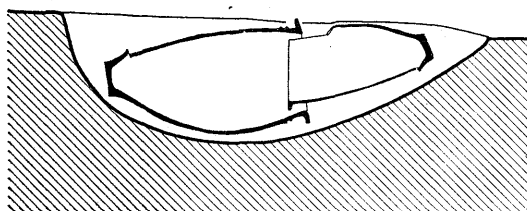
k37

43.721



k34

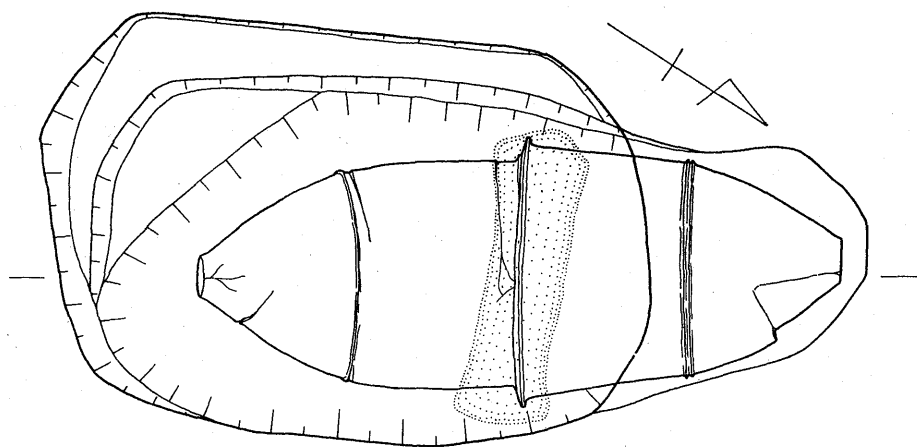
43.711



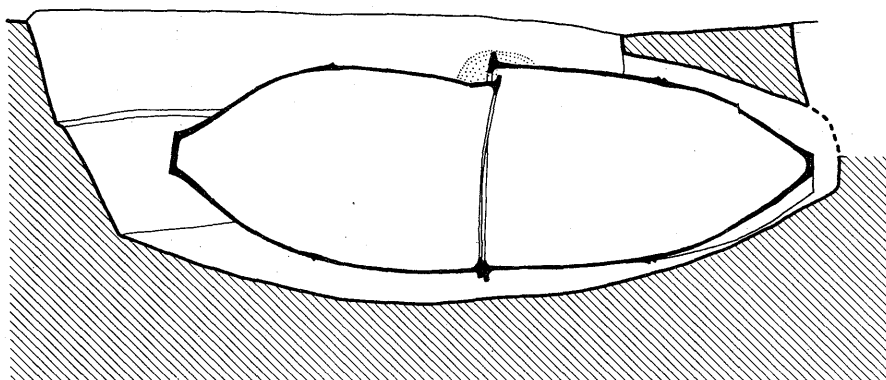
0

1m

第 24 图 31号・34号・37号・40号 甕棺墓実測図 (1/20)

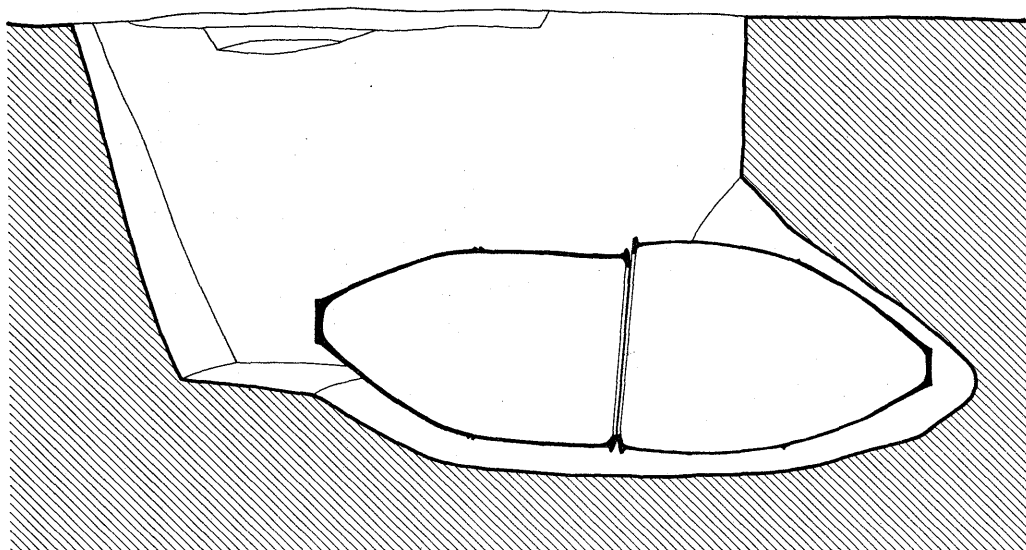
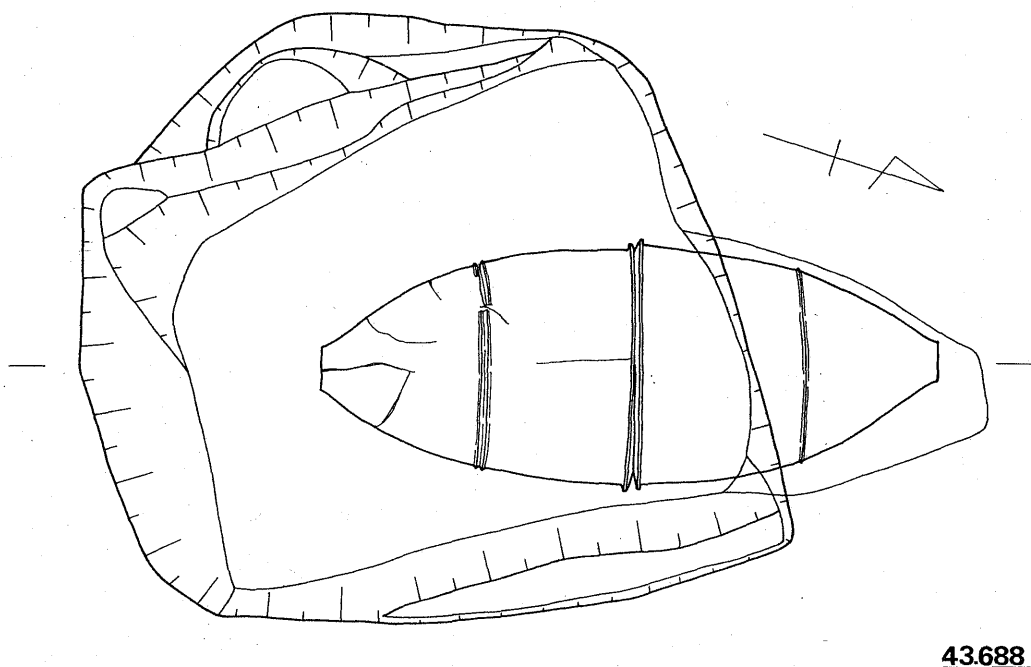


43.850



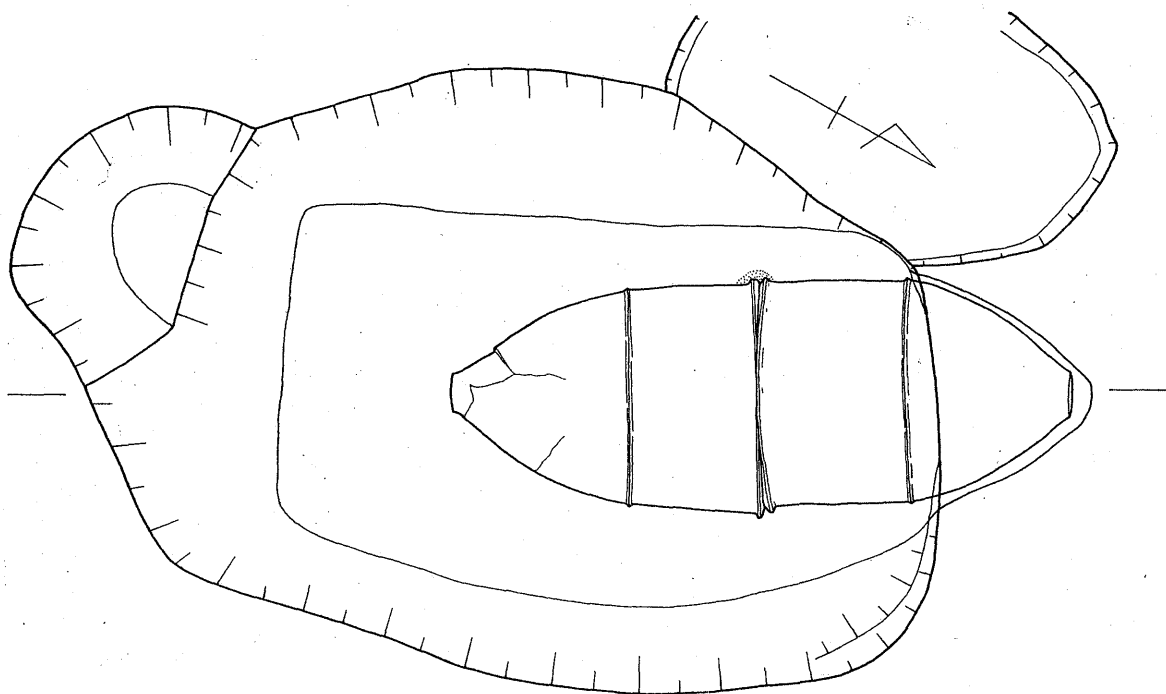
0 1m

第 25 図 35 号甕棺墓実測図 (1/20)

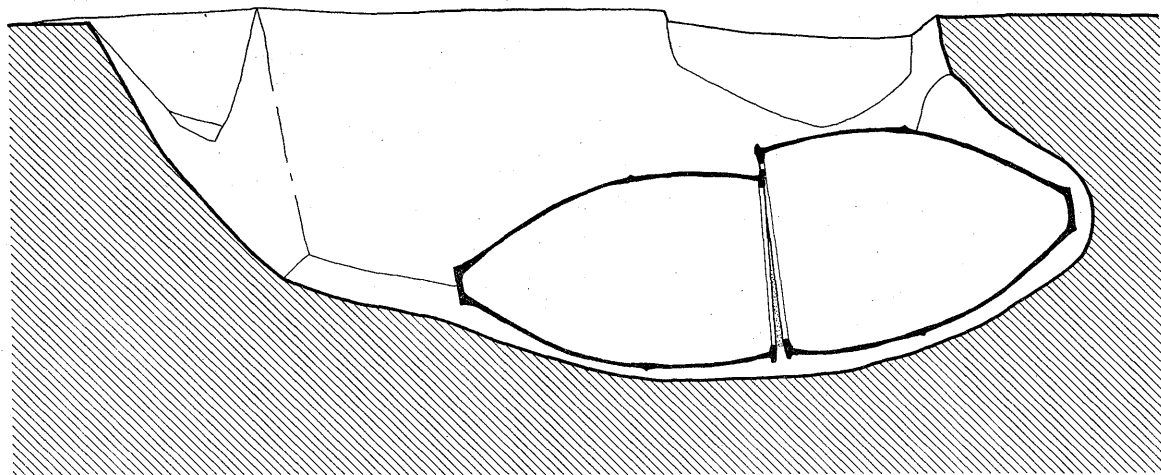


0 1m

第 26 图 36 号甕棺墓实测图 (1/20)

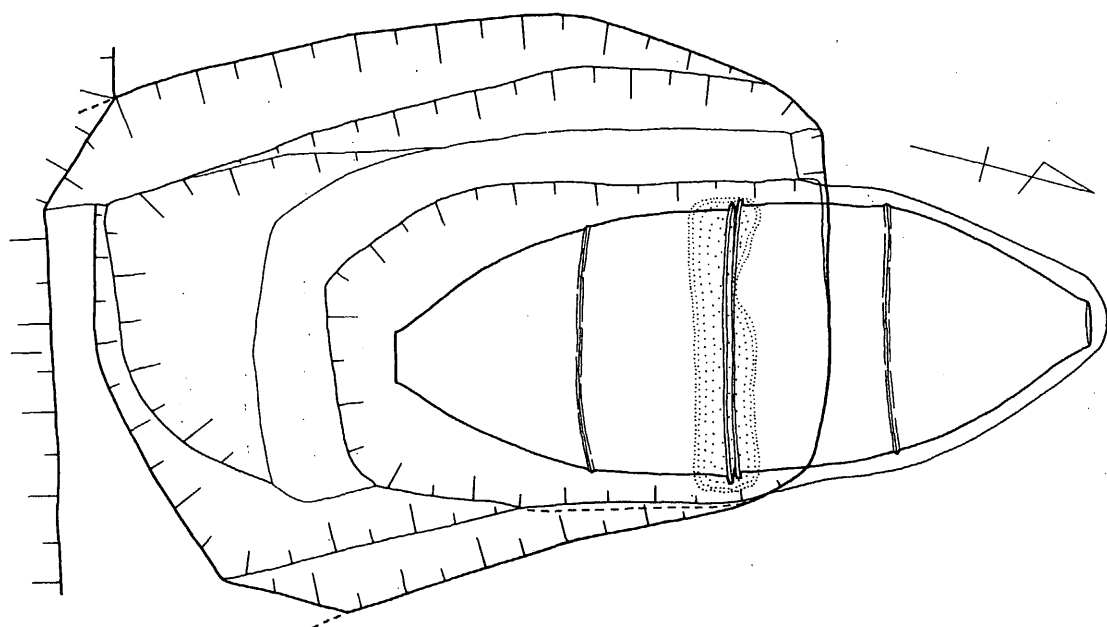


43.719

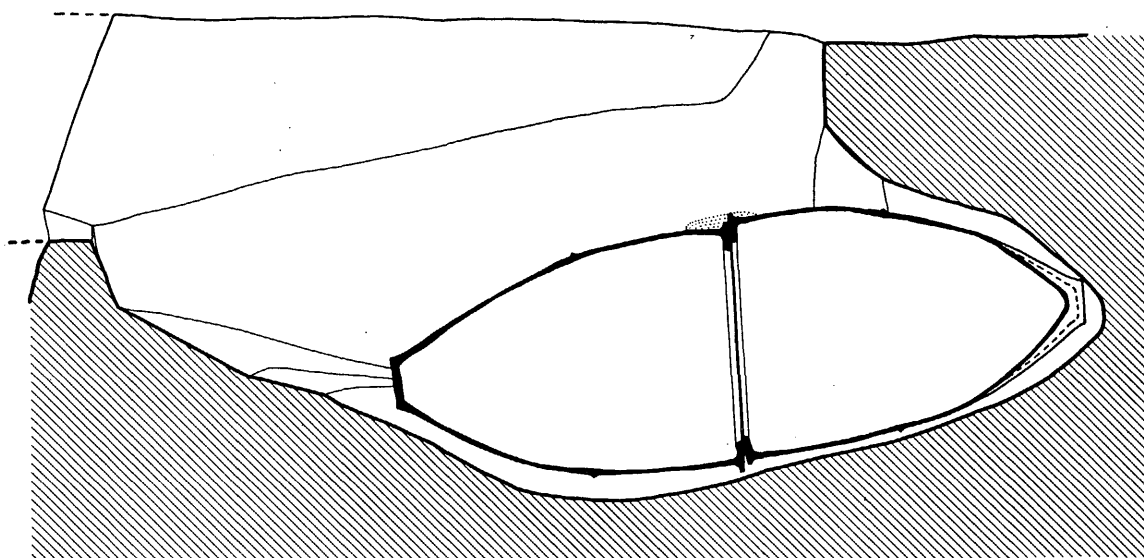


0 1m

第 27 图 38 号甕棺墓实测图 (1/20)

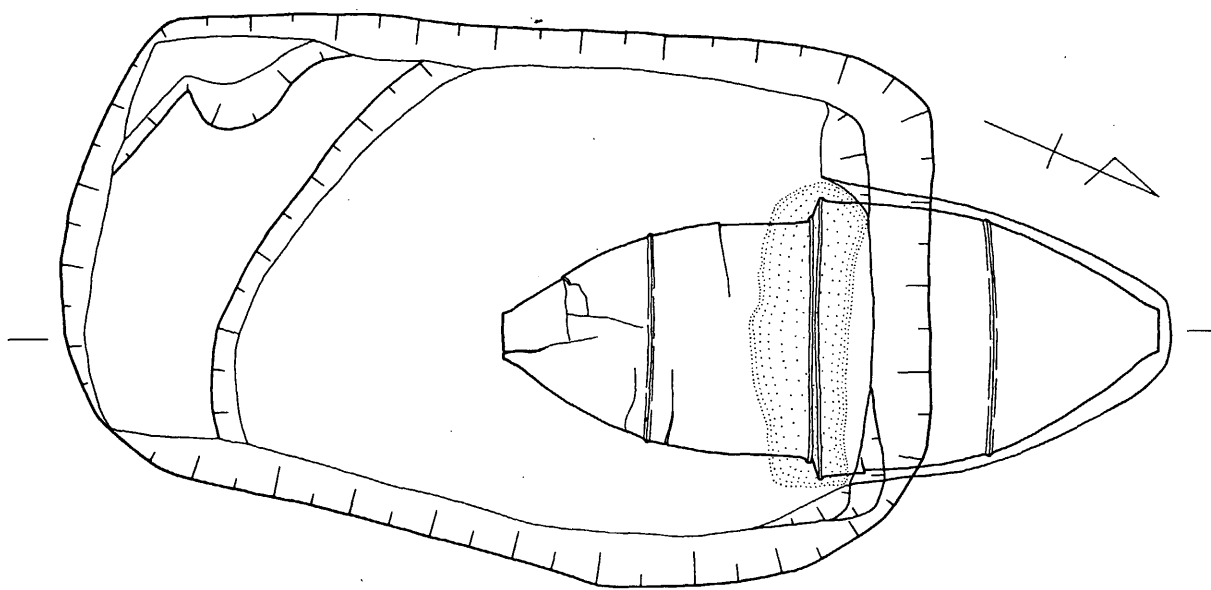


43.546

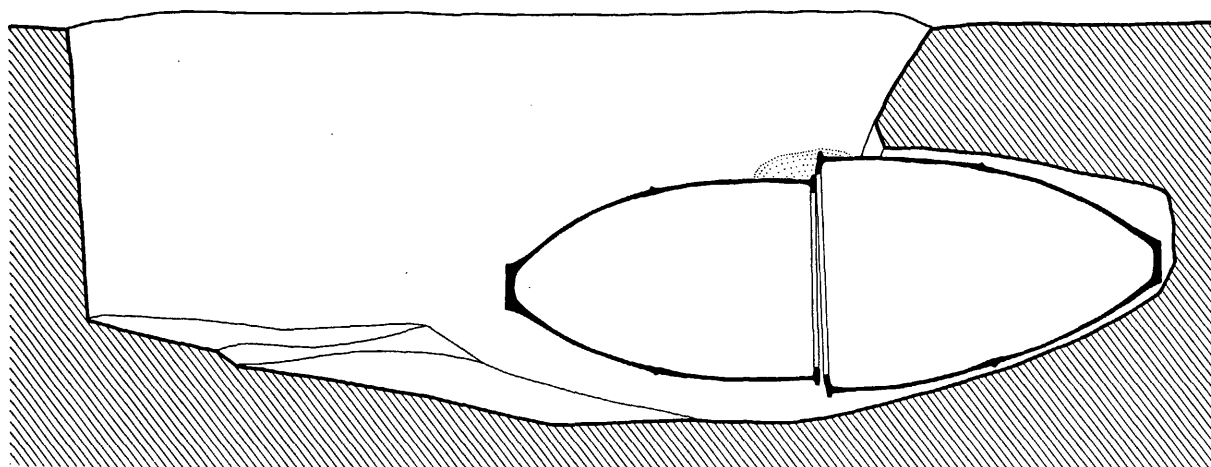


0 1m

第 28 图 39 号 甬棺 墓 实 测 图 (1/20)

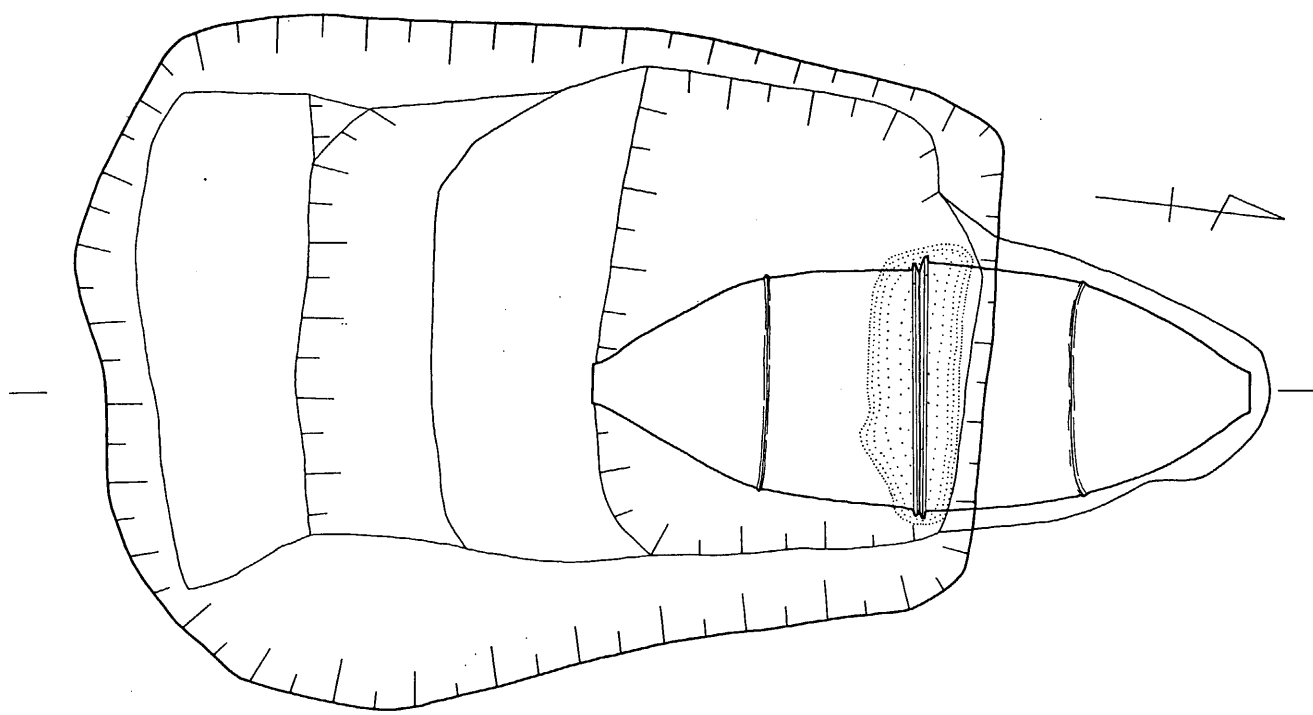


43455

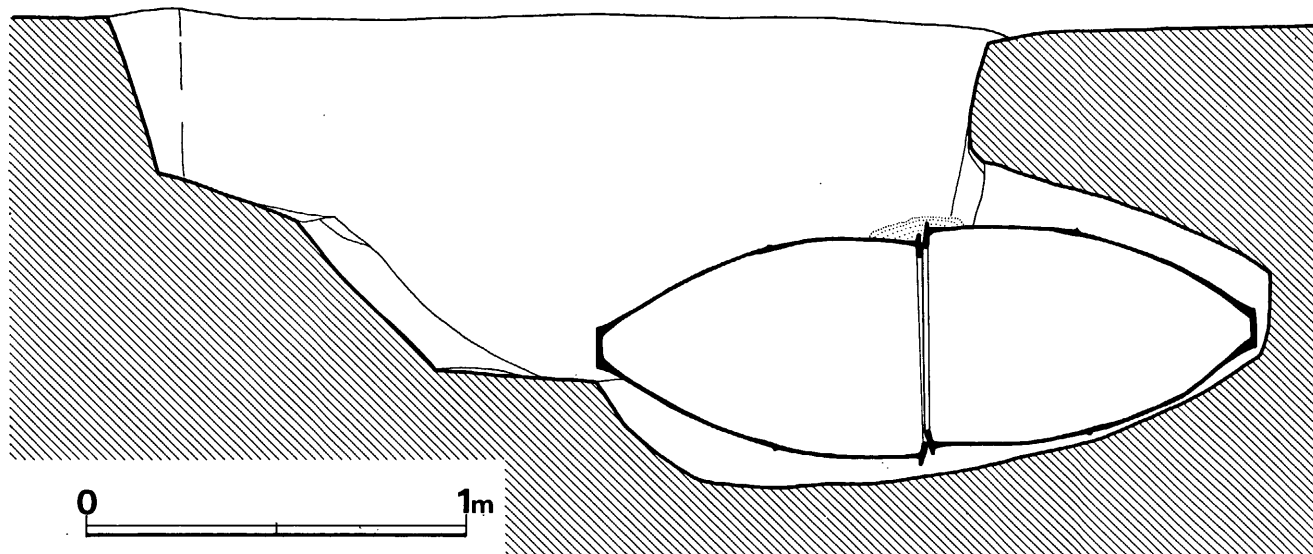


0 1m

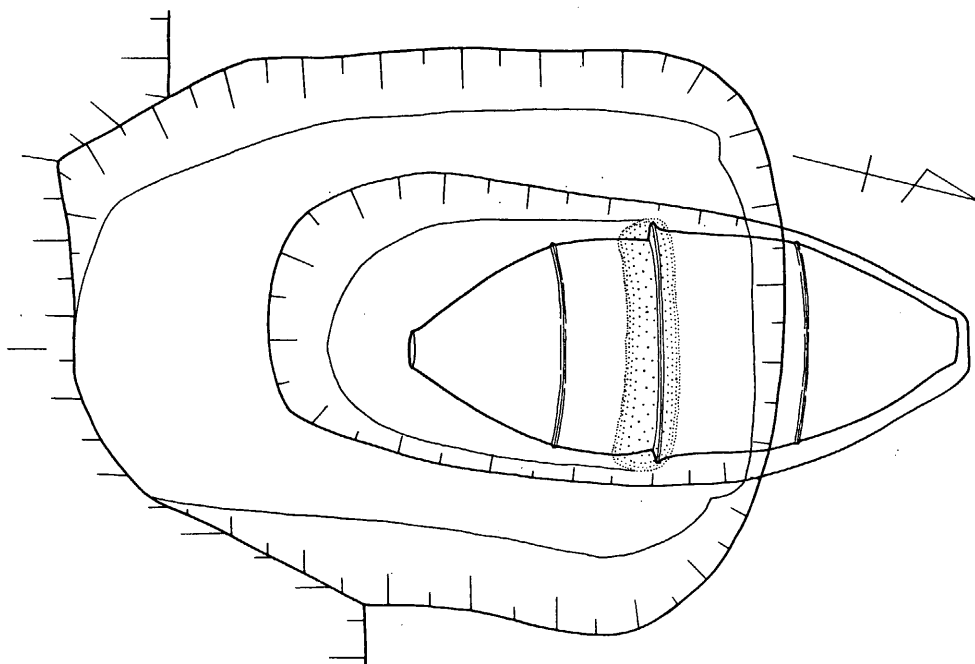
第 29 図 42 号甕棺墓実測図 (1/20)



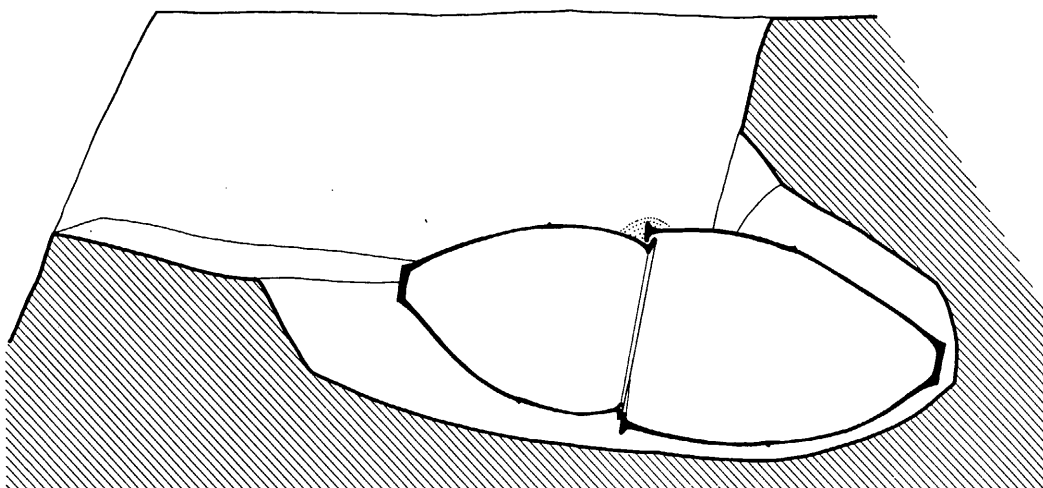
43.517



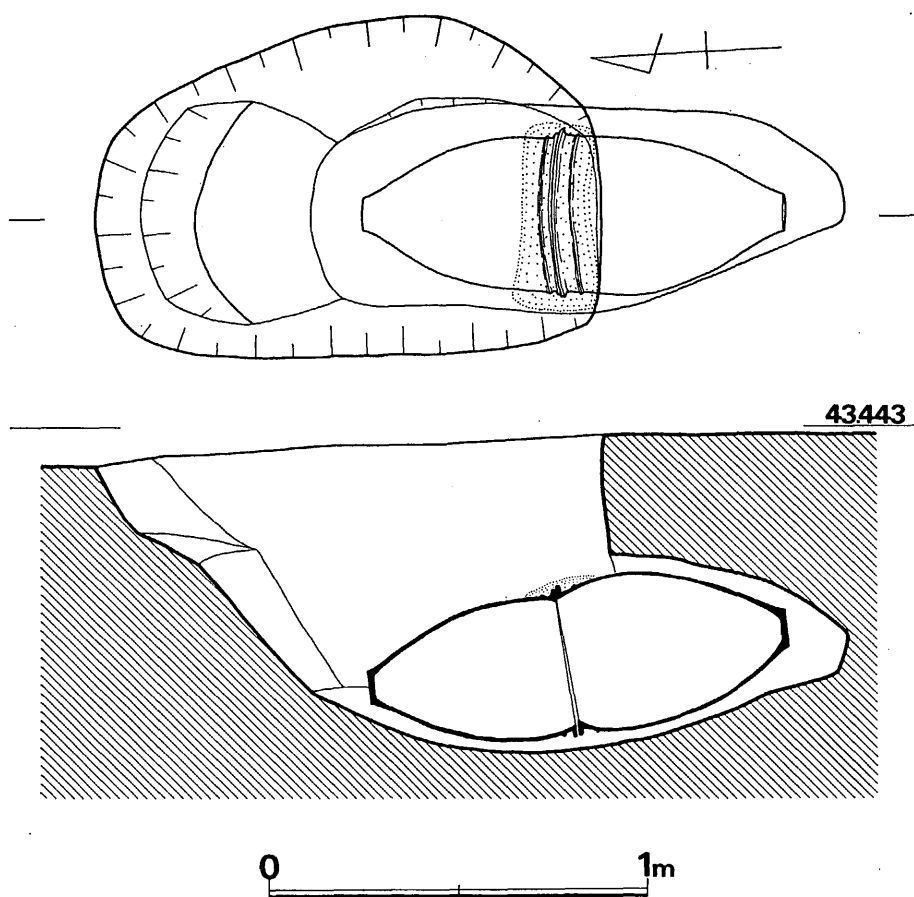
第 30 图 41 号 甌 棺 墓 実 測 図 (1/20)



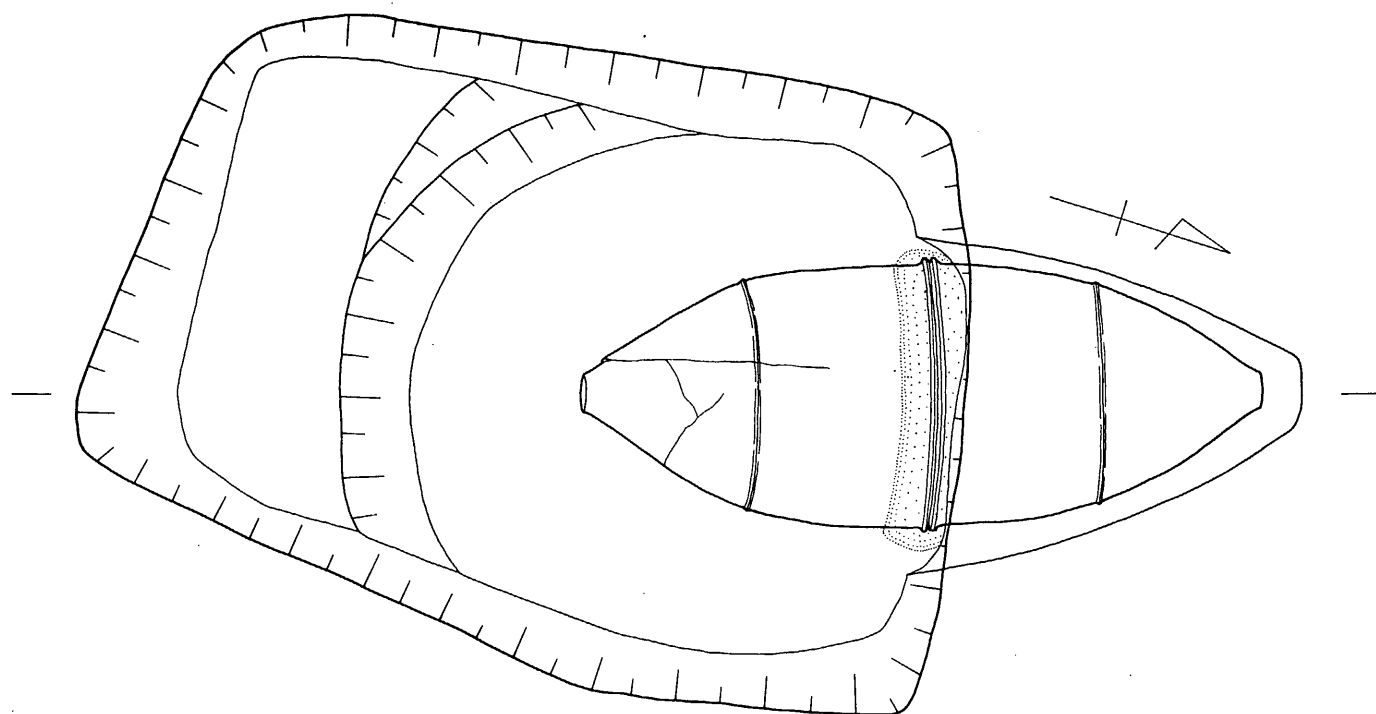
43.527



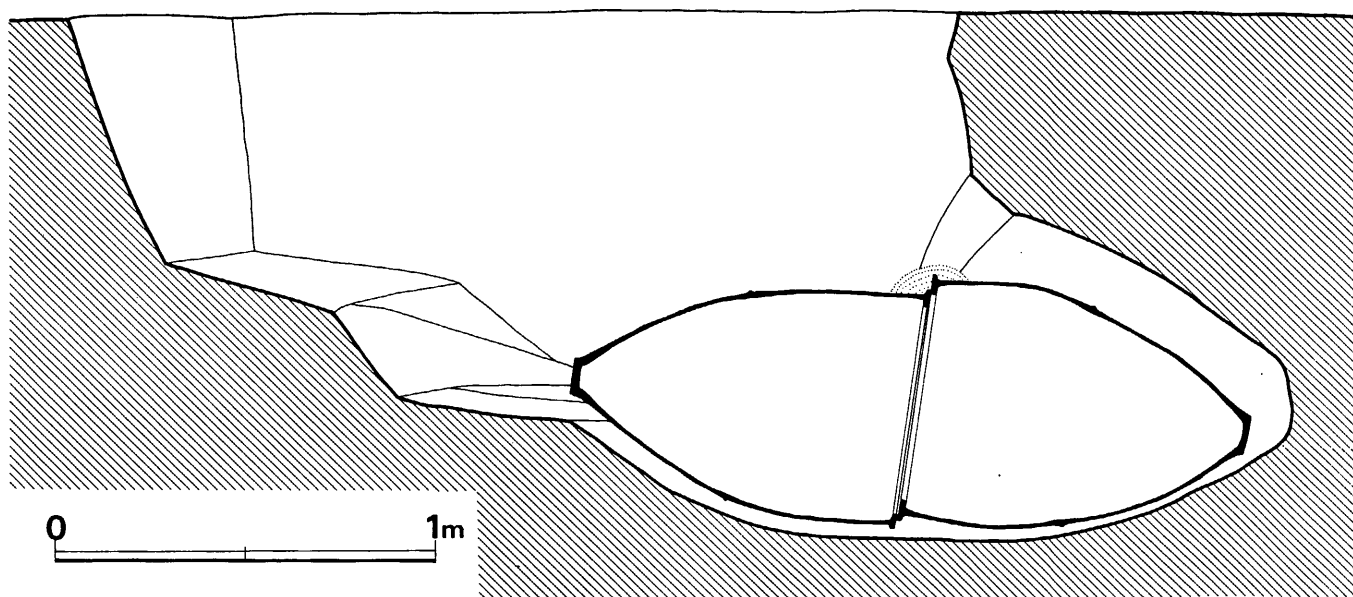
第 31 图 44 号甕棺墓実測図 (1/20)



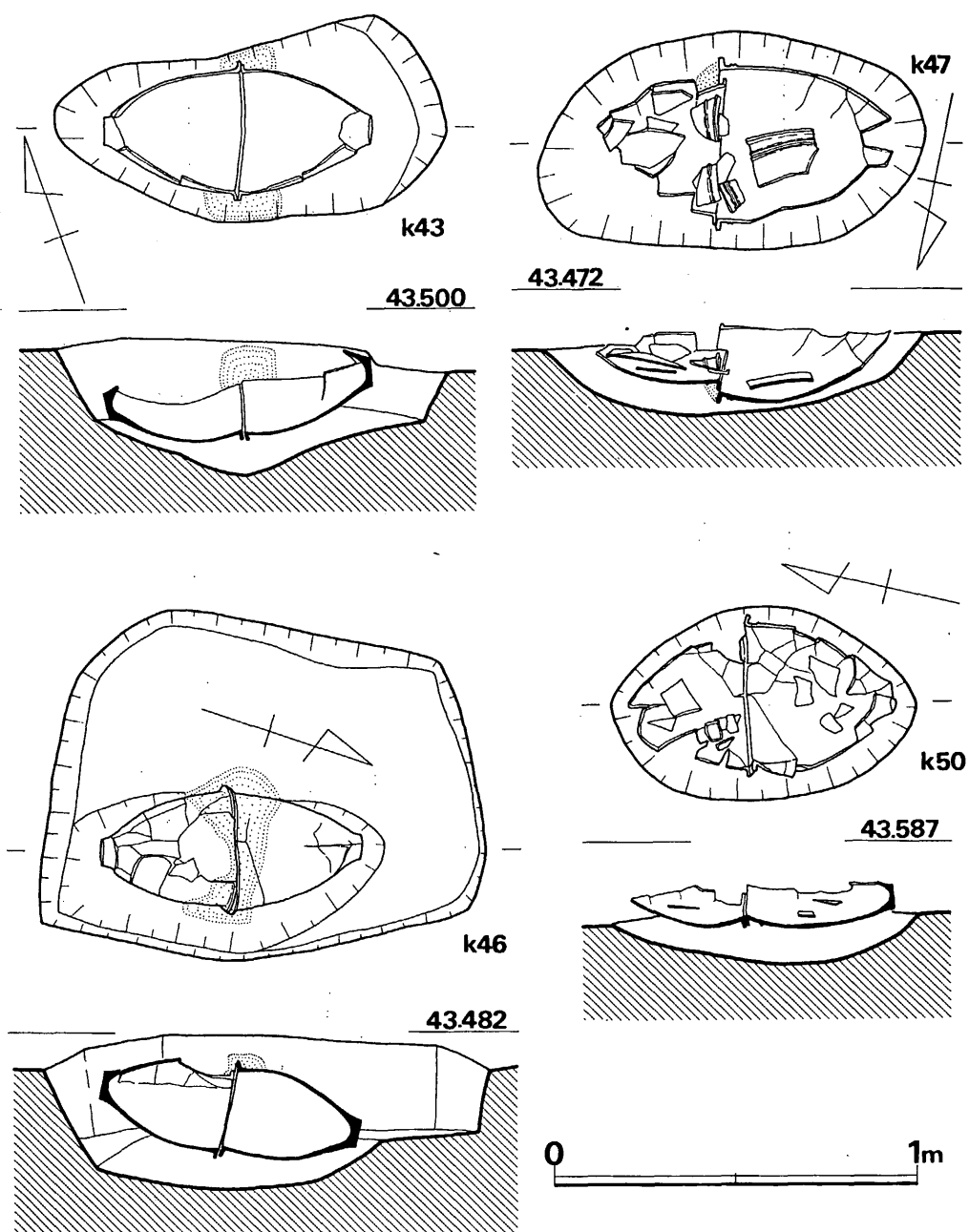
第 32 图 45 号 甕 棺 墓 実 測 図 (1/20)



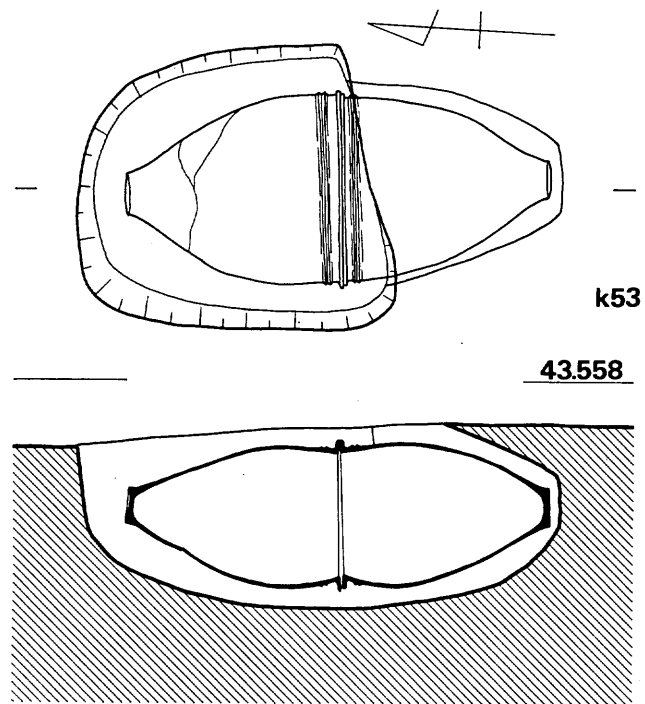
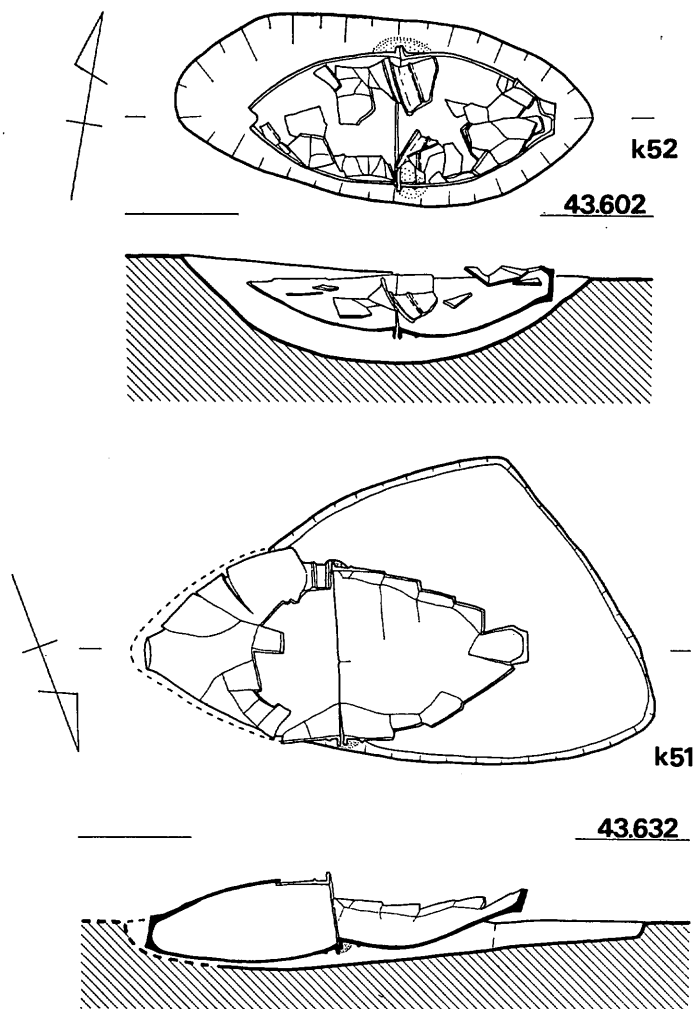
43.526



第 33 图 48 号 魏 棺 墓 实 测 图 (1/50)

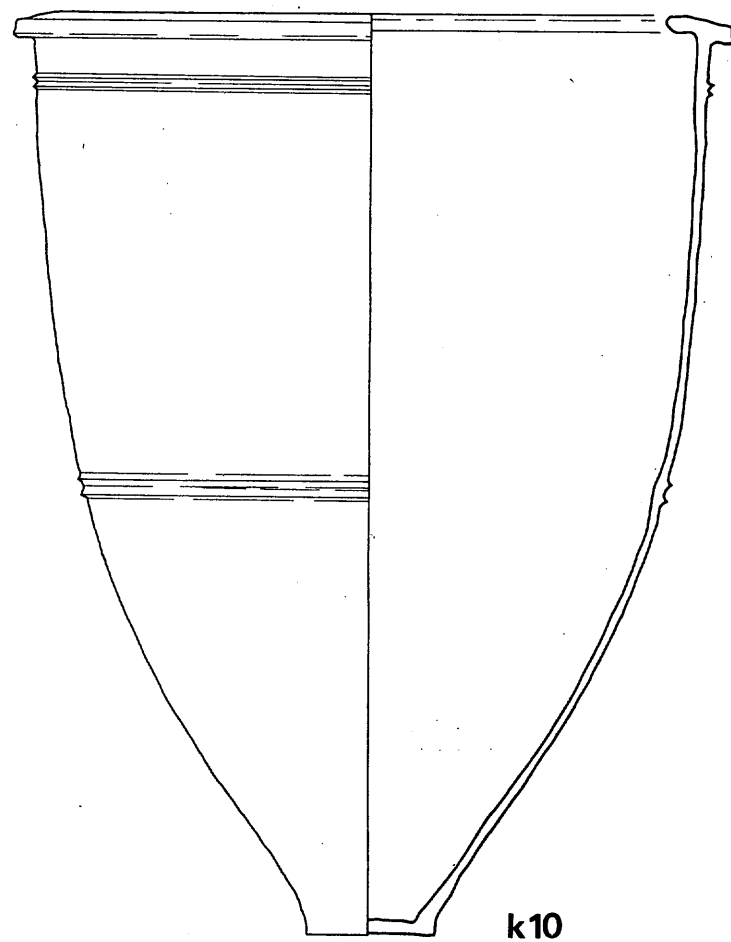
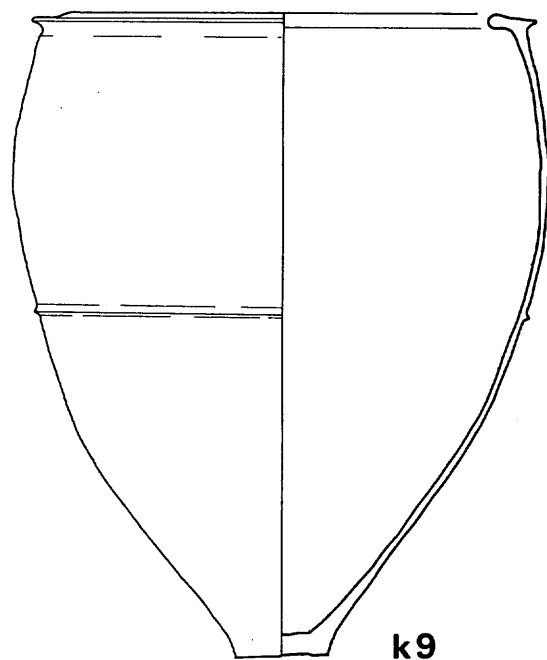


第 34 图 43号·46号·47号·50号 甕棺墓実測図 (1/50)

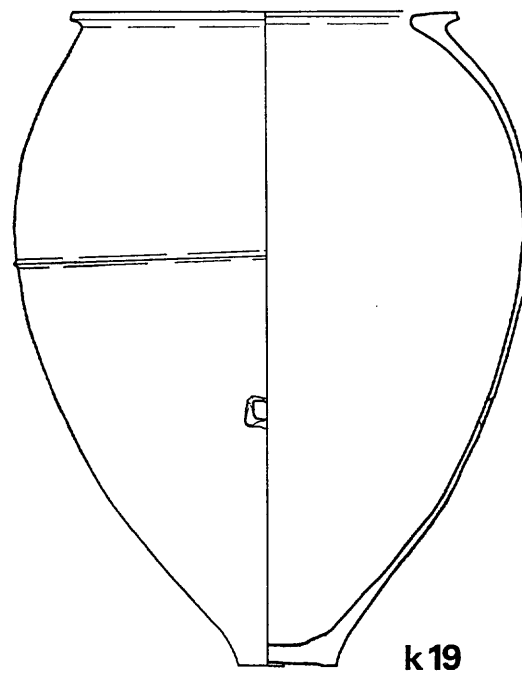
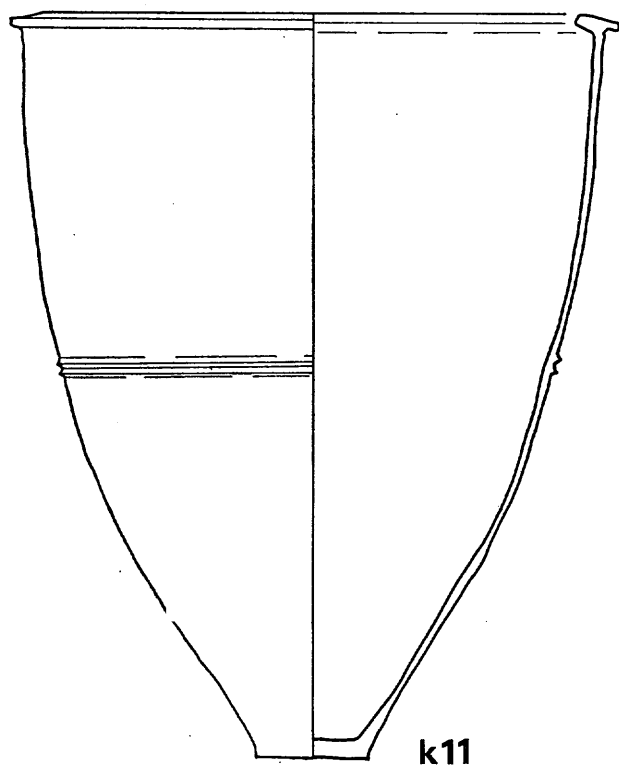


0 1m

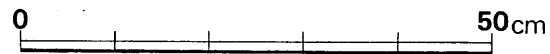
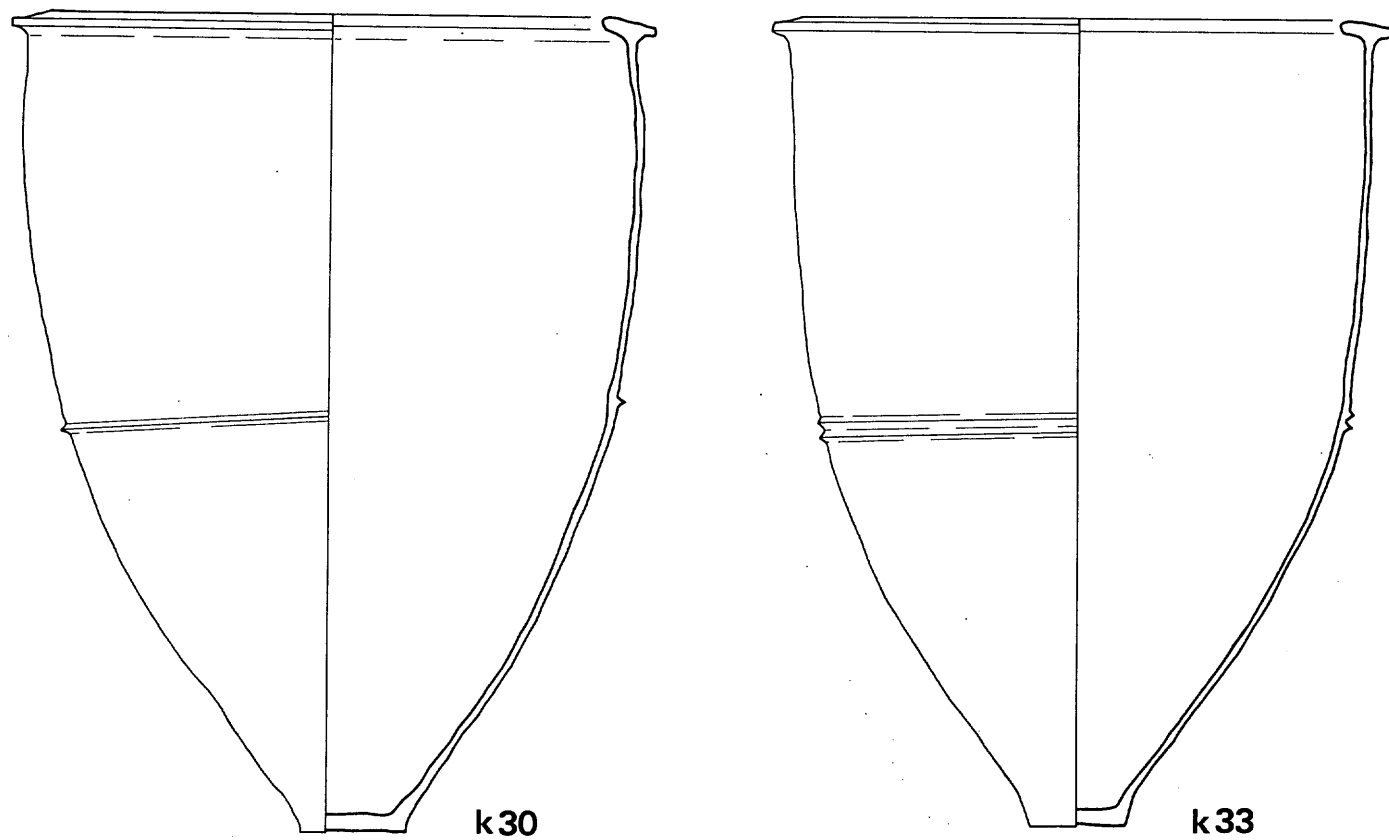
第 35 图 51号·52号·53号 甌棺墓实测图 (1/20)



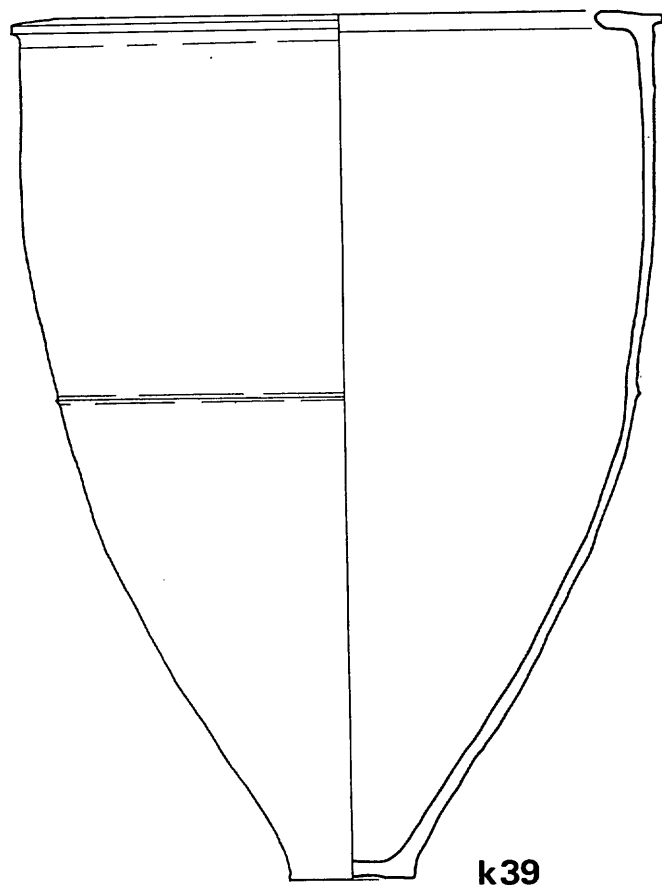
第 36 图 9号・10号 甕棺 実測図 (1/8)



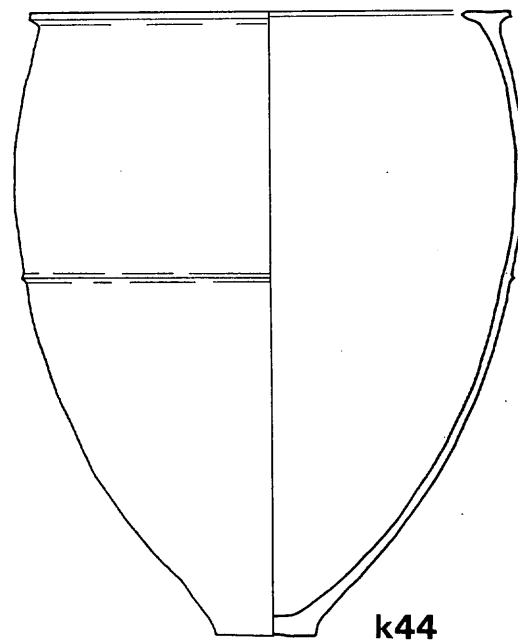
第 37 図 11号・19号 甕 棺 実測図 (1/6)



第 38 図 30号・33号 甕棺 実測図 (1/6)



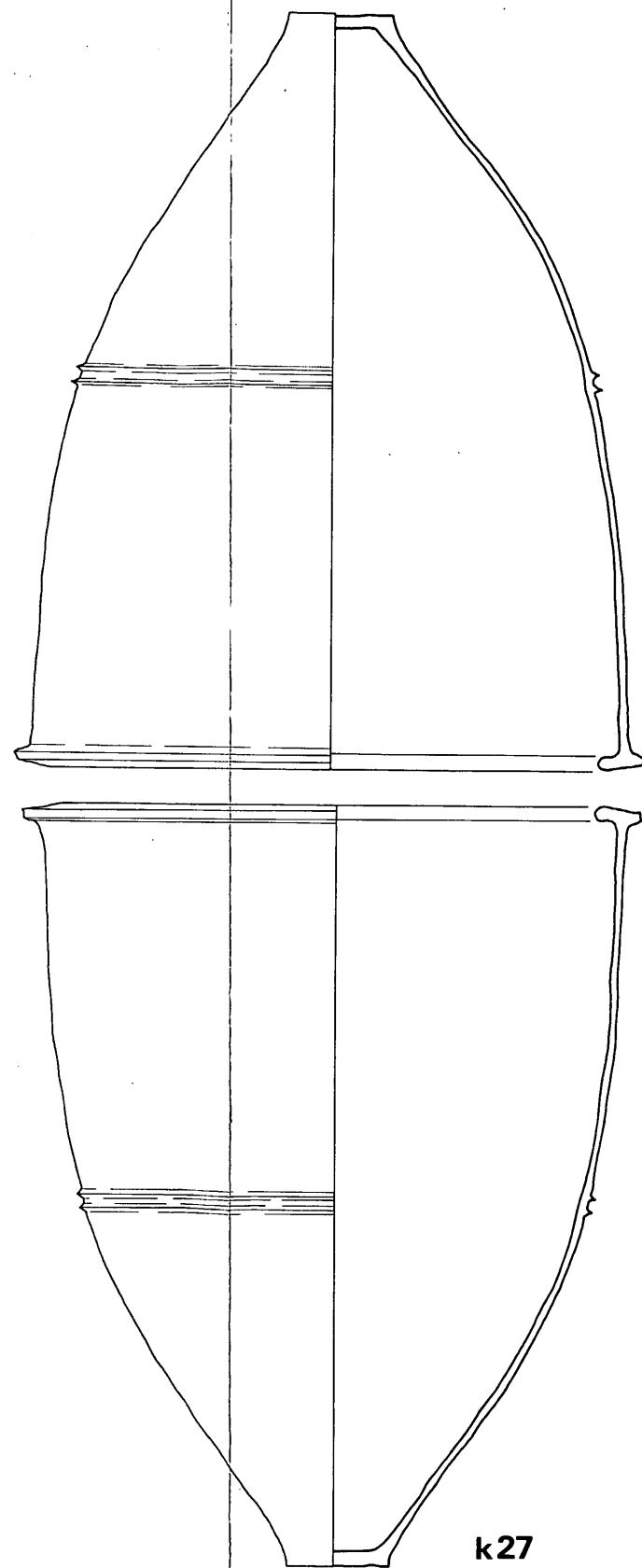
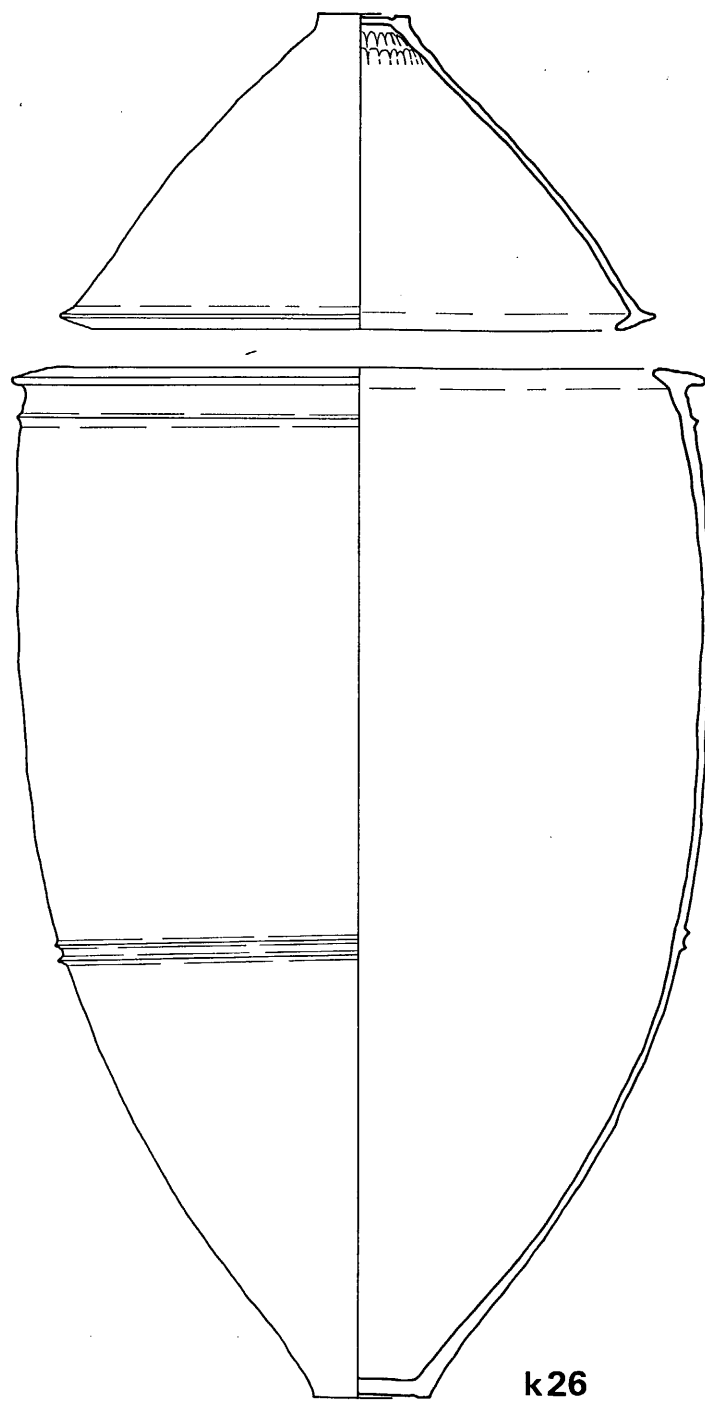
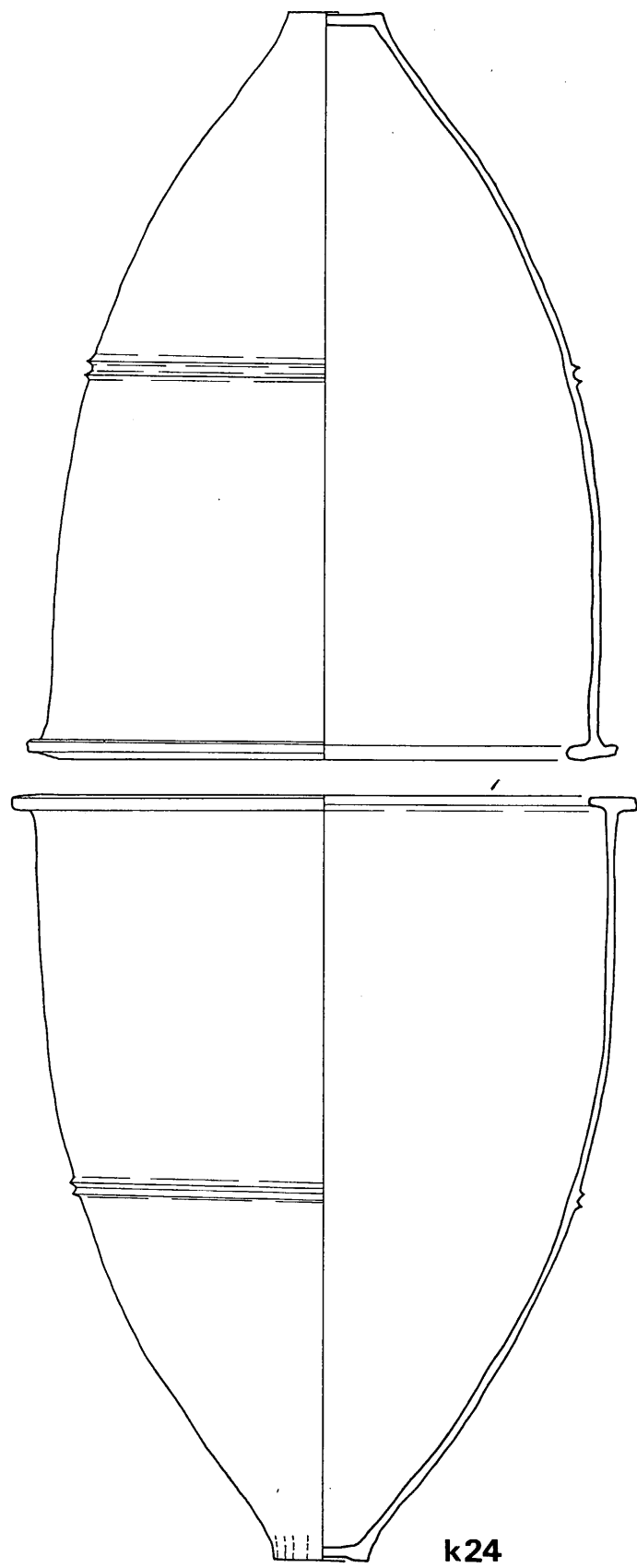
k39



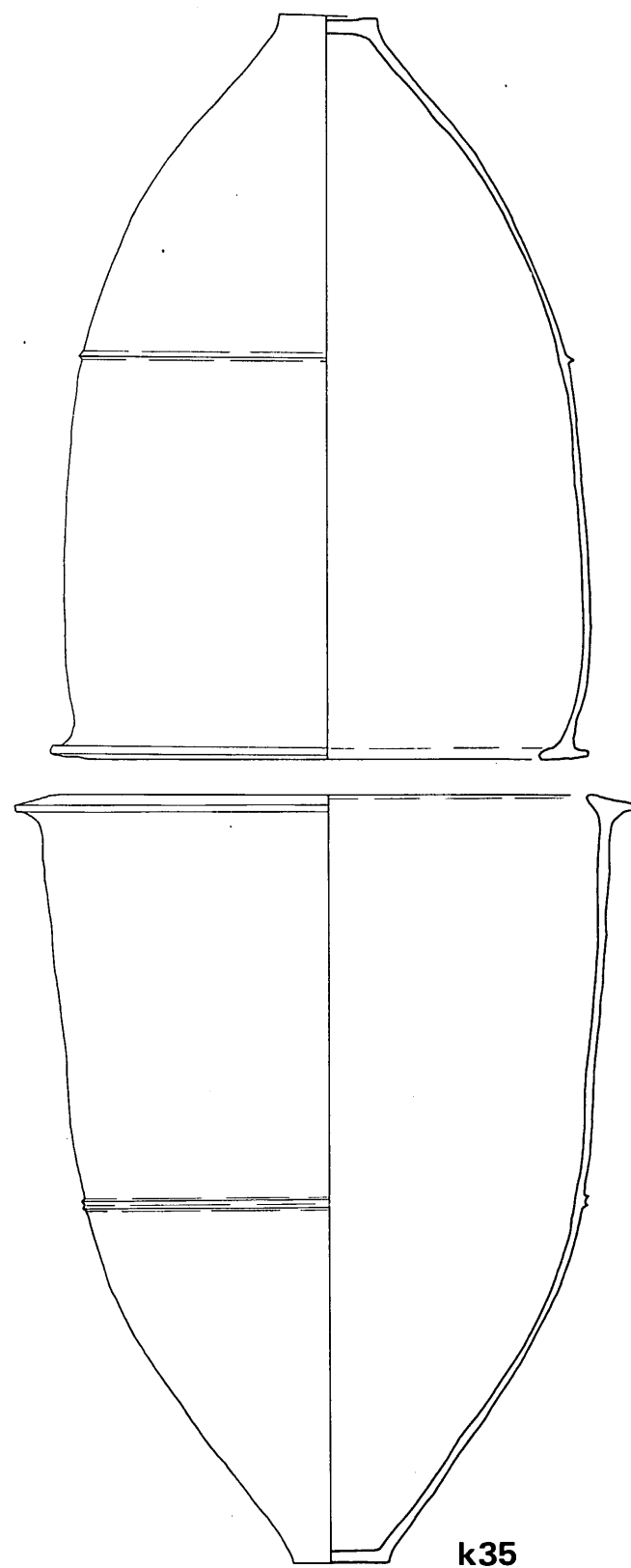
k44



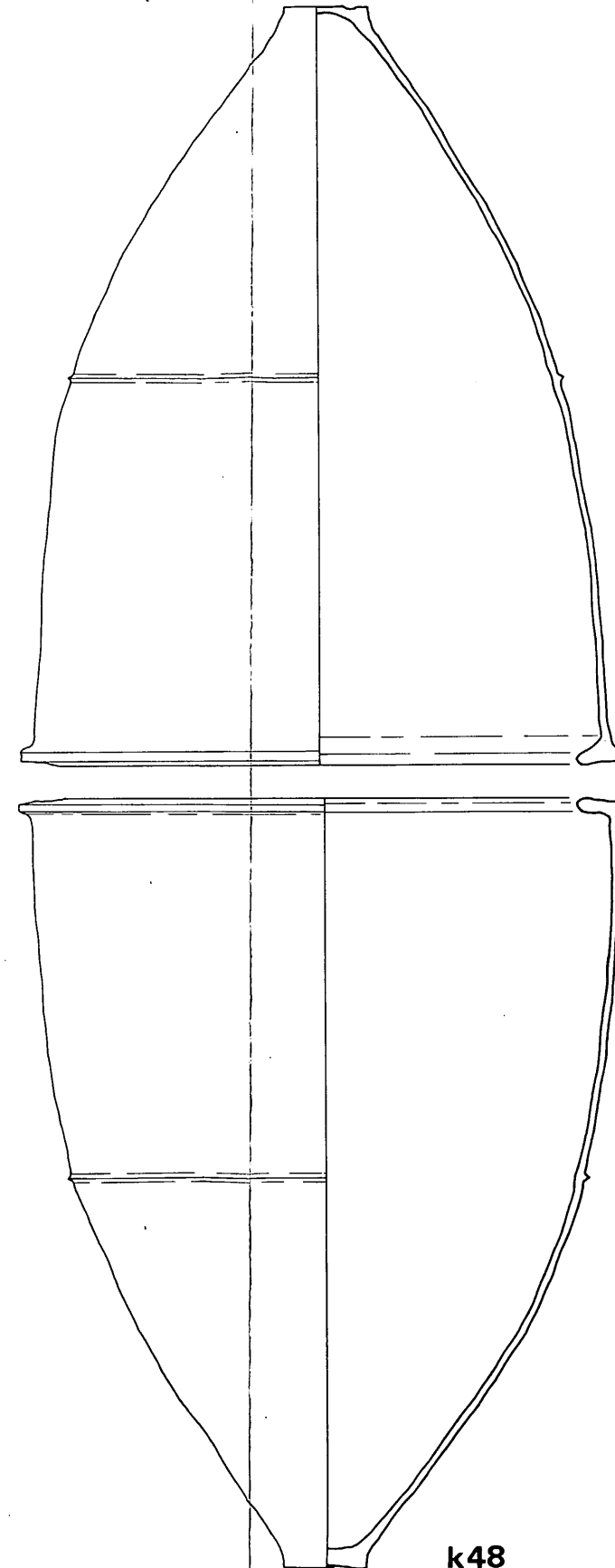
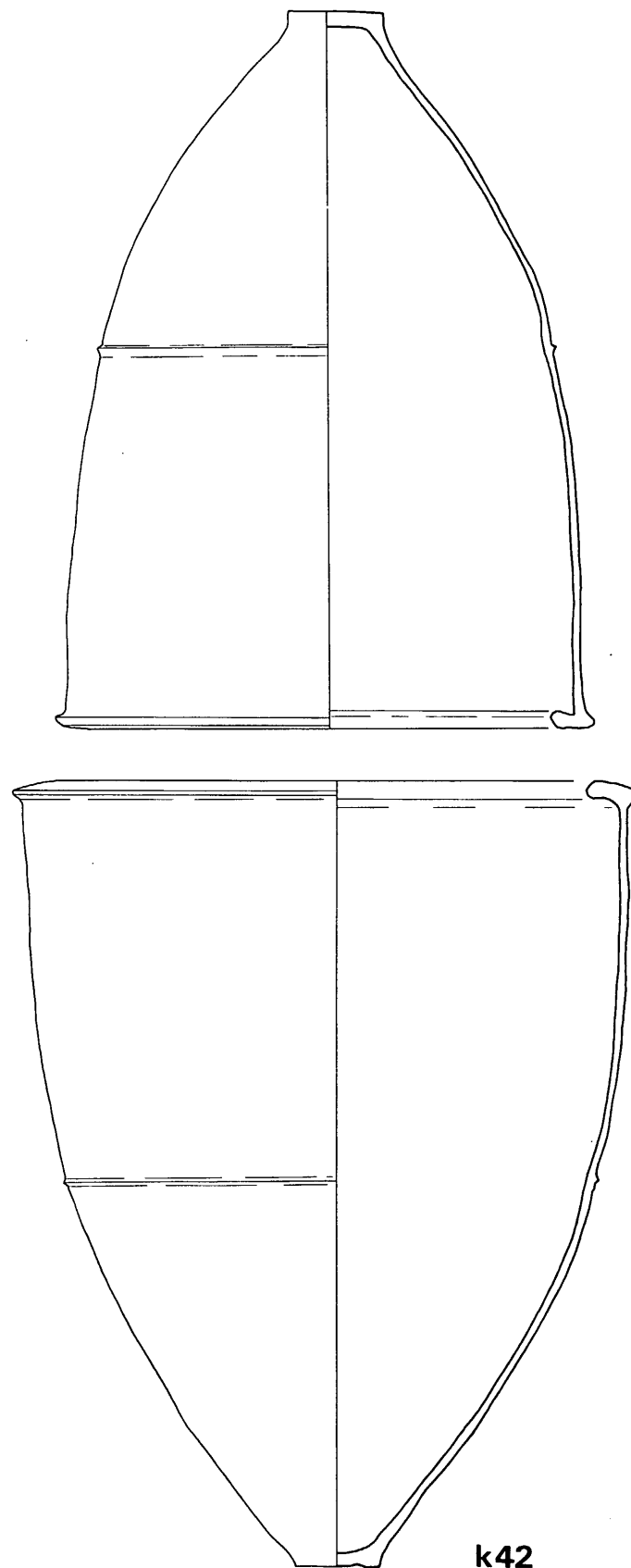
第 39 図 39号・44号 甕棺 実測図 (1/6)



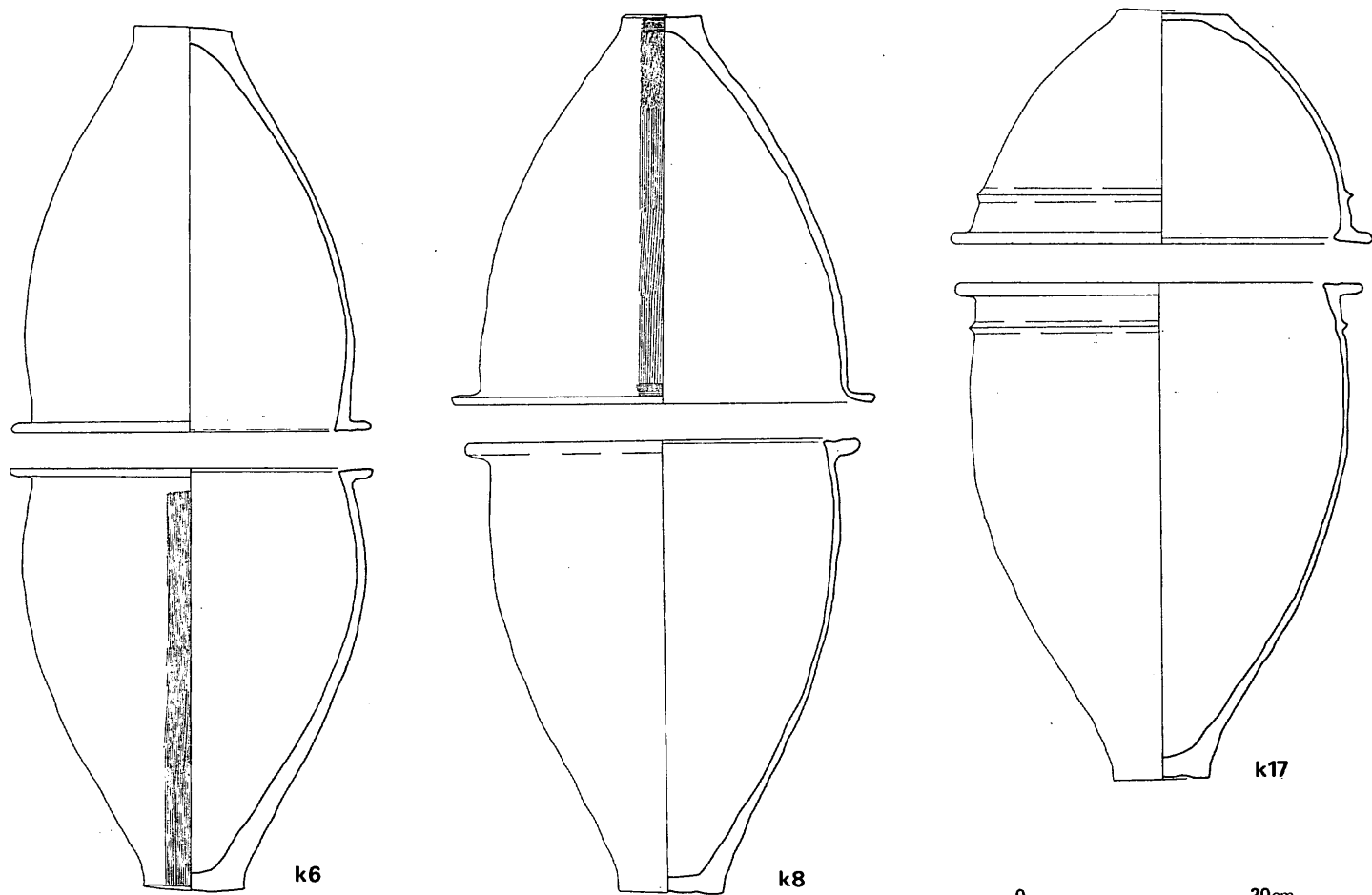
第 40 图 24号・26号・27号 甕棺 実測図 (1/6)



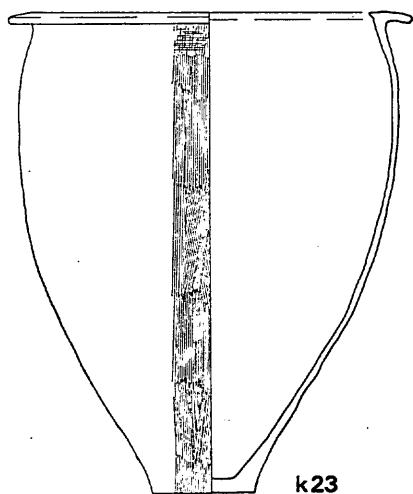
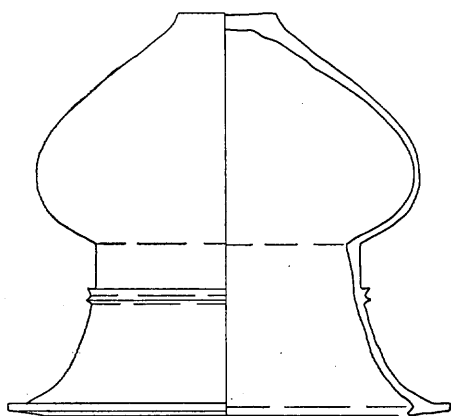
0 50cm



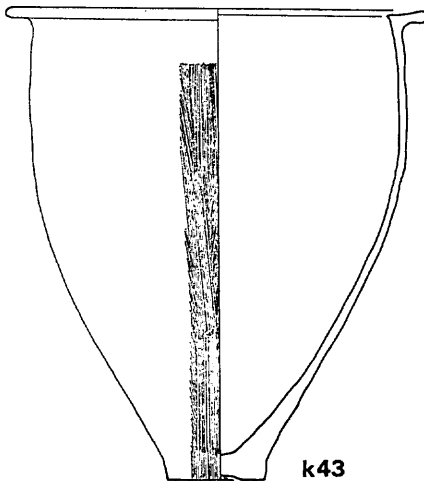
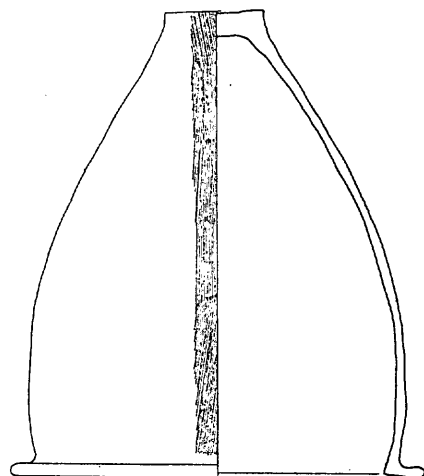
第 41 图 35号・42号・48号 甌棺 实测图 (1/6)



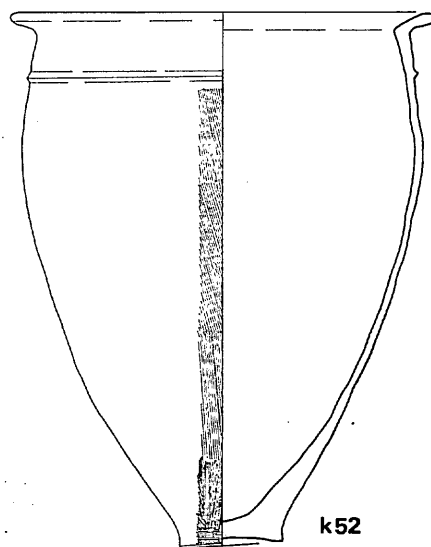
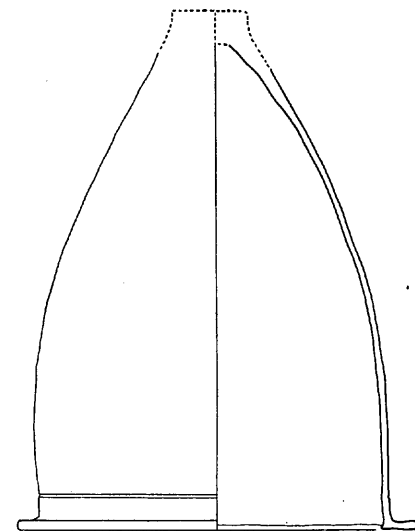
第 42 図 6号・8号・17号 甕棺 実測図 (1/4)



k23



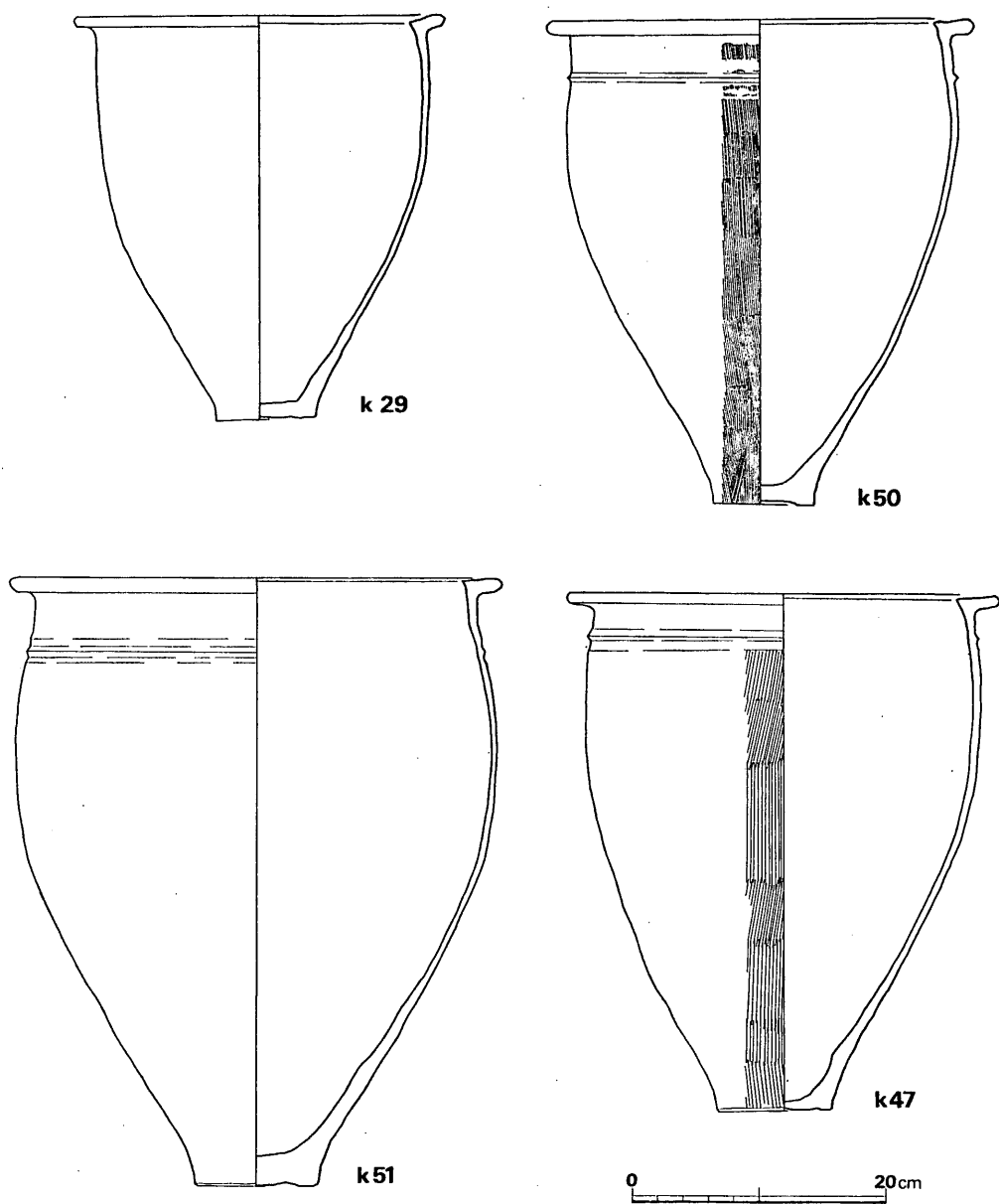
k43



k52

0 20cm

第 43 图 23号・43号・52号 甕棺 実測図 (1/6)



第 44 図 29号・47号・50号・51号 甕棺 実測図 (1/6)

2. 土 壙 墓

土壙墓は、調査区の北側地区において発見された。即ち墓域の北側に集中している。

特に成人用甕棺墓である44号棺と48号棺間に集中し、1基が墓域外に所在する。総計4基が発見、発掘されたが、いずれも成人棺と主軸の方向を同じくする。これらの土壙墓は、甕棺墓との切り合いはなく、また内部からの副葬遺物等の時期を判定する資料がないために、所属時期は不明であるが、出土状況からみて弥生時代のものとする。

1号土壙墓（第45図D1） ほぼ長方形を呈する平面形である。逆台形の断面形であり、長軸156cm、幅60cm、深さ13cm前後である。深さは削平により浅くなっている。成人用の土壙墓と考えられる。

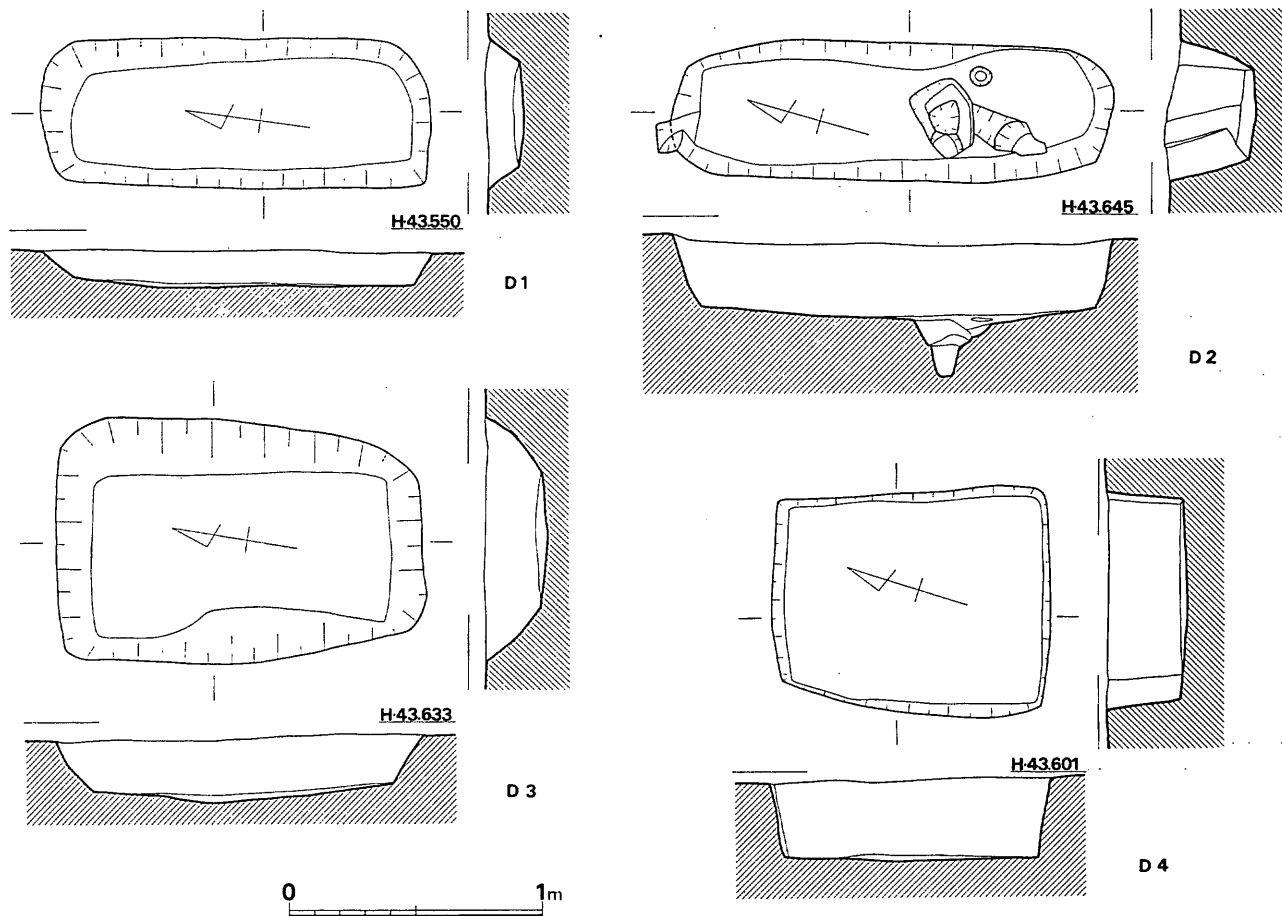
2号土壙墓（第45図D2） 1号土壙墓の西側に所在するものである。平面形は小口が丸味のある長方形を呈し、長幅175cm、幅54cm、深さ36cm前後である。これも削平を受けており、深さはもっと深いものと考えられる。壙底の中央やや南よりには径10数cm、深さ23cmの穴が掘られており、他に2つの小穴がある。壙底はこの穴の所在する部が最も深くなっている。やはり逆台形の断面形である。成人用の土壙墓である。

3号土壙墓（第45図D3） 1、2号土壙墓に比べ、幅広の長方形を呈する土壙墓である。やはり、削平により壙は浅くなっている。長軸144cm、最大幅94cm、最小幅74cm、深さ24cmを測る。壙底は中央部が最も深くなっている。成人用の土壙墓と考える。

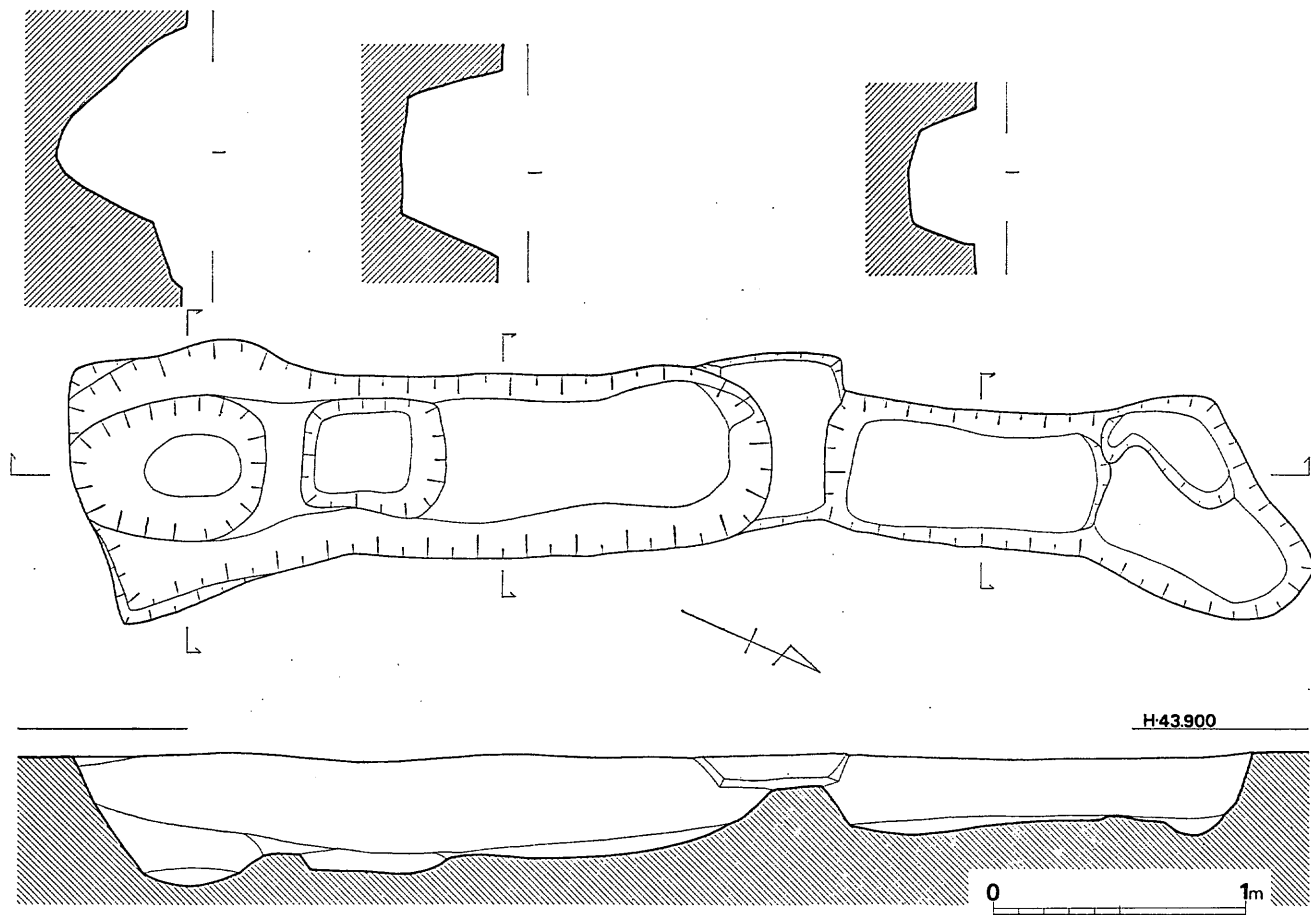
4号土壙墓（第45図D4） 墓域外に隣接して所在する土壙墓である。幅広の長方形を呈する。やはり削平を受けており壙底は浅くなっている。長軸110cm、最大幅91cm、最小幅70cm、深さ31cmである。壙底はほぼ平坦である。壙内には、人骨の大腿骨の一部と頭骸が粉状に、また歯が数本遺存していた。別項の表に掲載しているが、成年骨である。このことから成人用の土壙墓であることは違いない。

3. 溝 と 竪 穴

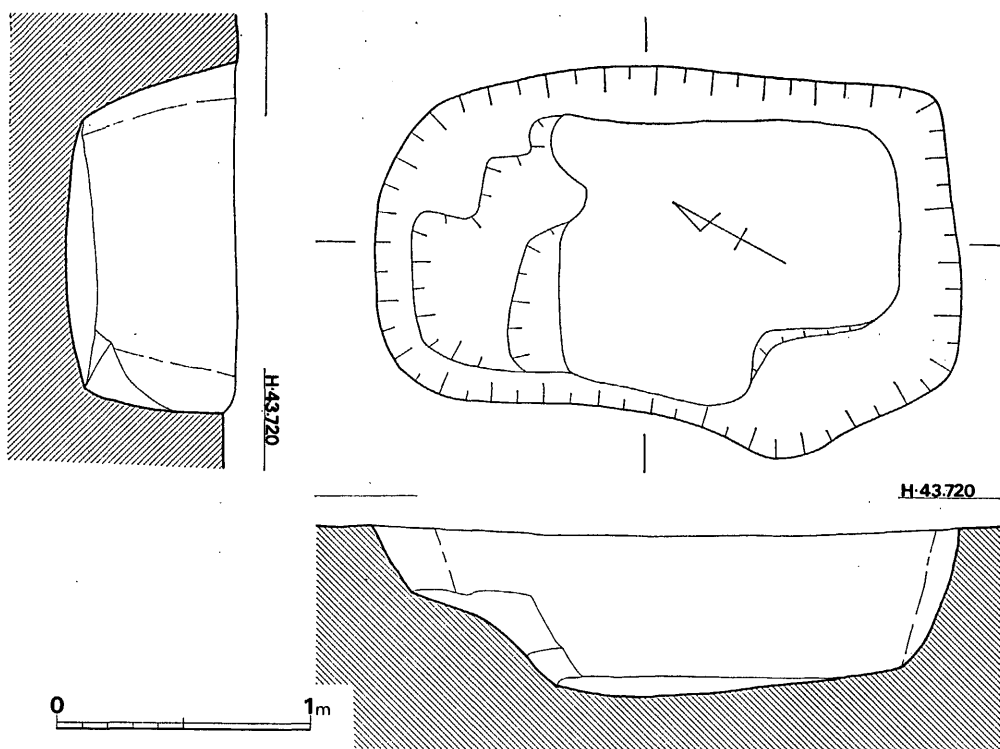
墓域を示す遺構として溝と竪穴がある。これらは甕棺墓群の東西両側にあり、成人用甕棺墓の配列に併行して造られている（付図）。溝は東側にあり、5号、6号竪穴と7号、8号竪穴を連結するように掘られている。これらと離れて北に9号竪穴が、南に4号竪穴（第47図、図版9—2）が位置する。西側には竪穴を連続して掘り溝状を呈している。1号、2号、3号竪穴である。西側の調査区北では浅い竪穴が密集している。西側の墓域は調査区外に含まれている部分が多く完全に把握できなかった。



第 45 图 1号~4号土坑墓实测图 (1/80)



第 46 图 1号・2号・3号 竖穴 实测图 (1/50)



第 47 図 4 号 竪 穴 実 測 図 (1/80)

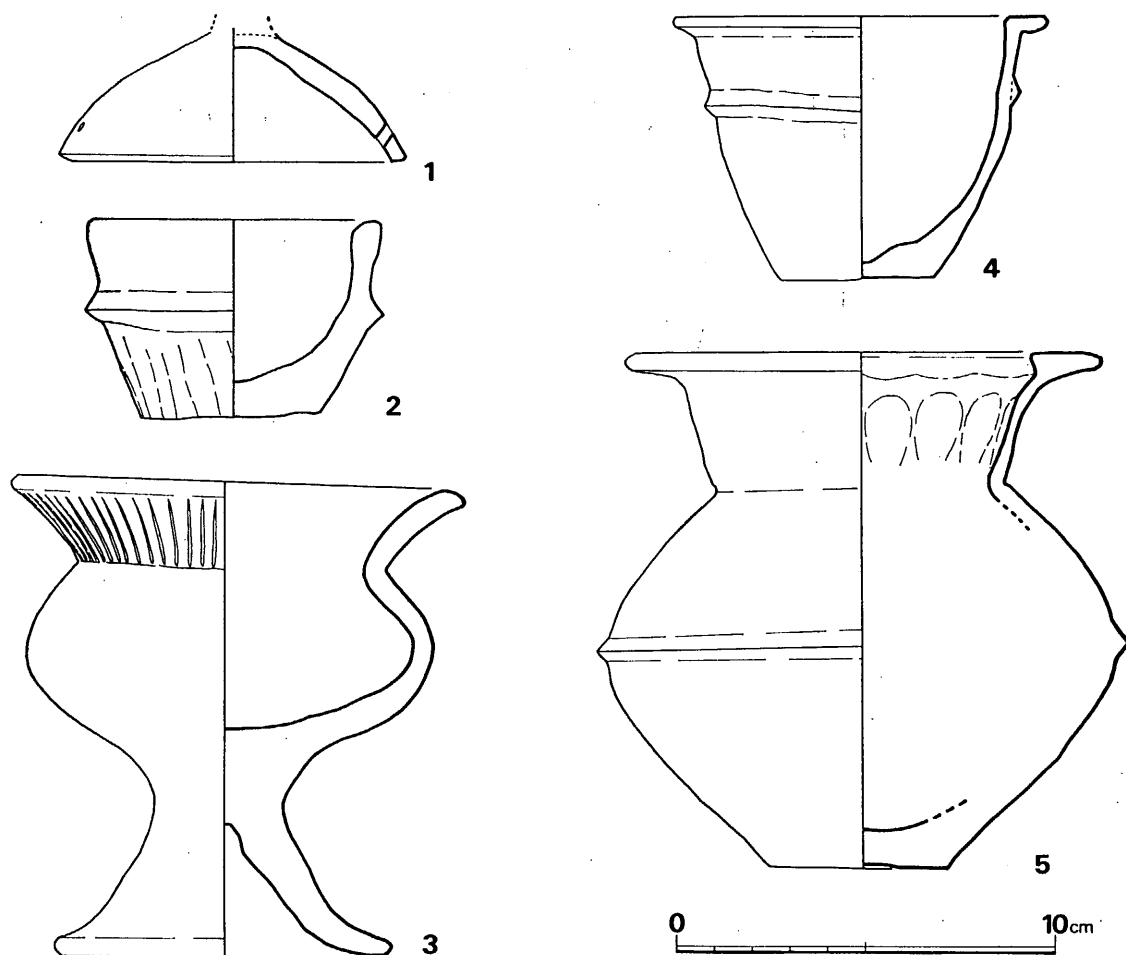
これらの溝や竪穴には、手捏ね土器と壺形土器が供献されていた。これらは、横転あるいは逆転して出土しており、しかも底部や胴部の大半を欠損しているものが多く、中には、胴部と口縁部が、離れて出土した壺形土器もある。完形の状態で発見されたものは、3号、4号、7号竪穴で各1個があったのみである。

溝と竪穴は埋土の堆積状況から、自然堆積であり、土砂の流れ込みによる土器の横転が考えられるが、逆転あるいは分離して所在する状態と器の一部を欠失している状態からして、土器が自然損壊したものとは考えられず、特に4号竪穴には、土器の小片が埋土中に多く発見され、これらの中には、丹塗磨ケンの壺形土器、高坏、大型器台の破片があり、溝や竪穴内に発見されたこれらの土器が埋葬に際しての供献土器であることが考えられる。

なお、壺形土器の大半が器の一部を欠失していることは、供献に際してあらかじめ、器の一部の欠損や分離を意図的に行い、これらを溝や竪穴に投入れたと考えられる。

これらの供献に用いられた土器は、器面をへらにより研磨しており、器面は光沢のあったものであり、日常用器に比して、精製されたものである。

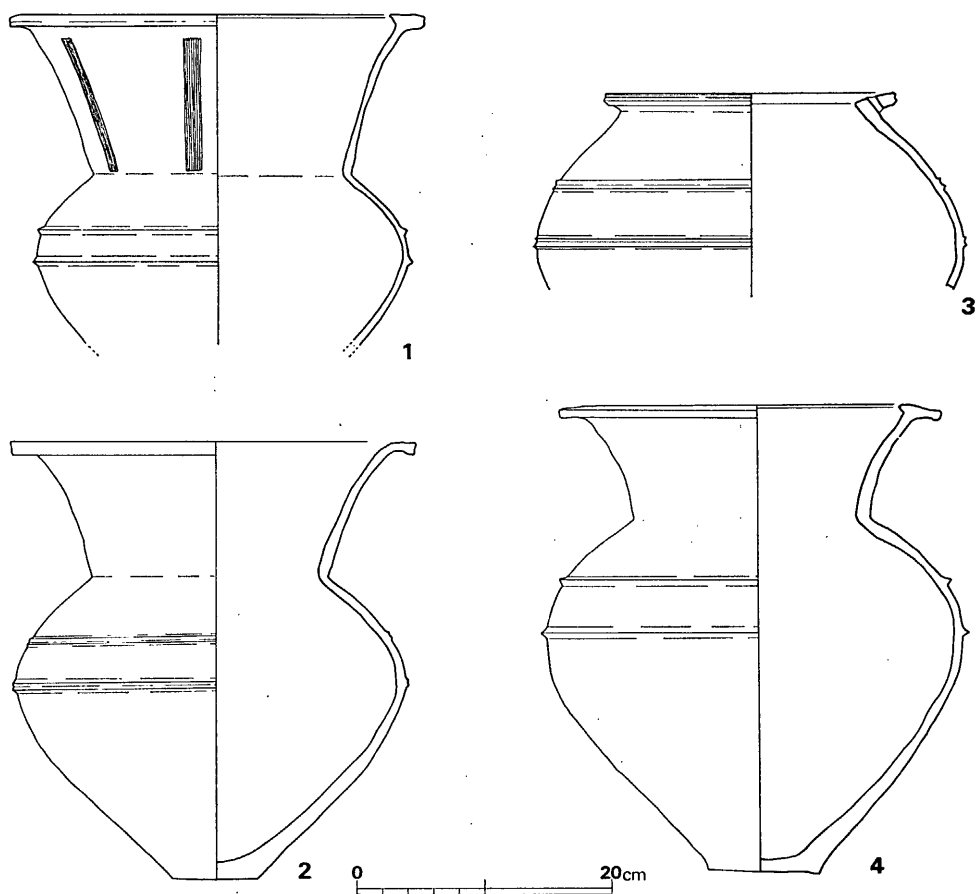
遺物は、溝内からは、壺形土器4と小形の甕形土器1が出土した。壺形土器のうち、第49図



第 48 図 溝・堅穴出土土器実測図 (1) (1/2)

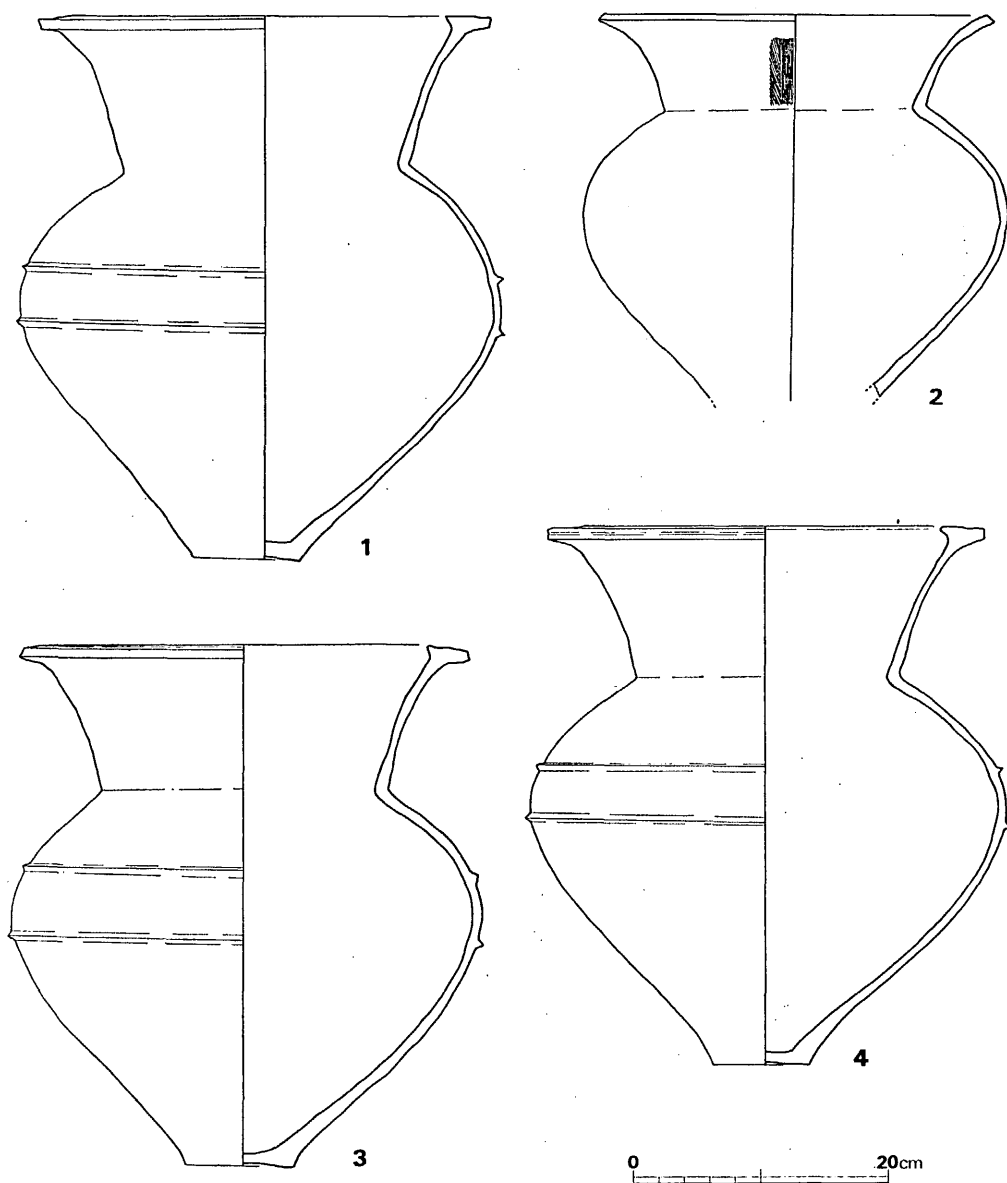
1は下胴部を欠損している。胴部の最大径が、上部にあり、ここに2条の断面三角形の貼付け凸帯をもつ。頸部はほぼ直線的に外傾し、その先端に平坦な口縁部をもつ。口唇部にはヘラによる浅い凹みをつけている。また、頸部にはヘラ使用による暗文を付している。器の外面は一部を除いてヘラによる研磨整形である。

第49図2は完形品である。1と同様な形状を呈するが、口縁部は頸部先端を大きく外反させたものである。胴部凸帯は、断面が山形の貼付けたものであり、貼付けにあたっては、ヘラによって強く押えている。器面の整形は、頸部内面と器の外面がヘラによる研磨である。小形の甕形土器(第48図4)は、器の大きさに比べて、わりあい太い三角凸帯を付している。器面の整形は、指によるもので、内面に指圧痕が強く残っている。



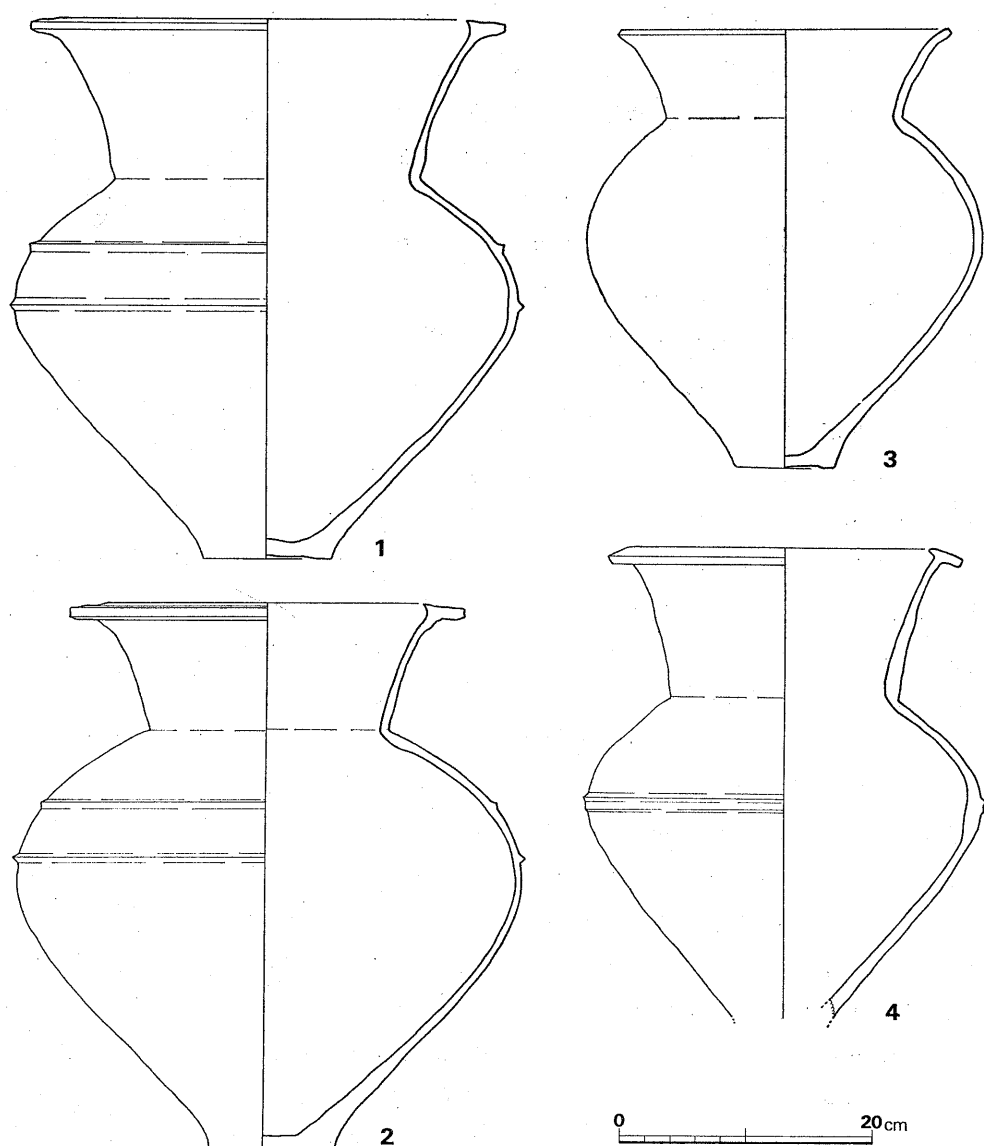
第 49 図 溝・堅穴出土土器実測図 (2) (1/4)

土墳内の土器は、第50図1は2号堅穴より出土したものである。発見当時は頸部と胴部が分散していたものである。大形の壺形土器である。凸帯は断面三角形の貼付け凸帯である。胎土中に砂粒子をやや多く含み、焼成は若干あまく、器面の剝落が著しい。器面の整形は、頸部上端と口縁部がハケ使用の撫であり、他面はヘラによる研磨である。3号堅穴からは、第50図の2、3、4が出土している。3の口縁の上面は凹凸がある。胴部にはやはり断面三角形の貼付け凸帯が2条ある。胴上は砂粒子を多く含むが、焼成は良く硬く仕上がっている。器面の整形は頸部内面が撫であり、頸部下部の接合部はヘラ削りである。器の外面はヘラによる研磨である。口縁部はハケを利用して撫でている。2は底部を欠失するものである。大きく外反する頸部に刷毛目が一周している。胴部と頸部の接合部はヘラによって強く押えられている。器面の整形は、頸部内面と胴部外面が横位のヘラ研磨であり、胴部のヘラ研磨は、右から左へ五回に分けて整形作業を行っている。胎土中には若干の砂粒子を含み、焼成は良く硬く仕上がっ



第 50 図 堅穴出土土器実測図 (3) (1/6)

ている。4は、6号堅穴出土のものに次いで大きい。やはり胴部に断面三角形の貼付凸帯を2条有する。口唇部には、巾約2.5mmのヘラによる沈線を施している。底部が器の大きさからみて若干小さくなっている。器面の整形は、内面は撫でであり、外面はヘラによる研磨であるが、ヘラ研磨は、下胴部を縦位とし、他は横位の方角である。胎土中には若干の砂粒子を含み、焼成は良い。



第 51 図 竪穴出土土器実測図 (4) (1/6)

4号竪穴からは、他の竪穴に比べて多量の土器片と共に完形の壺形土器1（第49図4）と小形の蓋形土器（第48図1）が出土した。壺形土器は胴部に断面三角形の貼付け凸帯を2条有する。口縁部の外側はややさがり気味である。器面の整形は他と同様に、外面はヘラによる研磨である。胎土中に若干の砂粒子を含み、焼成は良い。蓋形土器は非常に小さいものである。摘みを欠損するがよく遺っている。径約4mmの孔を穿っているが、2個を一对とし、摘みを中心に対象なる個所に配している。器面はヘラによる研磨で、硬く焼き上がっている。

5号堅穴からは、2個体の壺形土器と脚付埴が出土した。壺形土器は、いずれも器の大半を欠損するが、このうち1個を図示した。第51図1は胴の一部を欠損するものであるが、大形のものである。やはり胴部に断面三角形の貼付け凸帯を2条有する。器面の整形はヘラによる研磨である。脚付埴（第48図3）は、下胴部を欠損する壺形土器に接して出土したものである。小形であるが、よく整った形を呈している。外反する頸部の外面は、横位のヘラ研ぎの後に、縦位にヘラ研ぎを施し、これが暗文状に観察される。埴胴部は横位の、脚部は縦位のヘラ研ぎであり、脚端の内面にはハケ使用による刷毛目が浅く遺っている。

第51図2は6号堅穴より出土したものである。発見された壺形土器のうち最大のものである。胴部の大きさに比べて頸部の高さが低くみえる。やはり胴部に断面三角形の貼付け凸帯を2条有する。頸部と胴部の接合部は器の内面に指圧痕が強く遺っており、器面の整形はヘラ研磨である。頸部には縦位のヘラによる暗文状の研磨痕が7個所に遺っている。第51図3、4は7号堅穴から出土したものである。3は胎土中に多量の砂粒子を含み、焼成があまりために器面の剝落が顕しく、器面の整形方法はよく観察できない。やや肩部の下がる器形である。4は底部を欠損するものであるが、胴部に断面山形の低い貼付け凸帯を1条有する。頸部と胴部の接合部外面には、ヘラによる押えが沈線状に遺っている。外傾する口縁部はハケによる撫でであり、他はヘラによる研磨整形である。焼成はよく、硬く焼上がっている。

北側区の西にある土壙群中より若干量の土器が出土している。第48図2は小形の甕形土器である。器壁は厚く、直立する口縁部になっている。三角形の貼付け凸帯を有し、これより下端はヘラ削りによる整形である。胎土は若干粗いが硬く焼上がっている。壺形土器（第48図4）は小形のものである。胴中央部に1条の断面三角形の貼付け凸帯を有する。器面の整形は撫でによるが、口縁部と頸部内面に指の圧痕が強く遺っている。甕形土器（第49図3）は小人用甕棺使用のものを除くと発見されたのはこれのみである。この甕形土器は下胴部を欠損するが、内傾する胴上端に内傾する平坦な口縁部をつくっている。口唇部はヘラによって強く押えられており、沈線状に一周する。また、口縁部には径約5mmの孔を穿ち、2個で一對とし、対象となるように2個所に配している。胴上部には断面山形の貼付け凸帯を2条有する。器面の整形は口縁部を撫で、他面はヘラによる研磨である。胎土は良く精製したものであり、硬く焼上げている。

第 4 出土人骨について

甕棺内埋葬人骨27体と土壙墓人骨1体および不明2体の合計30体からなる。

葬法 甕棺人骨はすべて頭を下甕に挿入した仰臥屈葬で、9号棺および35号棺人骨は特に極度な屈位をとり、股関節および膝関節において強く曲げられていた。また、丹の附着せるもの6例が認められた。

性別 附表1の如く、性別推定の極めて困難な未成年骨5例を除くと、遺体の性比は女性が男性よりやや多い傾向がある。

死亡年令 骨質に有機分の多い乳児骨は殆んど痕跡も残さず腐朽し去るため、附表には現われていない。幼児期に死亡の多いのは、福岡市金隈遺跡出土人骨と同様の傾向であり、また大多数が成年期、熟年期に落命し、老年期まで生延びる例は少ない。

頭形 頭骨の長幅示数の平均値は下記の如くである。

	例数	平均値	最大値	最小値
♂	7	77.4	81.3	75.0
♀	7	79.4	83.7	73.9

(単位 cm)

男女ともに中頭形に属し、女性は男性よりやや丸く短頭形に近い。

身長 推定は殆んど大腿骨長から、若干は脛骨から Pearson 氏の公式を用いて算出した。

	例数	平均値	最大値	最小値
♂	6	163.0	167.3	159.8
♀	13	151.1	160.0	145.3

(単位 cm)

男性は同じく弥生時代人である佐賀県・三津人および山口県・土井ヶ浜人に比肩し得る高身長を有しており、当時の南九州や西北九州沿海住民よりは格差を持って高い。

風習的抜歯 諸般の所見から、この意図的抜歯が無かったと言いきれる例は15例あり、他は保存不良なために不明であった。二、三の上顎切歯に齒槽閉鎖が認められたが、むしろ他の原因に由来するとしたほうが妥当と考えられるので、全体的にはこの集団においてはこの陋習は^{ロウシユウ}

表1 永岡人骨死亡年令

満年令	1	6	12	20	40	60	
	乳 児	幼 児	小 児	若 年	成 年	熟 年	老 年
男 性					○○○	○○○○○	
女 性					○○○○○ ○○○	○○○○○	○
不 明		○○○○		○	○		
計	0	4	0	1	12	10	1
							28

終息していたと見て大過無かろう。

特記所見 男性人骨中で最大の推定身長 167.3cm を有する 10 号棺人骨には丹の附着の他に前額部から深く右眼窩上壁に達する致命的な傷痕があり、しかも治癒機転の営まれた形跡もあるので落命までにある期間生存していたらしい。この人骨には更に右手首に典型的な右橈骨人端（手首）骨折の所見があり、他にも外傷の痕跡が見られるので今後さらに精査したい。

表 2 永岡出土人骨一覧表

墓棺番号	性	年 令	保存状態 ※	頭形示数	身長(cm)	風習的 技 歯	備 考
K 4	不明	幼児	△			無	
K 9	♂	熟年	○	76.8	160.6	無	丹
K10	♂	熟年	○		167.3	無	丹, 前額部に傷痕, 21 2 歯槽閉鎖
K11	♂	成年	△	75.7		不明	
K12	♂	熟年	○	81.3	164.0	無	
K13	♀	成年	△		147.8	無	
K14	♀	成年	△		145.3	無	
K15	♀	老年	△	80.5	152.5	不明	
K18	不明	幼児	×			無	
K24	♂	成年	○	78.0	162.5	無	丹
K25	不明	若年	△			不明	
K26	♀	成年	△		154.8	不明	
K27	♀	成年	○		150.3	不明	丹
K28	♀	成年	△		149.2	不明	
K30	♀	熟年	○	77.5	148.0	不明	頭部に席附着
K32	♂	熟年	△	76.7		不明	
K33	♀	成年	○	83.7	160.0	無	丹, 席附着
K35	♂	成年	○	75.0	159.8	無	
K36	♀	熟年	◎	78.7	154.0	無	下顎関節異常
K38	♀	成年	○	81.2	151.7	無	
K39	♀	成年	◎	73.9	153.5	無	下顎関節異常
K41	♀	熟年	△		148.8	不明	丹, 席附着
K42	♀	熟年	△	80.8		不明	
K44	♀	熟年	△		148.6	不明	
K45	不明	幼児	×			無	
K48	♂	熟年	△	78.2	163.5	無	2 歯槽閉鎖
K53	不明	幼児	×			不明	
K54 K55	不明	不明	×				
D 4	不明	成年	×			不明	

※保存状態 ◎ 最良 ○ 良 △ 不良 × 部分的残存

第 5 葬 法 に つ い て

当遺跡は、甕棺墓と土墳墓の埋葬遺構が発見されたが、甕棺墓が主体となる遺跡である。

甕棺墓は53基が発見されているが、成人用甕棺墓25基、小人用27基、末掘1基である。調査区外にも甕棺墓が遺存していることが充分考えられ、当遺跡の甕棺墓の実数は不詳であり、遺跡全体を把握しきっていないので、当遺跡について十分な考察はできないが、調査において確認した事項を例記したい。

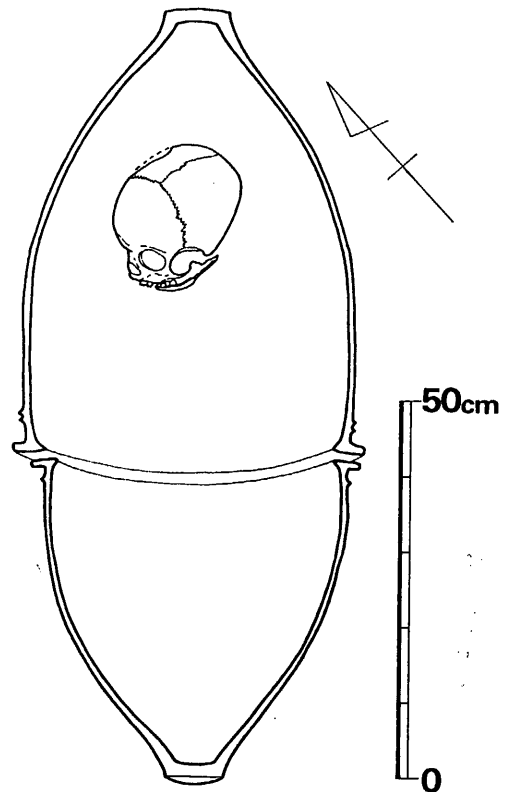
当遺跡でまず気につくことは、成人用甕棺墓がほぼ南北に二列に並び埋葬されていることである（付図）。このような類例は、近年福岡県春日市大字上白水門田遺跡でも発見されている。当遺跡と同時期のものである。しかし当遺跡の場合は、東西両側に堅穴群とこれを連結する溝によって墓域を定めていることが特色であり、このような例は他になく、弥生時代の墓制を知る上で貴重な資料といえる。

成人用甕棺墓は基本的に二列に配置しているが、例外のものも数基あり、特に13号棺のように12号棺の墓域を共有するかのようになり、あるいは12号棺の所在をあらかじめ認知した上で、同棺墓域を損なわず埋葬している。

成人用甕棺墓の場合、埋葬位置あるいは方向について規則性があるように考えられ、下甕を頭位とし、頭はほぼ北に向いている。28号棺のようにまったく逆の南向きに埋葬したものもある。また、別項の人骨に関する一覧表を参考にするとよいがこの配列というか配置には、性別や年齢を意図しておらず、無策意に配している。

成人用棺は上甕を若干高くし、ほぼ水平に近い状態で置くことを通例としているが、上下甕のうちいずれかが他に比してきわだって高くなっているものが数例ある。

小人用甕棺は、成人用甕棺墓のように規則性というものはいみじくない。しかしながら、数基の棺をのぞけば、かならず成人用甕棺墓と重複している。この場合、重複している小



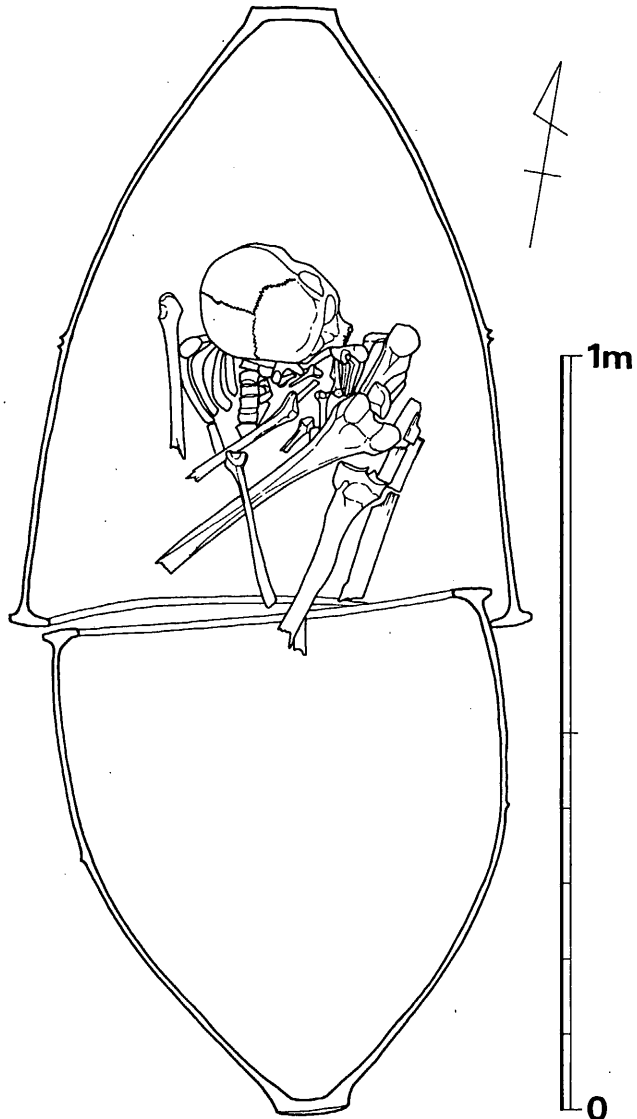
第52図 4号人骨出土状態実測図 (1/10)

人用棺の数は1基から、38号棺のように5基の小人用棺が重複しているように数はまちまちであるが、いずれも、小人用棺が成人用棺よりも新しく埋葬されている。

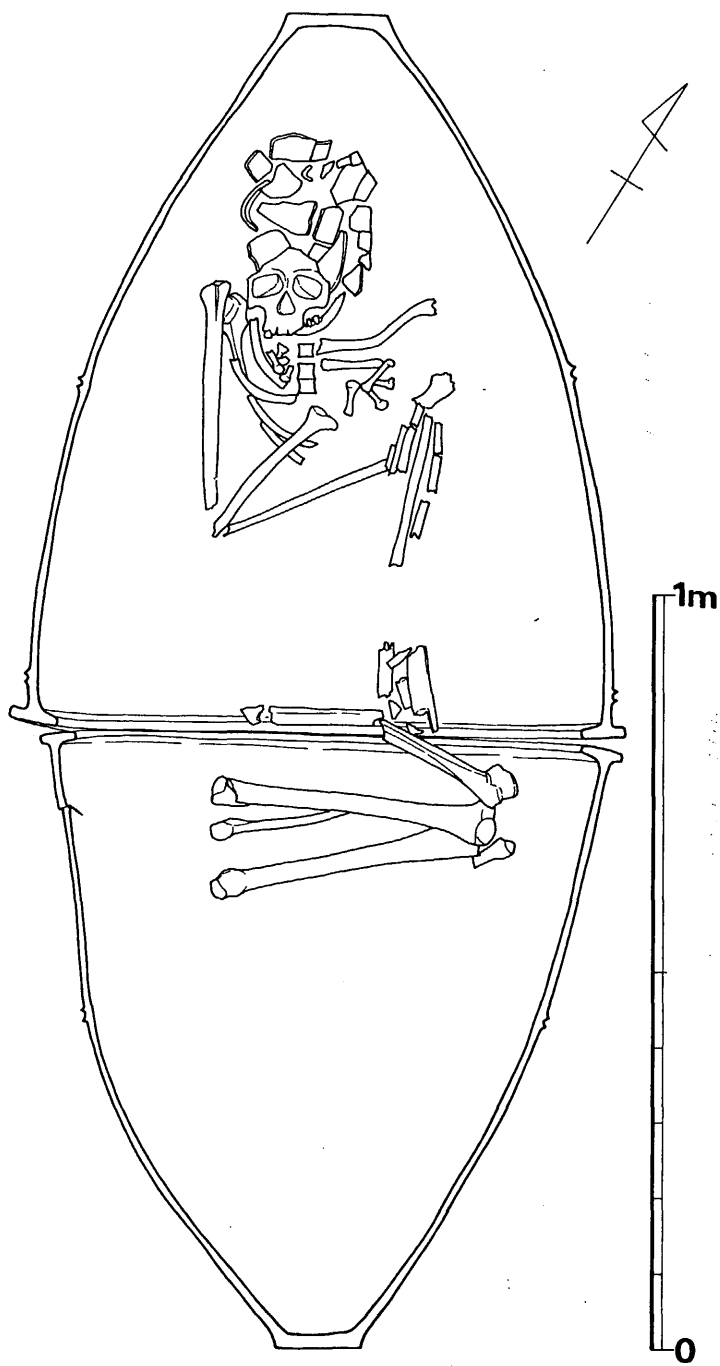
つまり弥生時代中期後半の甕棺墓の隆盛期であると、わずかな面積の中に密集して、いくつも重複して埋葬されることが多いが、当遺跡の場合、墓域というものが定められながらも、わりあい空間的にゆとりがあり、かつ、成人用棺の埋葬に規則性がありながら、小人用棺の埋葬に同様な規則性がみられず成人用棺に重複している点に注目すべき点がある。

つまり、小人用甕棺はさきに埋葬された成人用棺と血縁的なつながりがあり、成人埋葬の規則性を無視し、子供は親の傍に葬るという意識のもとに埋葬したものと考えられる。このように成人用甕棺墓と小人用甕棺墓の係りをみると、成人用甕棺においても規則性のわくからはずれた、13号棺と14号棺が12号棺との関連、24号棺と隣接する25号棺との関連をも注意すべきである。前者の場合、12号棺が熟年男子であり、13号棺、12号棺が成年女子であり、後者の場合は24号棺が成年男子で、25号棺が若年で性別不明であり、30代後半の男子と10代の子供であるが、やはり世代差から考えると親と子という血縁的な関係のもとに、24号棺の横に25号棺が埋施されたものと考えられ、前者については、年齢・性別から察しがたいが、やはり血縁的な関係があるものと考えられる。

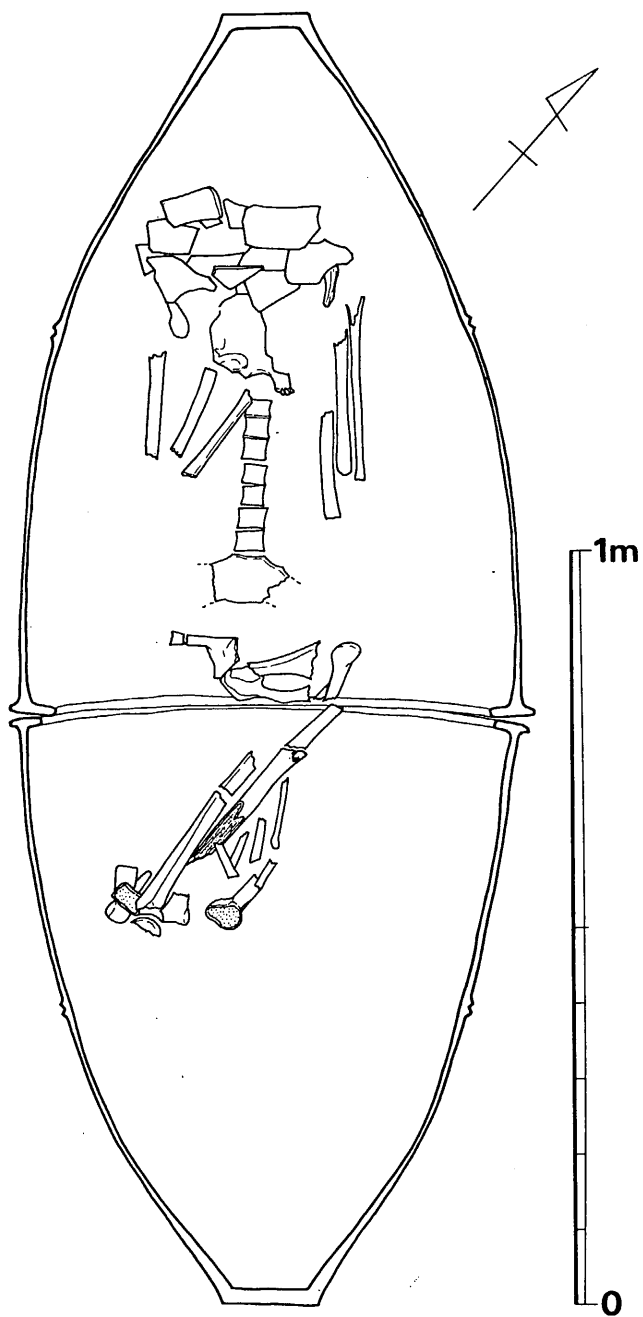
次に前項に記述しているように、当遺跡の場合、若干の小人用棺を除くと全ての甕棺墓は、墓域に横穴を穿ち下甕を挿入し



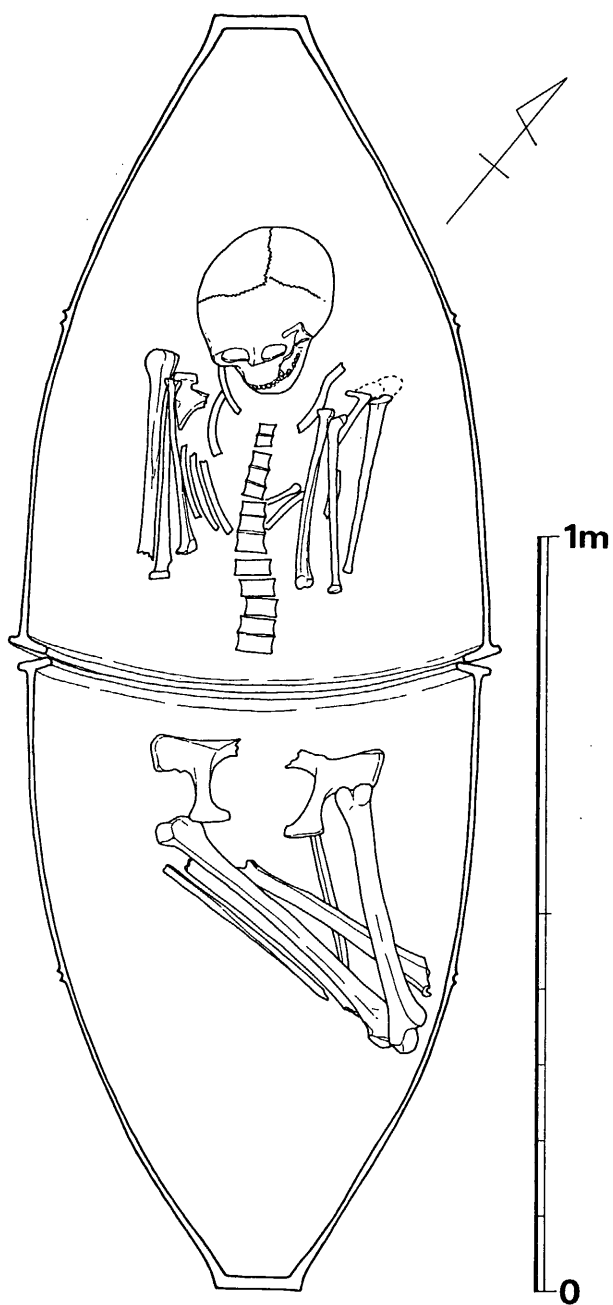
第 53 図 9号人骨出土状態実測図 (3/10)



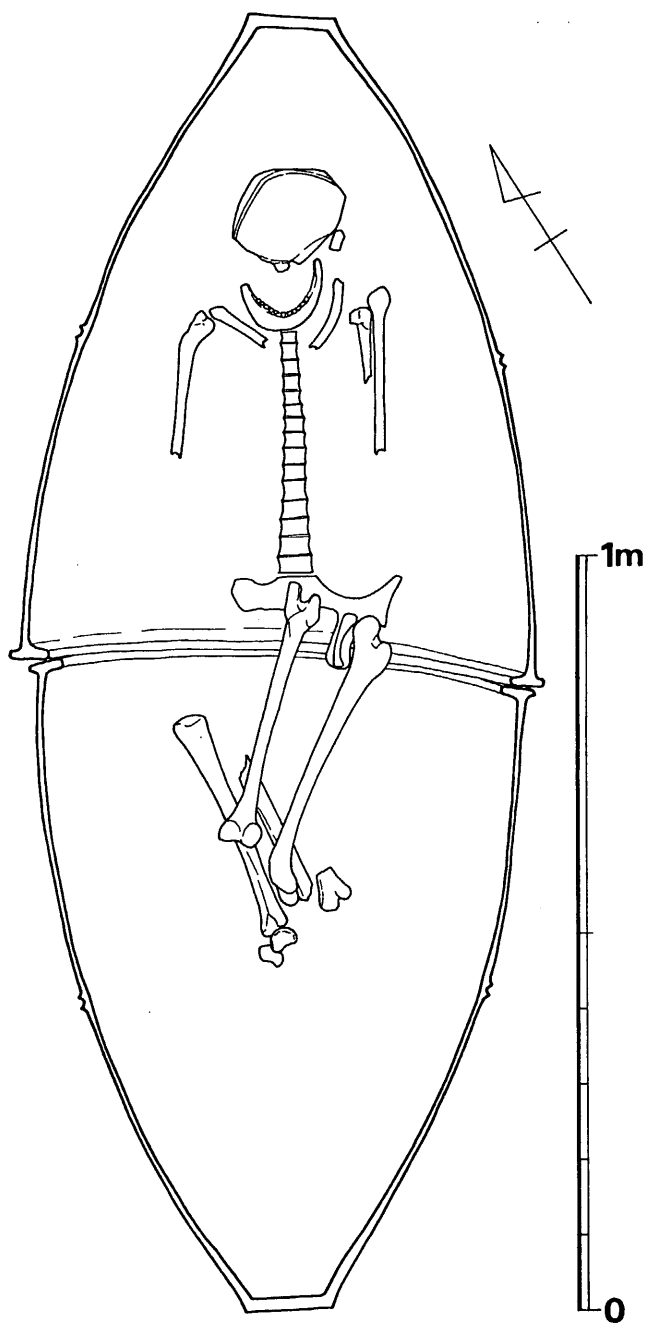
第 54 图 10号人骨出土状态实测图 (3/10)



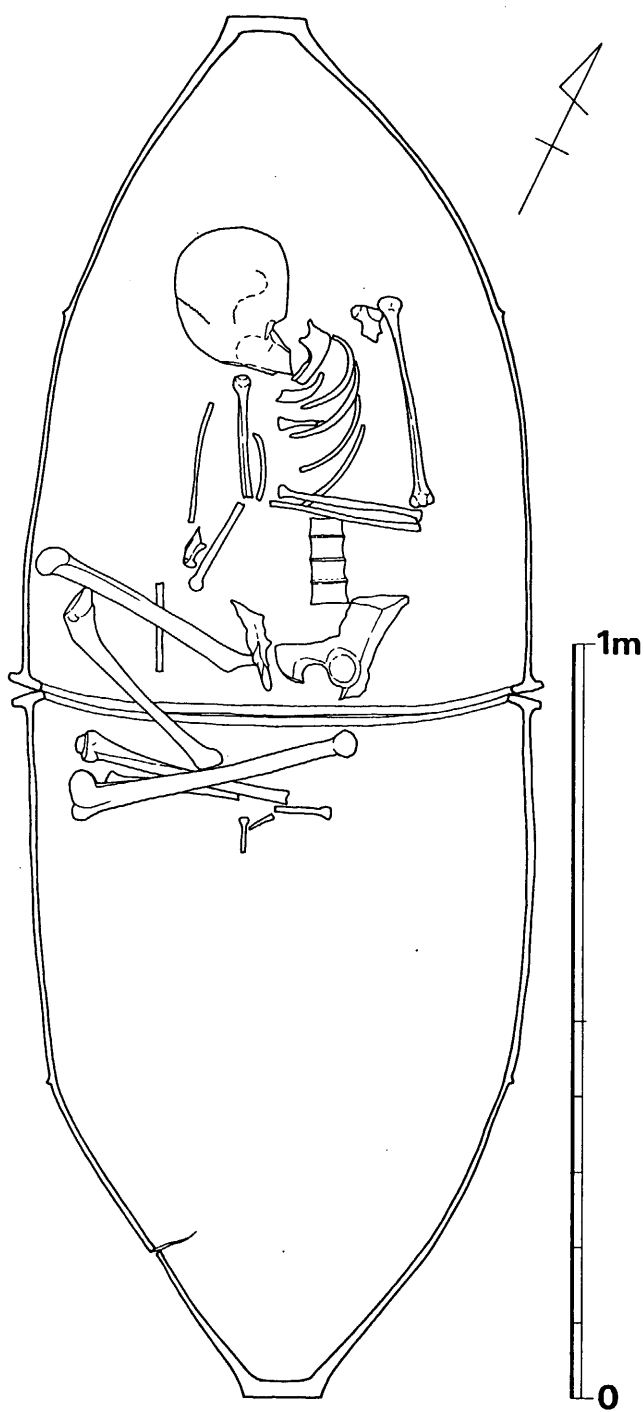
第 55 图 11号人骨出土状态实测图 (1/10)



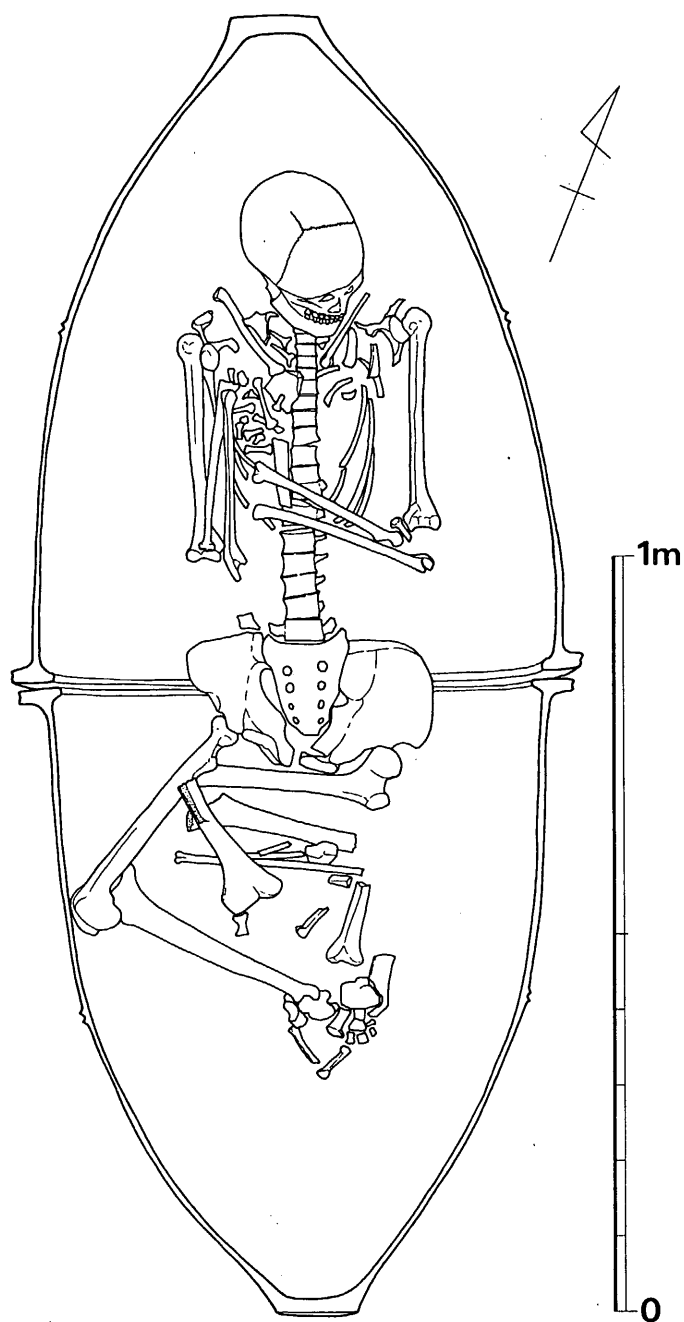
第 56 图 12号人骨出土状态实测图 (340)



第 57 图 13号人骨出土状态实测图 (1/10)

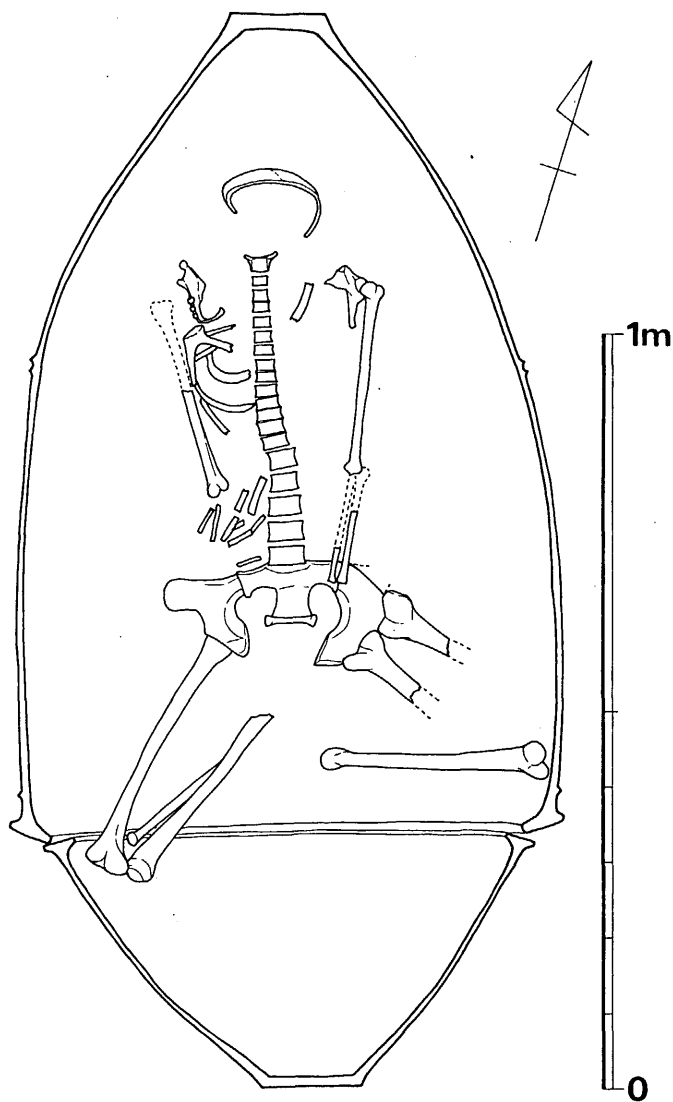


第 58 図 15号人骨出土状態実測図 (1/10)

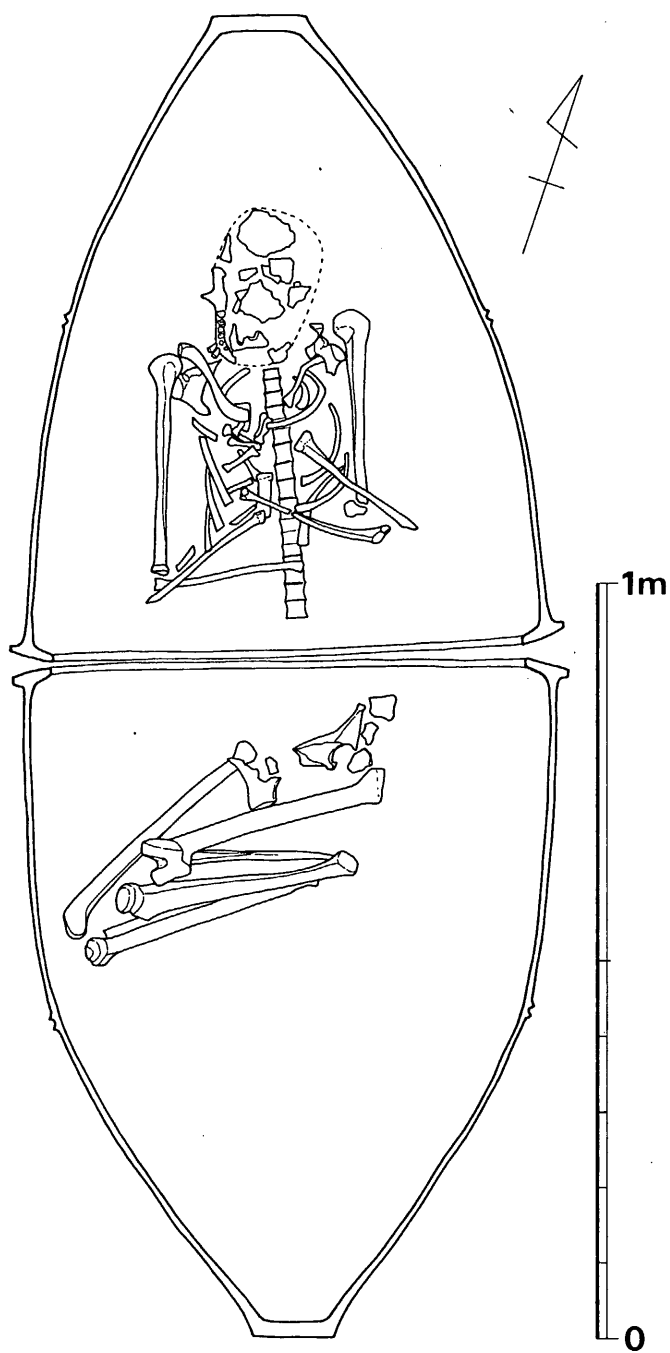


第 59 図 24号人骨出土状態実測図 (1/10)

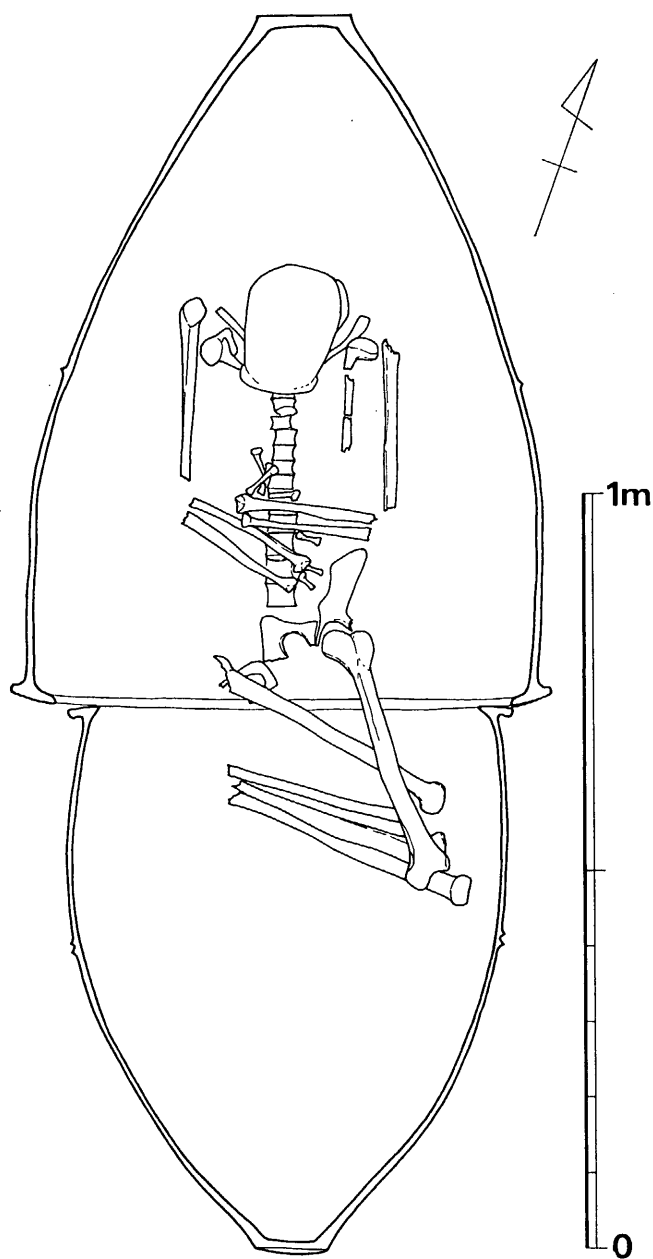
ており，かつ19号棺を除けば，全て合せ口式甕棺墓である。これらは数例を除いて同形同大の甕形土器を使用している。これらの甕形土器は成人用の大形甕と小人用の小形甕とに分けられるがそれぞれにおいて同じ胎土，焼成，整形，作りといって大過無しといえ，この背景として，土器の工作集団の所在が十分考えられる。



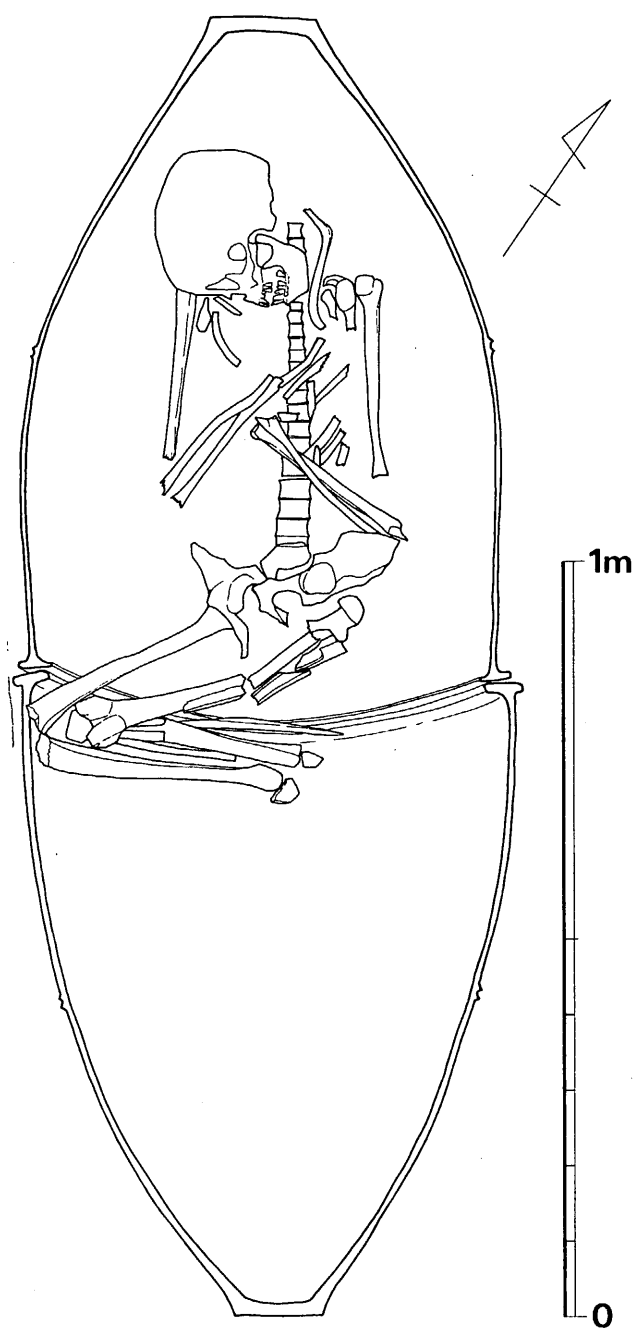
第 60 図 26号人骨出土状態実測図 (1/40)



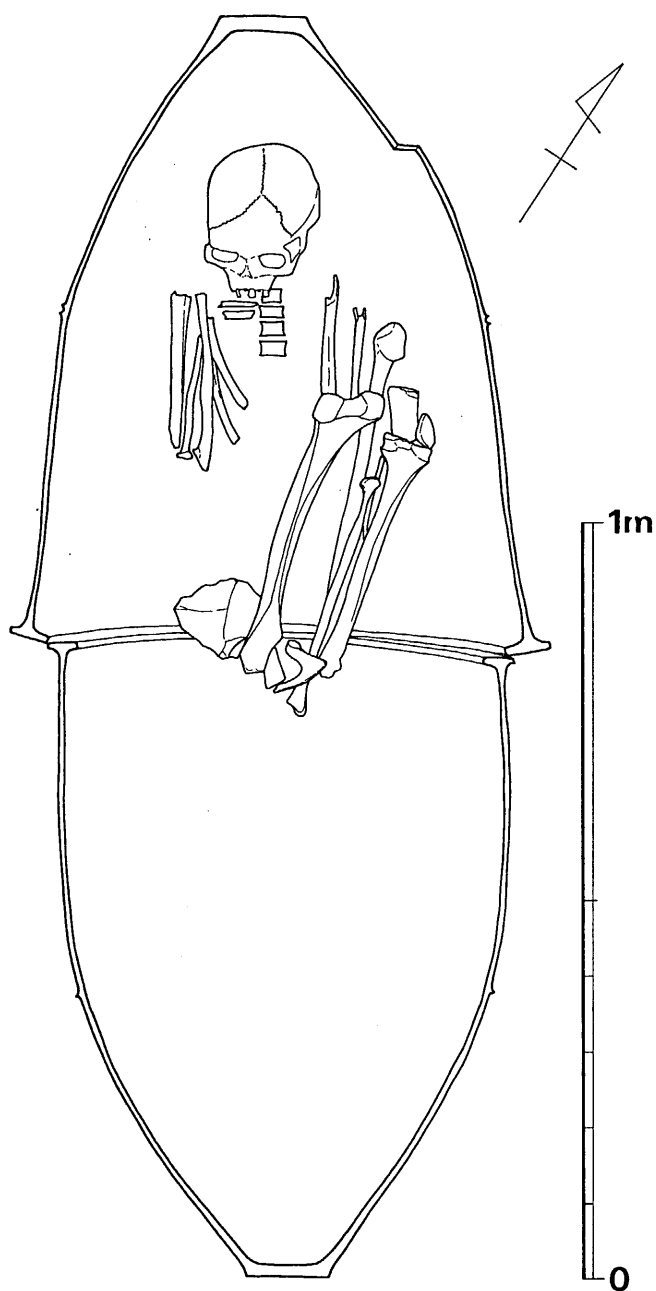
第 61 图 27号人骨出土状态实测图 (1/10)



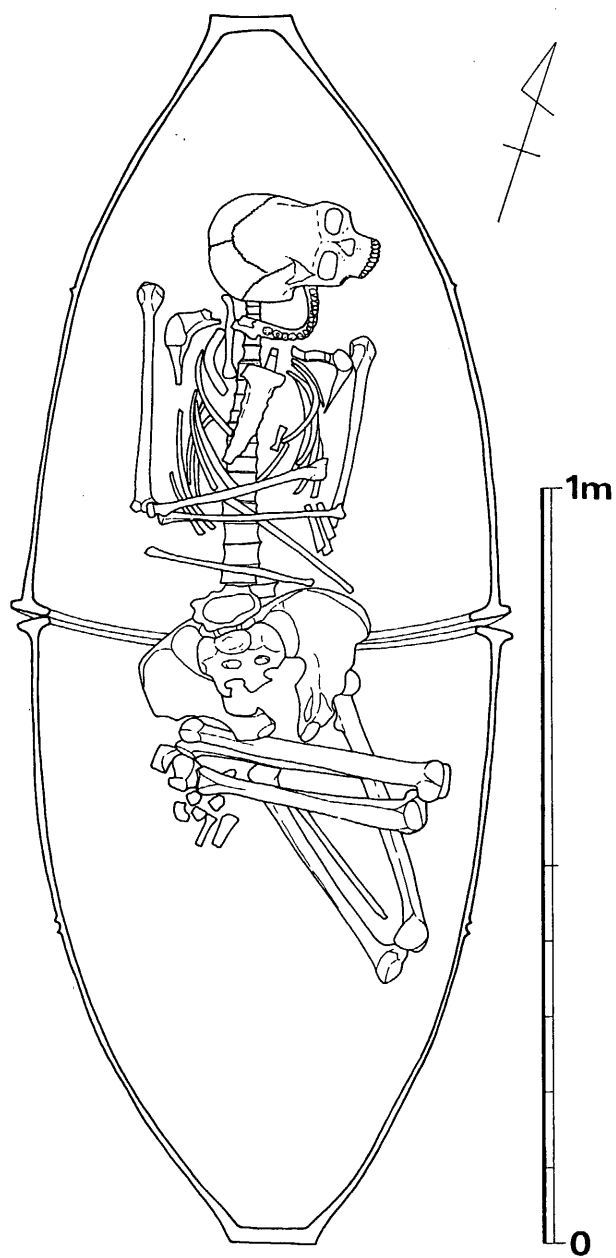
第 62 図 30号人骨出土状態実測図 (1/40)



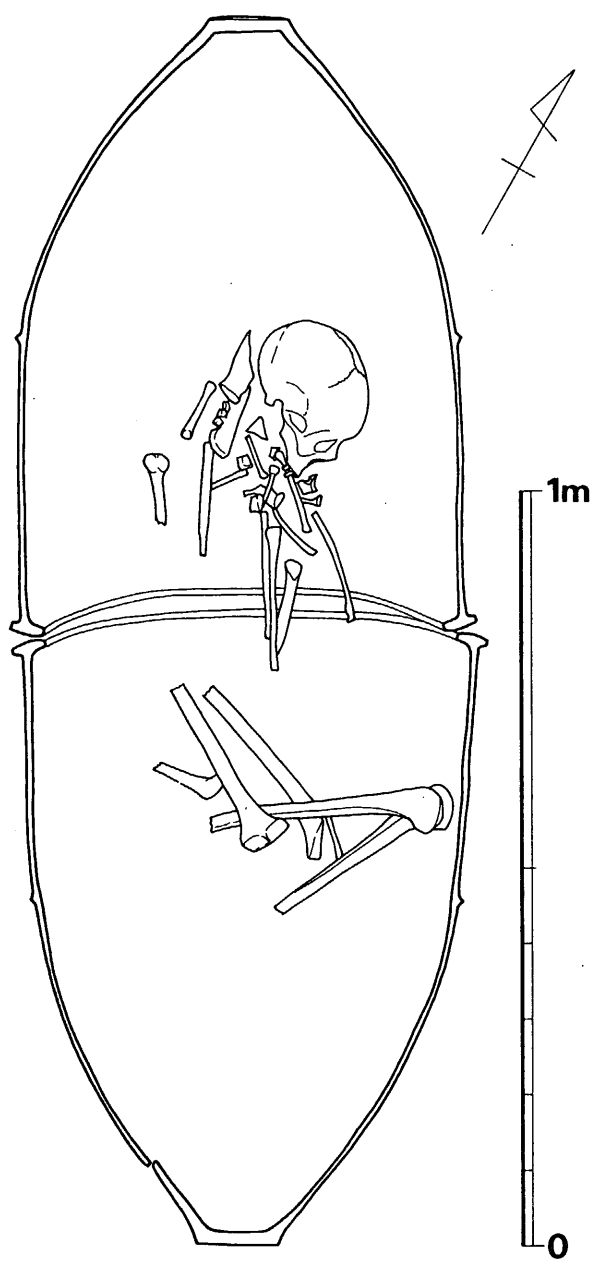
第 63 图 33号人骨出土状态实测图 (1/10)



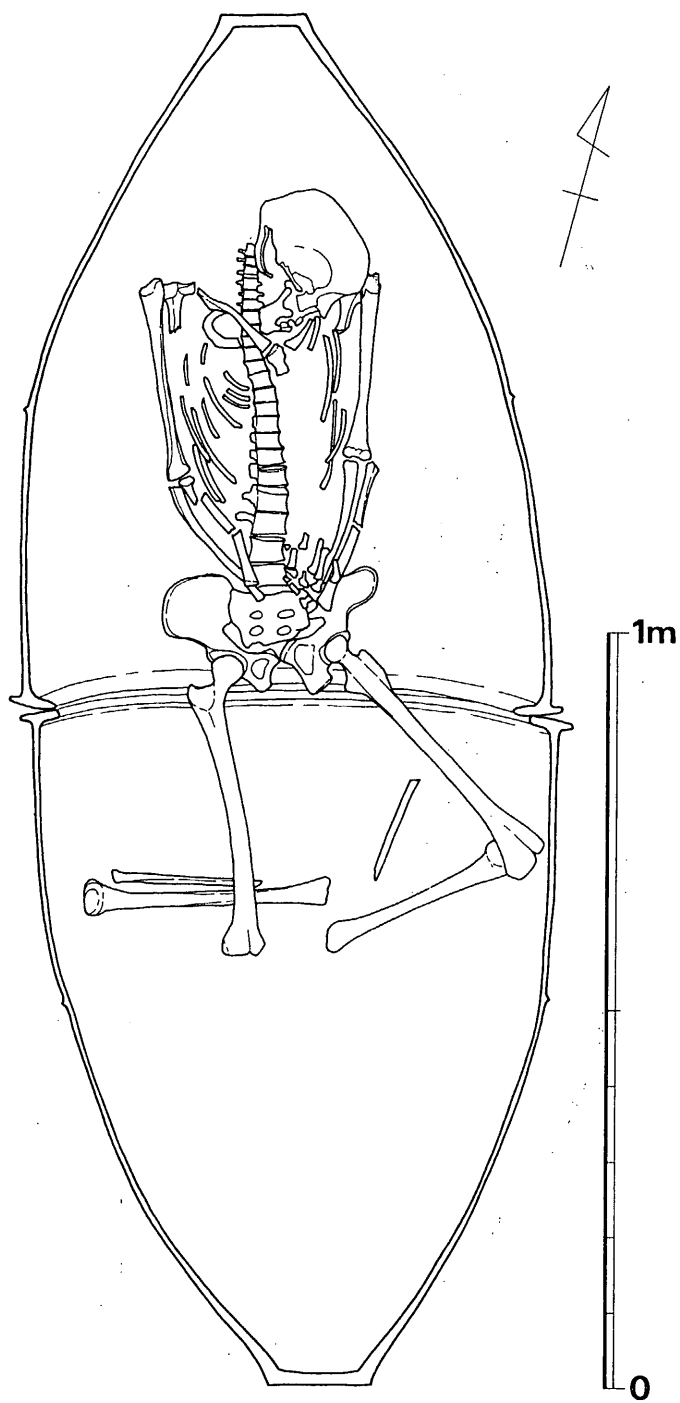
第 64 图 35号人骨出土状态实测图 (1/10)



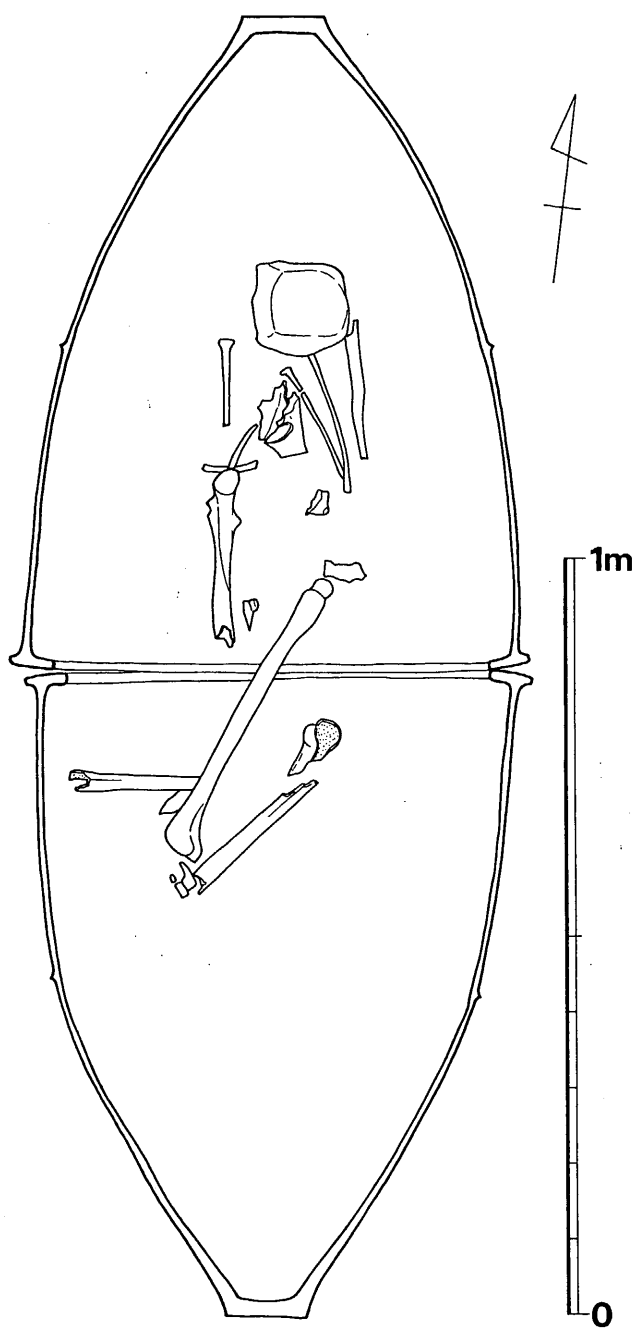
第 65 図 36号人骨出土状態実測図 (1/10)



第 66 图 38号人骨出土状态实测图 (1/10)

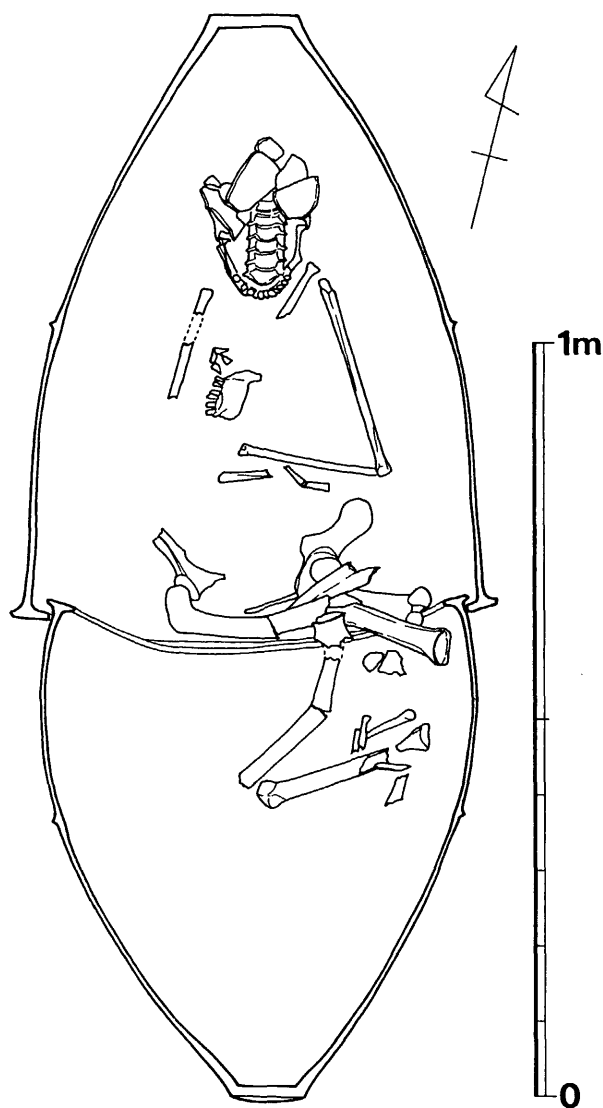


第 67 図 39号人骨出土状態実測図 (1/10)

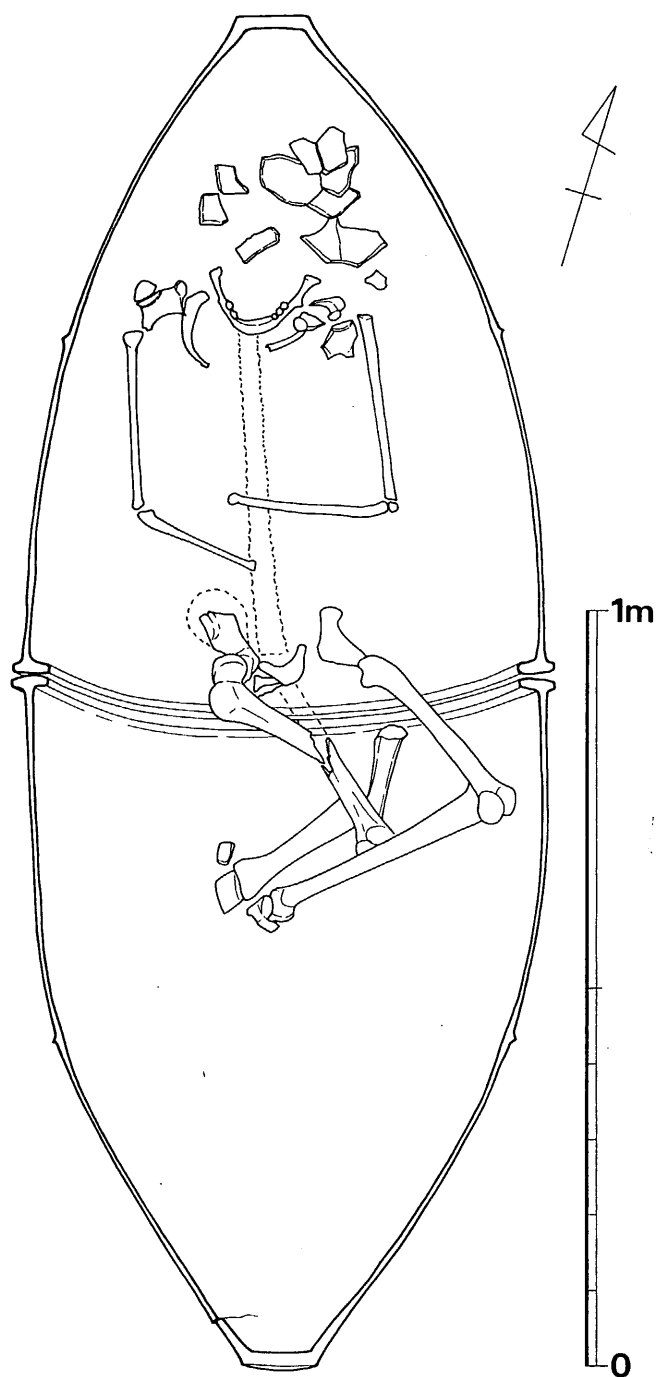


第 68 图 41号人骨出土状态实测图 (1/10)

なお、甕棺内に人骨の遺存していたのは27体であったが、うち埋葬状態を図化できたものは23体（第52～70図）であった。これらは実測図を掲載したが、遺体の埋葬—安置の方法についてみると、成人骨についてのみであるが、仰臥で両膝をあわせ立て、腕を曲げることを基本としているように考えられ、遺体の大半は立てた膝が左右のいずれかに倒れたり、両側に開いたりしている。腕は両手を胸部で交叉するように組んだり、指先がそれぞれの肩にくるよう曲げたり、あるいは、下腹部に手を置いており、手の位置に定めない。9号棺（第53図）及び35



第 69 図 44号人骨出土状態実測図 (1/10)



第 70 图 48号人骨出土状态实测图 (1/10)

号棺（第64図）の人骨のように極度な屈位をとり、股関節及び膝関節において強く曲げられているものもある。また、額部に丹の附着せるものが6体ある。いずれも成年、熟年である。また額に蓆の附着しているものもあり遺体に蓆を覆せたものと考えられる。

図でみるように、9号、35号棺人骨を除けば他は、股間部付近が、棺の合せ目に位置していることがわかるが、これは遺体を埋葬する際に、下甕に頭から入れ、股間部付近まで遺体が入ったときに、上甕に下半身を入れると同時に上甕による蓋をして、合せ部に粘土目貼りを施したものであると考えられる。使用された甕形土器の大きさを考慮すると、当然考えられる埋葬方法であり、無理をして下甕に納めてしまうと、9号や35号棺人骨のように極度に遺体を屈曲させねばならないこととなる。

なお、甕棺は19号棺を除けば、ほぼ同形同大の甕形土器を組み合わせることを原則としているが、これは使用した甕形土器の大きさからして当然考えられる措置であり、この時期における通例の葬法であり、ひいては前述のような遺体安置の方法を取らざるを得なかったのであろう。

第 6 結 び

これまで、宝満川上流地域における弥生時代の墳墓の調査は数多いが、完掘された例はあまりない。甕棺墓群の所在する遺跡で完掘されたのは、筑紫野市吉ヶ浦遺跡、道場山遺跡である。

本遺跡は、遺跡の北端が未確認であるが、一応遺跡の概要を知り得ることができた。

本遺跡の甕棺墓の所属年代は、小人用棺の小形甕や壺形土器および堅穴や溝内より出土した壺形土器からして、弥生時代中期のものと考えられる。

小人用棺使用の壺形土器は、堅穴や溝内から出土した壺形土器と同形のもので、同時期のものであるが、成人用棺の甕形土器は、形態的には古式の様相を示すものが多く、これらは中期中頃より若干古い時期に比定されるものである。ここでいう中期中頃より若干古い時期のものについては、これまで汲田式として取り扱われている場合が多いが、当遺跡のものは汲田式より後出するもので、いわゆる狭義の須玖式といわれる土器より古いものであり、当遺跡では両型式の中間的なものが多く、単純遺跡としてあつかえるものであり、当遺跡出土の成人用棺使用の大形甕形土器を一つの土器型式として「永岡式」と称したいが、詳しくは別の機会にゆずりたい。

中期中頃における甕棺墓遺跡の調査は多々あるが、本遺跡のように成人用棺が二列に埋置されて発見されたものは、春日市大字上白水字門田の門田遺跡において発見されているのみである。時期的には同時期のものであるが、ある一定の墓域内に整然と二列に埋置している状態

は、当時の遺体埋葬にかかる葬制を知ることができ、本遺跡の場合、永岡丘陵上にいくつかの集落跡と墓地が所在し、これら遺跡群との係りも見のがせないが、甕棺墓の数からして一集落（共同体）の共同墓地と考えられる。

成人用棺は、部分的に相接して埋置されているところがあるが、棺本体への影響はなく、特に12号・13号・14号棺の埋置状態を考えると、既設の棺の位置が、あらかじめ確認されていた上で新しく隣接地に埋置したものと考えられ、これが墓域内に二列に配して成人棺を埋置するという規則とも無関係ではないものと推察される。しかしながら、墓地使用者間に、このような埋置状態が「規則」として意識されていたかどうかの点については、充分究明する必要があるが、少なくとも共通の約束事としてある程度普遍化していたものと考えられる。

小人用棺については、その大半が成人棺に重複しており、このような埋置状態は小人の遺体埋葬にあたって、血縁的に関係のある成人棺の傍に埋葬するという、成人棺の埋置とは異った方法—規則性というものがあったのではないかと考えられる。具体的に示せば、小人棺が重複する成人棺は、9号棺、35号棺、48号棺を除くと人骨遺体は女性であり、母親と子供という血縁関係が充分考えられるのである。

また、当遺跡の埋葬された遺体の死亡年令を考えると、死亡率が幼児期と成年・熟年期に高くなっており、このことから幼年期を生き延びれば、成人に達することがうかがえ、さらには非常に短命であったことも察せられる。

次に甕棺墓は、棺を埋置後速やかに墓壙を埋めていることが調査の過程で確認され、堅穴と溝については、埋土状態から自然埋没であることが確認された。また、棺接口部の目貼りには、地山土であるローム土やこれに粘土を混入したものも使用している。

本遺跡の場合、棺の内外における副葬遺物は皆無であったが、棺使用の土器と溝および堅穴から出土した土器について観察すると、これらの土器は大小を問わず、いずれも胴下部および底部の一部が焼成時の加熱により黒色化しており、大形甕の場合、胴上半部の器面の剝落が他面に比べ著しいことから、焼成にあたっては、器の下方より強く加熱して行なったものと考えられ、当時の土器焼成方法について何らかの手掛りとなり得るものと考ええる。

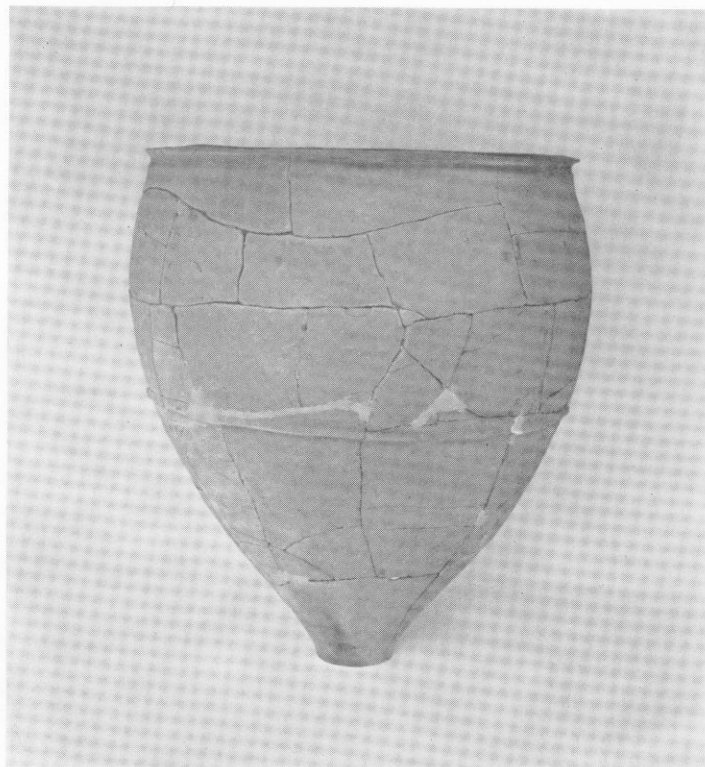
溝や堅穴から出土した土器は、器面をヘラにより研磨し精製されたものであるが、所謂供献用として丹塗磨研土器が祭祀跡から発見されるが、本遺跡出土のものは、これら供献用土器とその製作方法に非常に類似し、単に丹塗りを施すまでに至らず、かねてより供献用の土器として製作されたものと考えられる。

なお、小人用棺の場合、使用される土器が日常用器の転用といわれているが、8号棺の場合上甕に日常の炊飯に使用していた痕跡のある甕形土器を使用しており、これまでその実例が示されていなかったことから貴重な資料といえる。

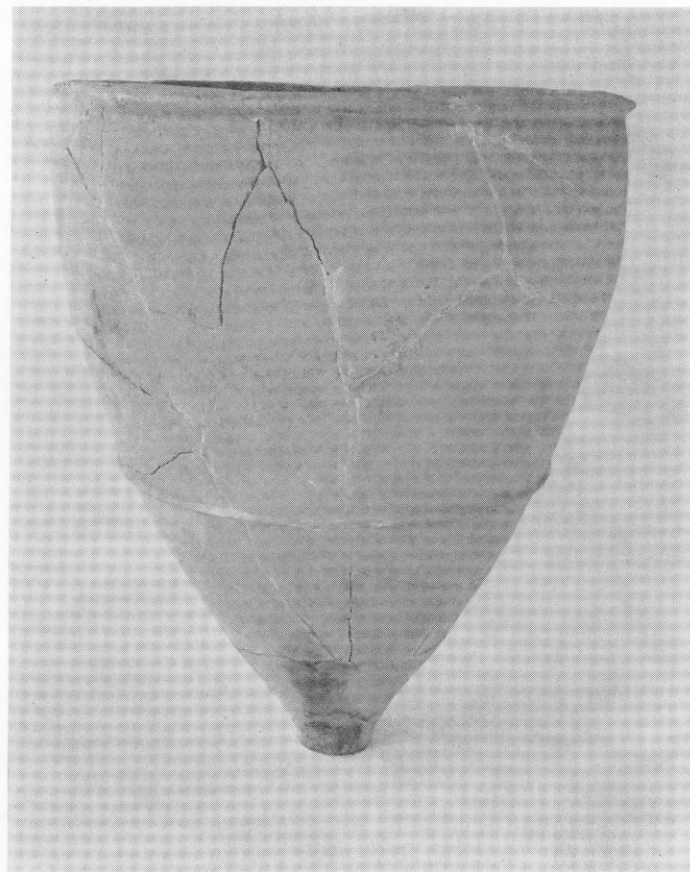
弥生時代の墳墓については、種々論議されているところであるが、北部九州における埋葬方

法の一つである甕棺墓については、数多く調査されながら、不明な部分が多く、十分に把握しきっていない状況であり、本遺跡の報告が、今後この分野における研究の一助になれば幸いである。

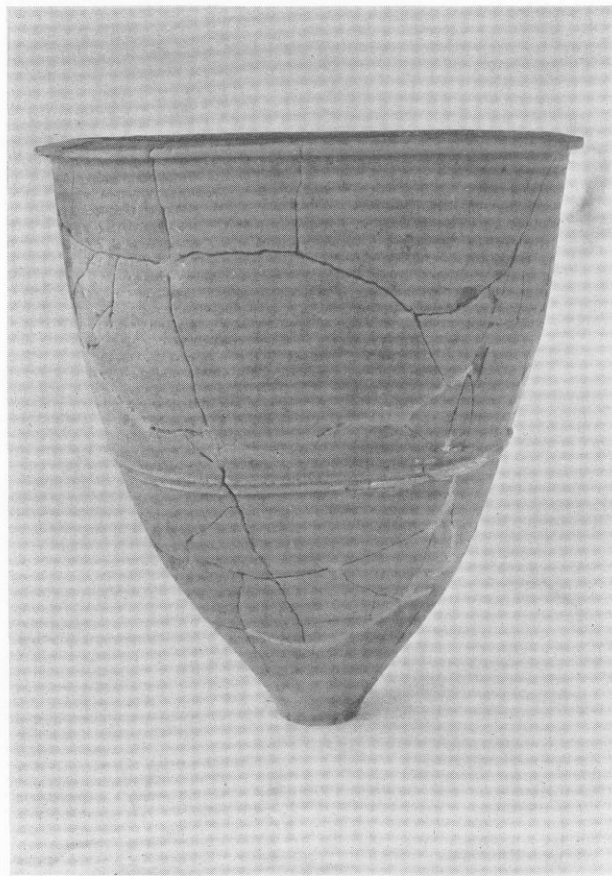
図 版



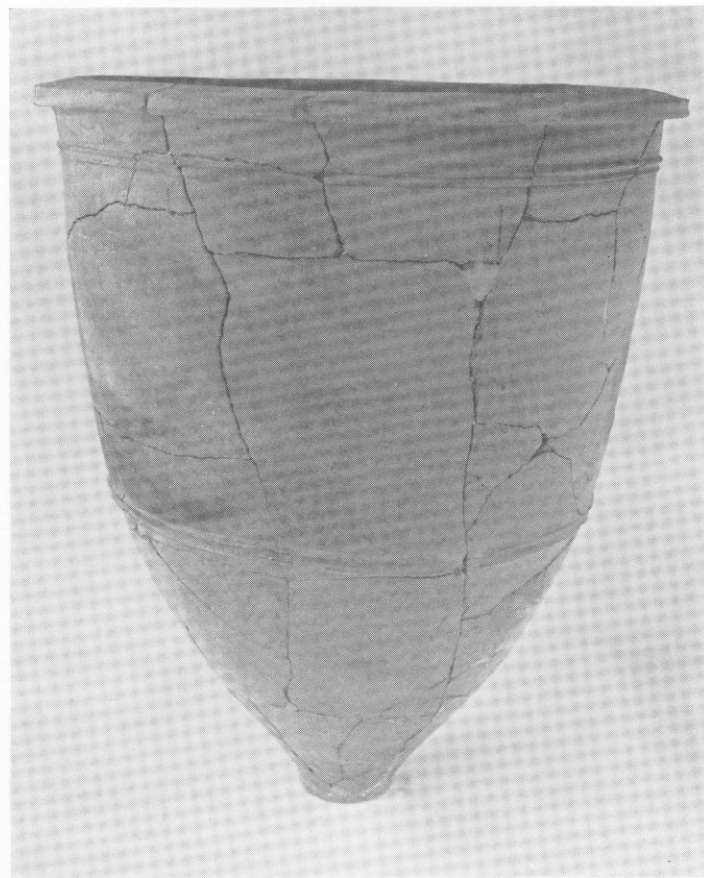
(2) 9号甕棺上甕



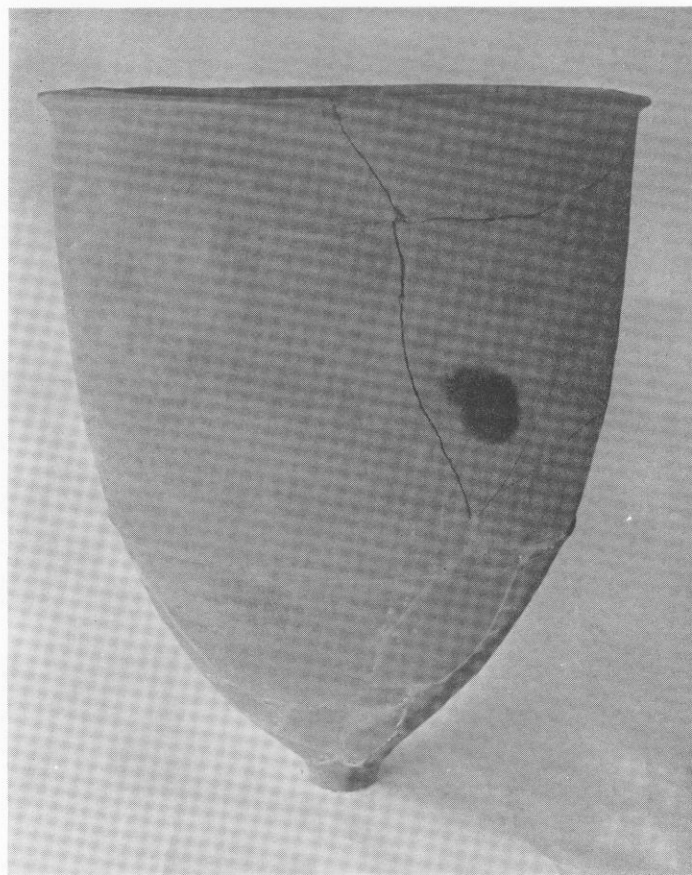
(1) 1号甕棺下甕



(2) 11号甕棺上甕



(1) 10号甕棺下甕



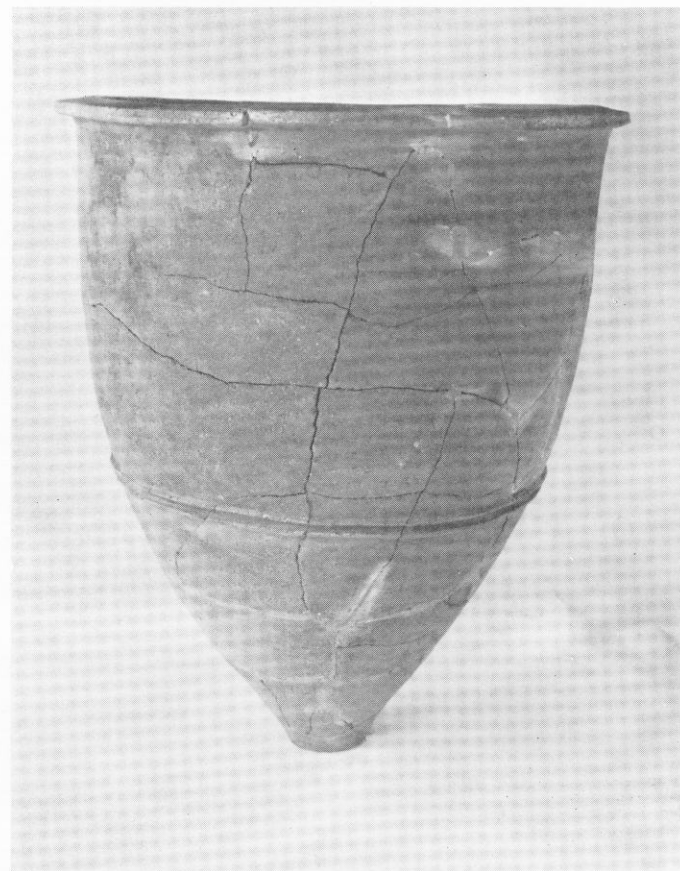
(2) 15 号甕棺上甕



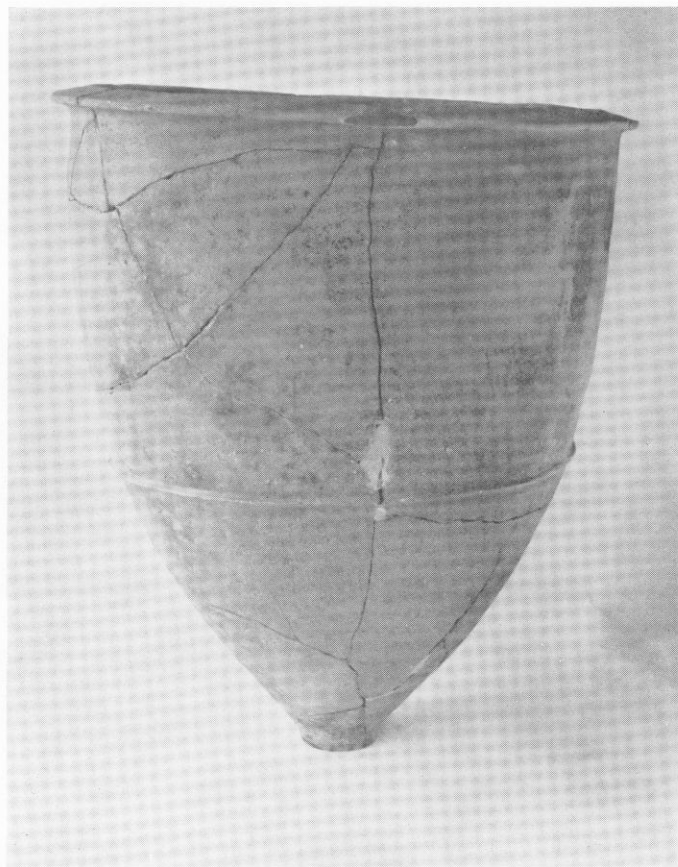
(1) 12 号甕棺下甕



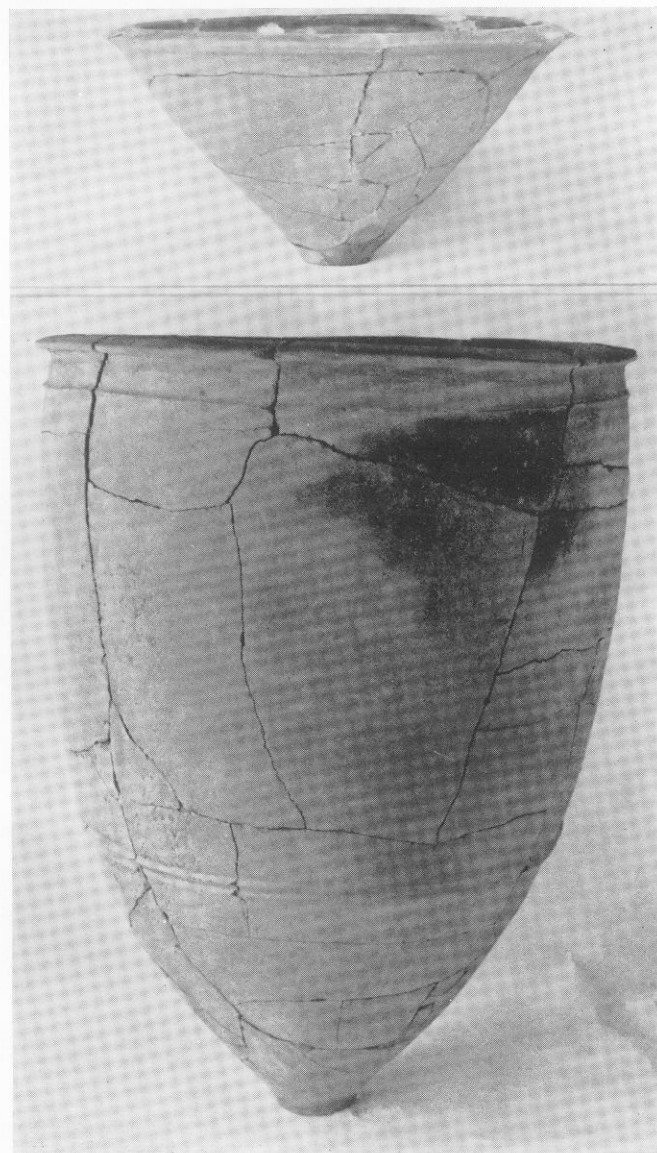
(2) 24号甕棺下甕



(1) 24号甕棺上甕



(2) 30号甕棺上甕



(1) 26号甕棺上・下甕



(2) 27号甕棺下甕



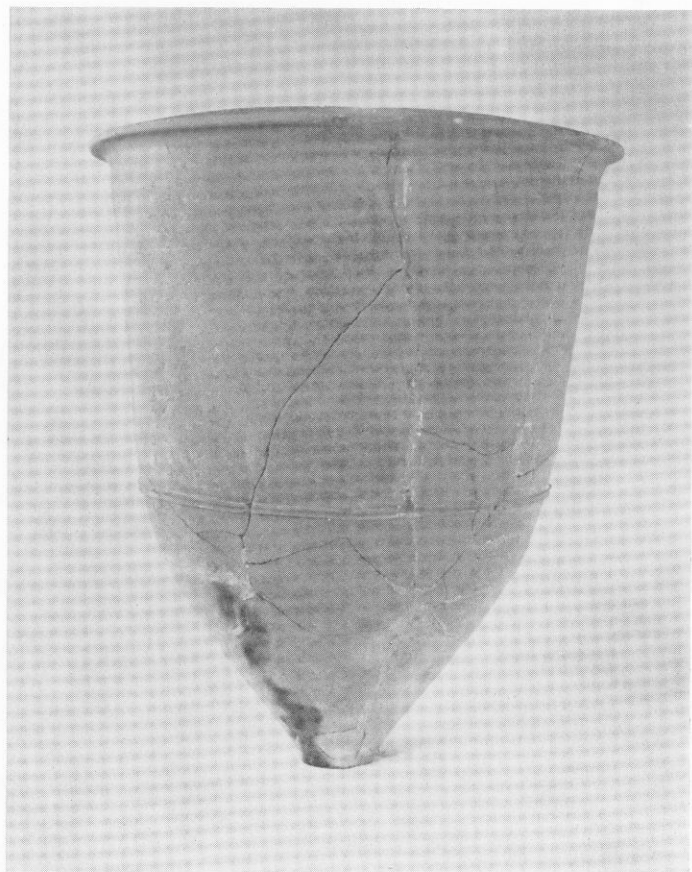
(1) 27号甕棺上甕



(2) 36号甕棺上甕



(1) 33号甕棺上甕



(2) 35 号 甕 棺 下 甕



(1) 35 号 甕 棺 上 甕



(2) 42号甕棺下甕



(1) 42号甕棺上甕



(2) 44号甕棺上甕



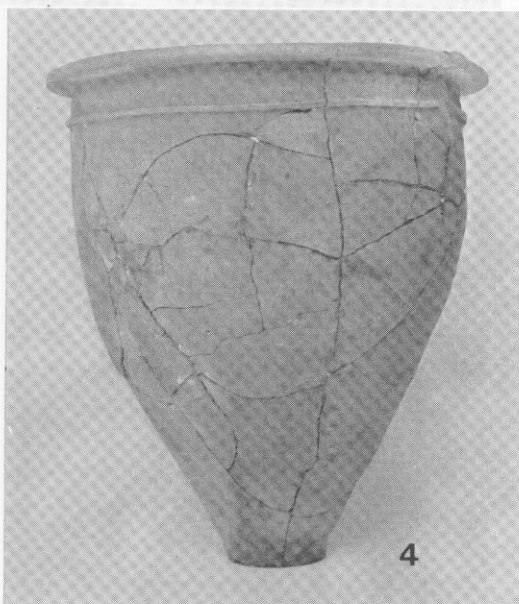
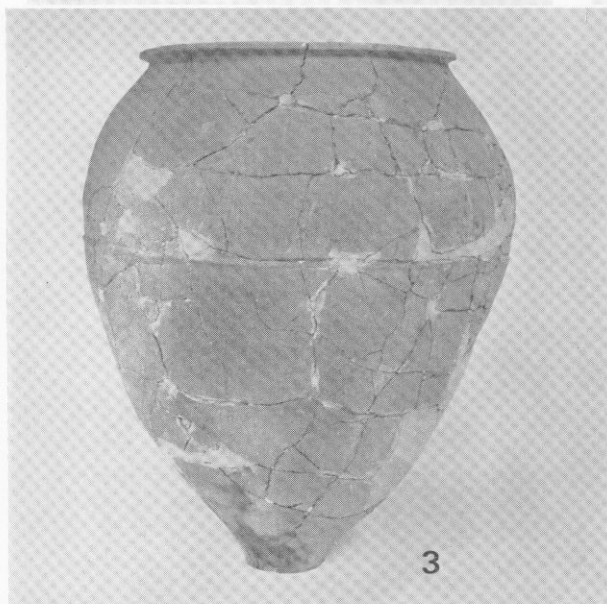
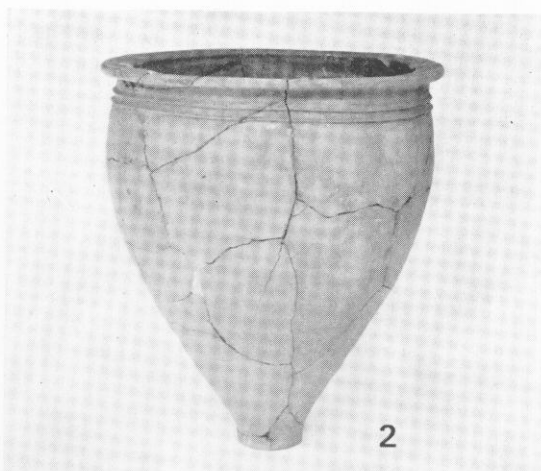
(1) 39号甕棺下甕

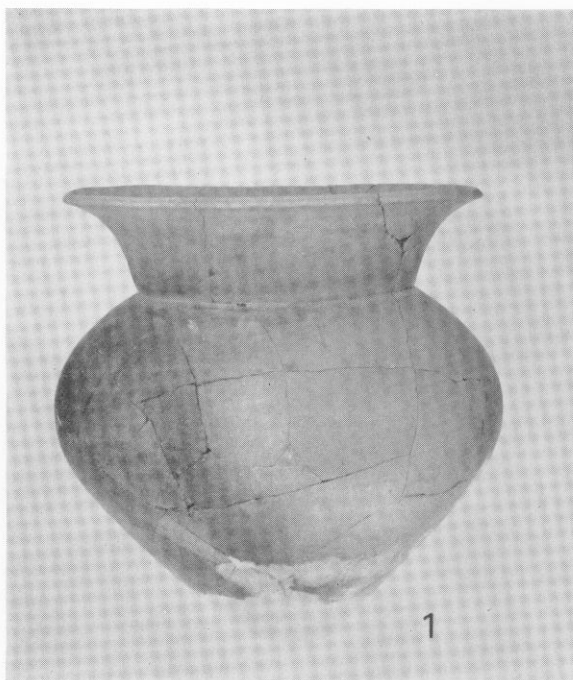


(2) 48号甕棺下甕



(1) 48号甕棺上甕

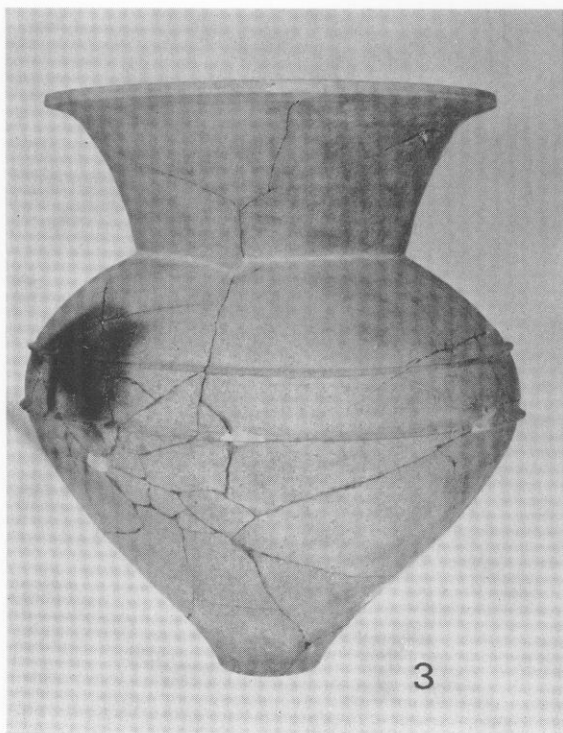




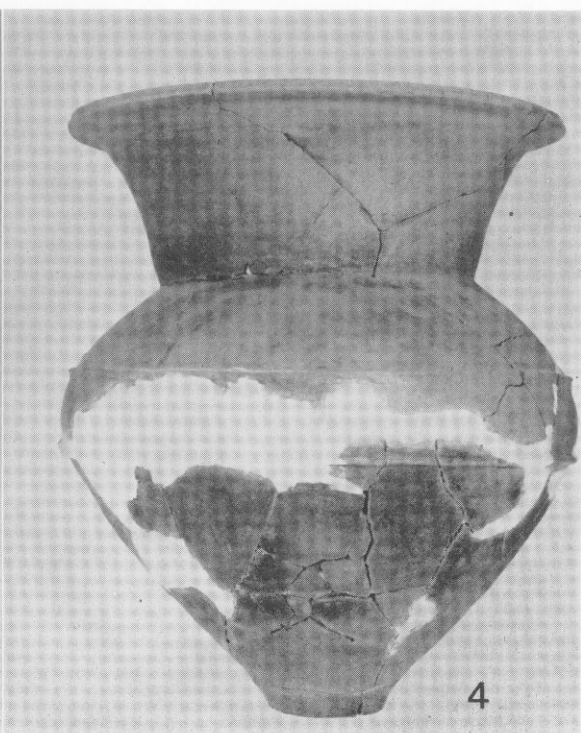
(1) 3号竖穴出土



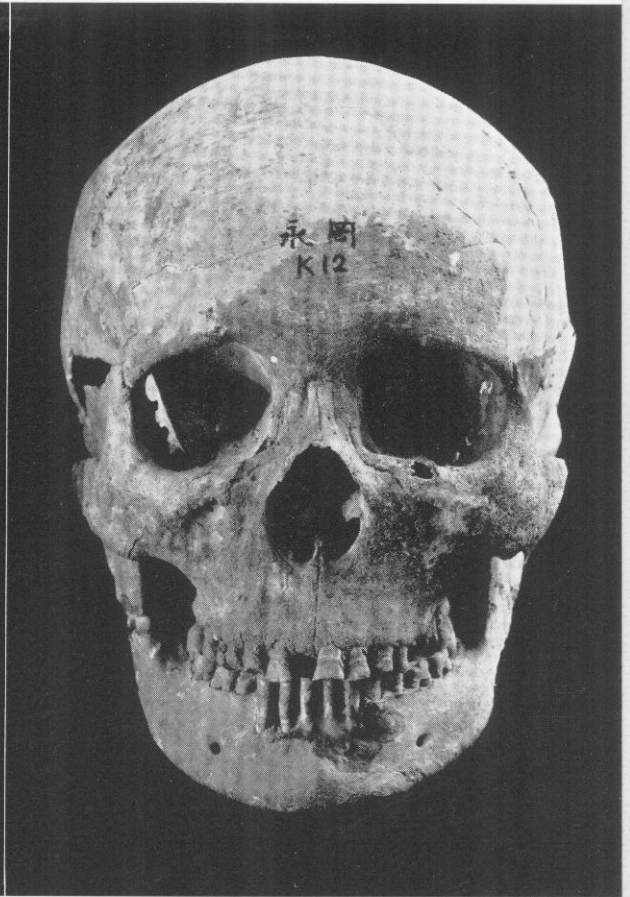
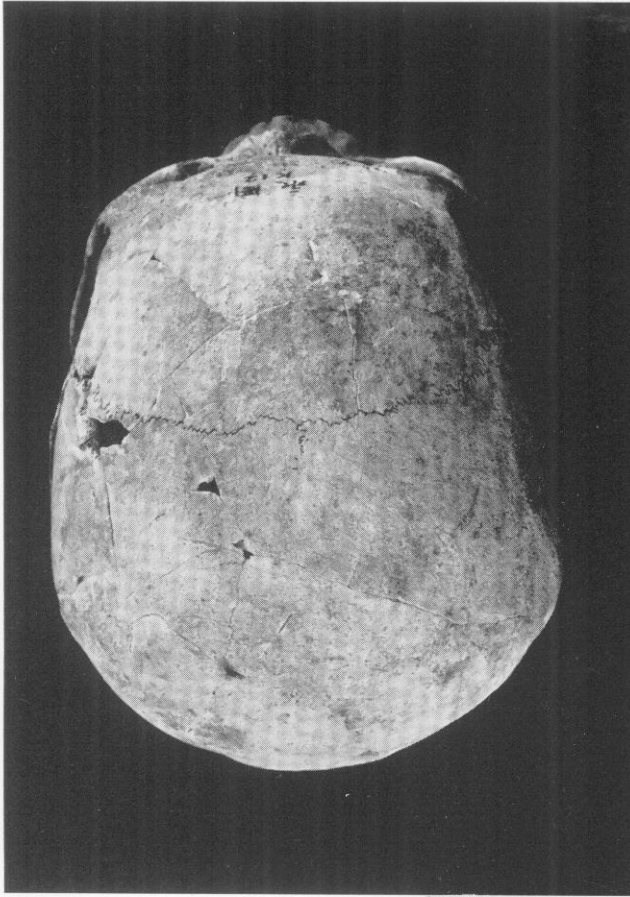
(2) 7号竖穴出土



(3) 3号竖穴出土



(4) 5号竖穴出土

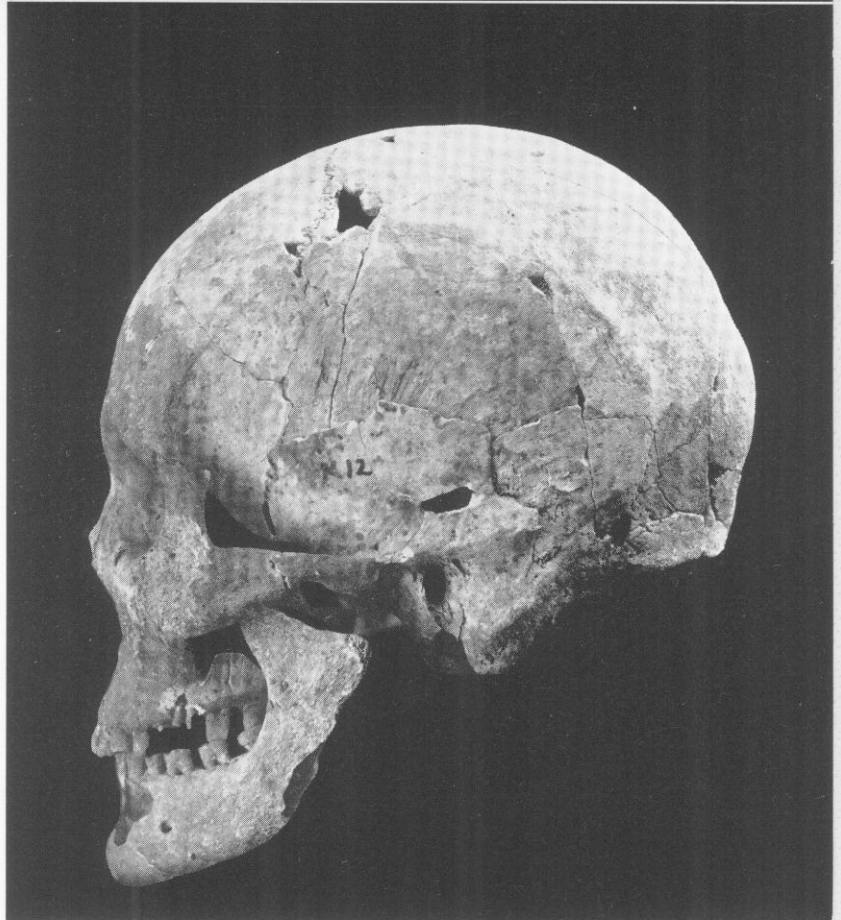


12号龜棺人骨

右上：正面観

右下：側面観

左上：上面観



**福岡南バイパス関係
埋蔵文化財調査報告
第 5 集**

昭和52年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6街区29号

印刷 株式会社 天地堂印刷製本所
北九州市小倉南区大手町10番18号